
そうきたか.....異世界よ.....

蛇真谷 駿一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そづきたか……異世界よ……

【Nコード】

N6366U

【作者名】

蛇真谷 駿一

【あらすじ】

勇者として召喚？ めんどくさそうだけど、かつこいいよね？
勇者に巻き込まれて？ 面倒ごとは勇者に任せて、意外と楽しくやれそうじゃない？
神様の手違い？ 手違いなら、なんかチートな能力ぐらいもらえそうだよな？

これは、割と普通の高校生の日野龍也が、魔族やら魔獣やらがいる世界で、魔術やら魔陣やら変人やらのせいで、ちよつと不憫な目

零話（前書き）

えー、無謀にも二つ目の投稿を始めてしまいました。

多少スローペースになってしまいかもしれませんが、アイディアが出ている限りは書きつづけます。

温かく見守ってやってください。

そして、もう一つのほうも読んでいただけるとありがたいです。

零話

「ただいまー……つつても、誰もいないんだけど」
帰宅するなり、日野^{ひの} 龍也^{りゅうや}は一人呟いた。

彼は高校一年生、勉強も運動もよくて、中の上の割と普通の高校生。

変わっていることと言えば、悪い予感的中率ぐらいだ。
しかしこれはバカに出来ない。悪い予感にだけ関して言えば、それはもう予言に値すると、周りには言われていた。

「さてと……」

と、彼はいそいそとコタツに入り始めた。
ちなみに現在六月中旬。いくら北国といえど、既にコタツは仕舞われるべき物である。

「コタツは人類最強の発明」

彼の両親は、出張が多く、一人っ子の彼はほぼ一人暮らしをしているのと変わらない状態だった。つまり、食事等は自分で支度しなくてはならない。

面倒に思いながらも、龍也は立ち上がろうとした。

ブブブブブツ！

「……メール？」

龍也は携帯を手に取り、メールを確認した。

差出人は、蒼井^{あおい} 樹^{いつき}。龍也の幼なじみで、勝手に龍也を親友扱いする、完璧人間だ。

「なにになに？ 『明日行く所があるから、僕につき合いたまえ』？
なんか嫌な予感するな……」

龍也は勘違いをしていた。

その嫌な予感、明日に関するものではなく、今、次の瞬間のものだということに。

そして龍也は何も考えずに立ち上がり、一步を踏み出

「……は？」

そうとした。

しかし、それは失敗に終わる。

妙な違和感を覚え、足元に目を向けると、

そこには何も存在しなかった。

「はああああああ！！？」

叫び声とともに、龍也は暗闇に落ちていく。

零話（後書き）

今回は、かなり短めです。

次は、もう少しだけ長めで書きたいと思います。

一話（前書き）

最初はできる限り更新したいとおもってます！

一話

「……った！……うだ！」

なんだ？ 知らない声がする……。

「……う」

ゆっくりと瞼を開くと、怪しげな部屋と怪しげな白髪の男が目に入った。

「……………は？」

掴めない状況に口が閉まらない。

そんな龍也の様子に気づいた白髪の男がゆっくりと近づいてくる。

「むっ！ 目が覚めたようだな」

「……なに、これ……撮影？」

龍也はもちろん状況を把握できていない。当たり前だ。この状況を理解できるのは、幼馴染のような天才か、頭のネジがぶっ飛んでいるようなやつだけだ。

それでも無理やり自分を納得させようと、思考出来ているのは、天才と多少なりとも行動を共に行動していたおかげかもしれない。

「サツエイ……？ なんだ？ それは？」

しかし現実には龍也の思考をはるかに上回る。

「まあ、いい。私は偉大なる魔陣師^{ましんし}であり、上位の魔術師でもある。ブーゼ・ゲニー様だ！」

「……はあ」

当然、龍也はついていけない。いきなり、魔陣師だの魔術師だの言われたところで、理解ができるはずもない。ブーゼ・ゲニーって変な名前だなーぐらいにしか思っていないのだ。

ただ、本当にこれが撮影などではないとしたら、単純かつ現実離れした結論にたどり着く。

ここは異世界で自分がこちらに召喚させられたということ。

龍也が持っている最後の記憶は、自らの部屋で飯を作るために立ち上がったところまでだ。——いや、その後に妙な浮遊感を感じたのも覚えている。

正直何かの撮影だと言う説明も無理があるとは思っていた。

それに、先ほどから気にはなっていたのだが、目の前にいるこのブーゼ・ゲニーとか言う男。白い髪はまだしも、目の色が紫色なのだ。はつきりとわかる訳ではないが、カラーコンタクトでもないようだ。

「どうやら君は言葉をわかるのだろうか？ さっきも何か言葉を発していたしな。さあ、話して見たまえ」

「……ここは……」

「ここか！ ああ、そうか。貴様はまだ状況を把握できていないのか。ははは！ 聞きたいのは何だ。今いる場所か？ 国か？ ……世界か！？」

喋ってみると言ったにもかかわらず、少し言葉を聞いただけで、一人でしゃべりだしてしまう、ブーゼ・ゲニー。——うっぜ。

「まあいい、全てを説明してやろう。ここは、世界の名は『ヴェルトクエント』。今いるこの国の名は『アインラント』。そしてこの場所は、このブーゼ・ゲニー様の研究室だ。ここまでで大体わかったと思うが、言わせてもらおう。ここは貴様にとっての異世界だ」

「はあ」

「ほお、意外と納得するのが早いな。もつと狼狽するかと思っていた」

「いや、状況を考えれば、そうなるでしょう。常識やら何やらは横に置いてくとして」

「ふむ。頭の回転が速いのは好ましい。ならば次は、なぜ貴様がここに召喚されたかというところ」

パターンでいくと魔王が現れたとか。

「この世界に魔王の存在が確認された」
やっぱりですか。

「魔王の力は強大で、我々だけではどうしようもなかった。そこで一つの希望に賭け、異世界より勇者を召喚することにした」
王道ですね。

「以前にこの世界に偶然迷い込んだ異世界人は、この世界に新たな可能性を置いていった」
どうやら、勇者召喚うんぬんの前に、異世界から人が来ていたらしい。

「そのこともあり、勇者召喚は世界中から望まれるようになった」
「はあ。で、俺が呼ばれたわけですか。俺が勇者になるんですか？」
正直な話、考えるだけで鬱になる。世界中から望まれているなら、絶対に目立たなければいけない。そんなのは、あいつ、だけでいい。なにより、自分たちでどうにかしなければいけない問題を、ほかの人間に頼むという根性が気に入らない。

「いいや、違うぞ？」

「は？」

予想と違う返事に龍也は大いに戸惑った。

「勇者召喚の儀式は正式に二月後に決定した」

「は？　じゃあ、俺は何？　何でここにいらんだ？」

「何を言っている。予行練習なしのぶっつけ本番で、失敗などしたらどうするつもりなのだ？」

「……言っている意味が」

「だから、貴様は練習のために呼ばれたんだ」

.....

「勇者召喚の魔陣は、貴様に使われたような、ただ異世界からの召喚だけではなく、神の祝福という付加効果のある術を使う。これで、勇者の力はさらに増幅される」

.....

「まあ、貴様も異世界から来ただけあつて、魔力は相当に高いな。どうだ？ 二カ月後に召喚される勇者と共に魔王を倒さないか？」

⌈
⋮
⌋

「はい？」

[illegible]

どうやら俺は王道の様に勇者として召喚されたわけでもなく、か
と言つて、一緒にいた誰かの巻き添えで召喚されたわけでもない。
もっと言えば、不慮の事故のような、何かの手違いで召喚されたわ
けでもなく。

……ただの練習で異世界に召喚されたようです。

一話（後書き）

もう少し文才がほしいです……。

感想をいただけると幸いです！

二話（前書き）

とりあえず連日更新は今日までで。

それと早速、お気に入りに入れていただいた方々！
ありがとうございます！

二話

龍也の全力の怒りを聞いたブーゼ・ゲニーは、
「うるさいな。何なのだ一体」

なにも気にせずに言っただけだ。

「今の話を聞かされてキレねえやつはいねえよ！」

「なにを言っている？ このブーゼ・ゲニー様の練習実験の成功例だぞ？ 貴様は。何を怒ることがある？」

「てめっ！！ …… いや、もういい……。練習実験とやらが終わったをだったらさっさと俺を元の世界に返してくれ」

「無理だな。帰還の魔陣式は未だ見つかっていない」

「っはあ！？ お前さっき以前に異世界から人がきたって！」

「ああ、確かに来たことがある。そして、自らの世界に帰還した。だが、彼が如何にして世界を渡ったのかは、未だわかっていないのだ」

「じゃあどうやって元の世界に返すつもりなんだよっ！！ 俺も…
…その二カ月後に召喚って言っただけ勇者も！！」

「ふははは！ それをこの私が創るというのだ！ この天才がな！！」

自慢げに話すブーゼ・ゲニーを前にした龍也は言葉を失った。

呆然としている龍也を気にも留めず、自称天才は続ける。

「ふむ。望むなら帰還の魔陣式が出来上がったとき、貴様をその練

習実験をやらせてやろう。どうだ？ 光栄だろう？ …… っと、そういえば名を聞いてなかったな。貴様、名は？」

さっさと言えと言った顔をするブーゼ・ゲニーにいやな顔をしつつ、答える。

「…………… 日野龍也だ。リユウヤ・ヒノの方があつてるのか？」
「いや、リユウヤが名前なのだろう？ だったらヒノ・リユウヤで合っている。以前にここに来た異世界の来訪者も同じ事を言っていたらしいしな。…………… そうかリユウヤか。先ほども言ったが、私はブーゼ・ゲニー。気軽にブーゼ様と呼べ」

「黙れ。糞野郎。俺はお前が憎くて仕方ないぞ」

「む。何故だ。私が召喚の魔陣式に組み込んだのは、暇そうなやつを連れてくることだ。リユウヤ。貴様が呼ばれていたと言うことは、暇だったんだろう？」

何もわかっていない様子の自称天才にはつきりと告げる。

「お前むかつく」

「それなのか！？ 憎しみの理由は！？ …… まあ、それはいい。何故かよく言われることだ。気にはしていない。それより、先ほども言ったが、リユウヤは魔力が強いようだ。恐らく異世界からの来訪者の特徴なのだろう。どうだ？ 魔術でも覚えてみるか？」

気にしていないと口では言っているが、どう見ても気にしている。そして何故かよく言われる…………… と言うことはこいつは自覚していないと言うことか。

自分のウザい性格を。

「……って、魔術ってんな簡単に覚えられんの？」

「ふふふ。リユーヤよ、聞いていなかったのか？ 私が最初に言ったことを」

その質問を待ってましたと言わんばかりの顔をして、ゲニーが言った。

それすらもむかつくのだが、気にしていたらキリがない。

恐らく、一番の対処は関わらない事。それが無理なら第二に無視することだ。

「……………」

「そう！ 私は偉大なる魔陣師であり、上位の魔術師でもある。ブーゼ・ゲニー様だ！ 魔術を教えることなどたやすいわ！」

訂正。無視しても付け上がるようです。

それにしても、こんな友達が一人もいなさそうなやつが、他人に物事を教えられるんだろっか……。

龍也は心の中でため息をつきながら、今後自分がどうするべきか必死で考えていた。

三話（前書き）

説明ターンその一です！
わかりづらいのはご了承くださいませ
！

三話

「いいか？　まずわかっていてほしいのは、魔陣と魔術は違う。魔陣はこの世界に古くから伝わる術法であり、複雑な陣を描くことでさまざまな効力を発揮する。だが、魔陣式は高度なため、今では技能の高い人間しか使うことが出来ないのだ。……この私のような！！　はーはっはっはっは！！」

うぜ。

「それはもうわかったから。続きを」

「む？　ああ、せっかちな奴だな。まあいい。魔陣の詳しい説明は後回しだ。今は必要ないからだ。それよりも魔術。これはかなり最近創られたものであり、数十年前までは魔術など存在さえしなかった」

「最近？　何でまた」

「魔術を作ったのはリユーマと同じ異世界からの来訪者。名をヤマノ・カズヤ」

ヤマノ・カズヤ。それが以前にこの世界を訪れた人間。

確かに名前の感じからすると、日本人であることは確かだ。

「つて！？　いやいやいやそんなことできるわけない元いた世界に魔術なんてねえよ！」

「本人もそう言うていたらしい。なんでも、ある病にかかっていたその者が、紙にある文字を書き、一人で言葉遊びをしていたらしいのだが」

何やってんだよ……そのヤマノカズヤってやつ。

「その時の文字を何気なく読み上げたら、魔力が熱くたぎったそう。本人もまさかと思い、真面目に文字を読み上げたらしい。……」

すると、手から火の玉が出たそう。こうして誕生したのが魔術だ」
「なるほどねえ……」

「魔陣と違い、魔力を込め、文字を読み上げるだけで発動する。だが、その文字は異世界のもので、読み上げることができるのは、今はヤマノ・カズヤにその文字を習ったものだけだ」

と言うことは、目の前にいるこのブーゼ・ゲニーも、そのヤマノカズヤに実際に文字を教わった、と言うことなのだろう。

まあ突っ込むと、またうざい自慢話が始まりそうなので、聞きはしないが。

「おお！ そうだ、忘れていた」
「あん？」

ゲニーが突然立ち上がり、ごそごそと何かを取り出し始めた。

「おおーあつたぞ」
「言って差し出されたのは、透明な水晶玉。」
「なんぞ？ これ」

「これは魔力の属性を測る水晶だ」
「属性？ そんなものあるのか」
また王道だな。

「うむ。属性種類はまず『火』『水』『雷』『風』『地』の五属性。これらは多少の相性はあれど、力自体にさほど変わりはない。それと、先ほど言った順番は発属はつぞくのしやすい順だ。この他に『光』『闇』と言う二属性も存在する。これは対を成し、ほとんど発属する者はいないらしい」

内容もほとんど王道だった。

「つと、発属？ って？」

王道のオンパレードの中で聞きなれない単語があったので尋ねる。
「発属は、その者が生まれもって出た属性のことだ。五属性の中では地が一番発属率が低い。つまりはレアだ。そして光と闇は特別、発属する者はいない。まあ、闇は疎まれる率も高いので、隠しているだけかもしれない。まあ、今度呼ばれる勇者などは間違いなく光なのだろうが」

ああ、なんか神の加護がどうか言っていたな。

「それで、リユーヤはどうなんだろうな？　こういう異世界巻き込まれの定番は闇が出ることが多そうだな。それもとても強い闇が。さあ、持ってみる。そうすればわかる」

目が確実に面白そうと言っている

——って言うか何故、異世界の人間のお前がこっちの世界の定番を知っているんだ！

しかたなく、水晶を持つと水晶の中で何かが渦巻くのが見えた。

「……………風か。確かに風は珍しいほうだが、地に比べると…………まあ、かなり強い風属性ではあるが」

ゲニーは全身でつまらないと言った雰囲気を出している。

そして龍也はそれを無視する。

「んだよ？」

「……………いや、なんでもない」

「話を戻すが、俺に魔術を覚えてくれるんだったな」

「ああ、そうだった。まず、これを見る」

差し出されたのは一冊の本。

中には見たことのある文字が詰まっていた。

「これはヤマノ・カズヤが残していった魔術書だ。そして、ここに書かれている文字が、呪文となる。そしてこの文字は、かつては魔文字と呼ばれており、魔術を使用するのに必要不可欠のものだ。そう、この文字の名は……『カカカナ』……！！」

……カカカナじゃね？

「『トガタホビテマノタヨオテリワノ』『リムヨミソカテズソイキノゲフニヤ』？ やっぱりこれ」

「何故貴様がカカカナを読める！？」

ゲニーがひどく驚いた顔でこつちを見ている。

が、すぐに納得したようにならずき始め、

「……いや、これは異世界の文字。リユーヤに読めないはずがないか」

「ん？……」

「どうした？ リユーヤ？」

「ヤマノ・カズヤは言葉遊びをしてたつて言つてたよな？」

「ああ。それが？」

言葉遊び、ね……。カカカナで書かれているこの文を、縦の文字数が合うよう横書きで書いて並べ、縦に読めば。

「『炎の玉よ我が手より飛びたて』『水の矢よ敵に向かい降り注げ』」

「……それは、その二つの呪文が持つ真の意味『真文』」

「……！！」

「？ 真文？」

「……ああ。魔術は、呪文が長い文であればあるほど威力を増

す。だが、読むだけでは、魔術は発動しない。必要なのはイメージ。文の意味を理解した上でそのイメージを持って読まなければ、魔術は発動しないんだ」

「ああ、そこで必要になるのが、その真文とやらか」

「そうなる。本来、この真文は、それぞれの呪文を何度も読みこなすことで、自然にたどり着くもの。つまり、魔術を一から学ぶ場合、かなりの時間を要するのだが……」

「俺は真文がわかるから、さほど時間を必要としないわけか」

もう少しつらい修行とかが待ってるかと、内心冷や冷やしていた。まあ、だとしてもやらないけど。

「……まあ、後で試してみるといい。まずは行く所がある」

「？」

ついてこいと言わんばかりの態度に、若干戸惑っていると、

「まずは国王との謁見だ」

非常に面倒な事でした。

「そういえば。そのヤマノ・カズキってどんな病気だったんだ？」

「ああ、薬の効かない、正確な治療法も見つかっていない、やつかいな病だったらしい」

「そう、なのか……」

そんな病氣の人が異世界なんて……。

「確か病名は……『チュー二病』だったはず……」

「……………」

妙に納得してしまった。

三話（後書き）

えー、次の更新はちょっと先です。

8 / 6 魔術内容を少し変更しました。

四話（前書き）

なかなか文章がまとまらない……。。

四話

何故か上機嫌のゲニーは、龍也をつれ、研究室とやらを出る。

部屋の外は、ゲームでよく見るような城の廊下だった。

どうやらここはお城に設けられた研究室のようだ。

「（てつきり、入り組んだ路地の奥地にある、怪しげな家に住んでいるとばかり思っていた）」

それにしても、この廊下の雰囲気と、今までいた部屋の違いがあまりすぎる。

ほんとに同じ空間だったのか……。

どうやら、ゲニーは個人の魔術練習場を国からもらえる程には国王に信用されているらしく、龍也の魔術の練習も後でそこへ行くとのこと。

その前に国王に謁見に行くのは、先に異世界の住人であることを伝えておく必要があるそうだ。

ただ、周りの使用人っぽい人や、いかにも、なメイド服を着た女の人が、遠巻きにこちらを見ていたのが少し気になる。

周りのひそひそ声を聞く限り、やはりこのブーゼ・ゲニーは城の中でも異質とされているようだ。

しかし、実力はあるために邪険には出来ない。そんな空気ではいたった。

そのブーゼ・ゲニーが更に得体の知れない黒髪の男を連れているのだ。怪しまないはずがない。

そしてついに、物々しい鎧を着た騎士らしき雰囲気の方が近づい

てきた。

周りの反応を見る限り、どうやら上の地位にいる騎士のようだ。

「失礼いたします。ブーゼ様」

「ああ、君か。何の用だい？」

「いえ、ブーゼ様が研究室を出られるのが珍しかったため。何か進展でもありましたか？」

「ああ、まあね」

「そうですか。それは何よりです。王も喜ばれることでしょう。：

…それよりもそちらの方は……？」

明らかな警戒の目でこちらを見てくる騎士っぽい人。

あれ？ もしかして、若干、命の危険有り？ 少なくとも、投獄もありえる？

「ああ、私の実験の成果だよ」

「……………そう、ですか」

一瞬で警戒の目から哀れみの目に変わった騎士っぽい人。

周りも同じような目をしている。

……………なんだこれ。

それじゃあね、と言ってその場を離れた自称天才に問い詰めた。

「おい、ゲニー……………」

「ふう。呼び捨てか。まあいいか。……………わかっているさ。さっきの男だろう？ 奴はアトカース・リッター。この城に仕える騎士団の団長だ。剣の腕はもちろん、戦略面でも秀でたものがあると聞く。リユーヤ。貴様がもし、戦うことを決めるなら、剣は奴に教わることだな」

「違ええ……………そんなことが聞きたいんじゃない」

龍也は真面目な顔をして見当違いな事を言うゲニーに若干呆れていた。

「んん？ 何だ？ 言ってみる？」

「実験の成果つてだけ聞いただけであんな顔されるって……お前、今まで何してきたんだよ……」

「私の実験の内容か？ 別にここでは大したことはしていないぞ。ただ最近は召喚魔陣の実験でいろいろなものを集めていたぐらいだ」

「……いろいろなもの？」

——正直、嫌な予感がする。

だが、自分で聞こうとしたことだ。……責任を持って聞くとしよう。

「ふむ。魔王の手下。魔族の骨に外をうるつく魔獣の骨。後は、適当に持ってこさせた人間の骨だな」

魔族や魔獣など聞きなれない単語も出てきたり、人間のも持ってきたとかおぞましいことも聞こえたりしたが、それよりも、

「………なんで骨？」

「ああ、どうやら移動魔陣式には、髪や爪など、何らかの体の一部が必要なのがわかったのだ。それは威力の多くな魔陣であればあるほど、必要な体の一部は大事なものでなければならない」

「……異世界の移動なんてとんでもない魔陣なら髪や爪なんて小さなものじゃなく、もっと重要な器官が必要で、簡単に集められるのが骨って事か」

ゲニーは若干驚いた顔をしながらも、満足げにうなずいた。

「ああ、物分りが良くていい」

しかし、龍也の顔色は優れない。

「？ どうした？ リューヤ」

「ゲニー……お前、実験の内容を誰かに話したか？」

龍也の頭の中で、パズルのピースがはまる音がする。

「ん？ 国王には報告する義務があるのでな。その他の者たちには秘密にしておくよう頼んである」

「じゃあ、他の人たちは何故、大量の骨を集めたのかはまったく知らない訳だな？」

そして、ピースがはまる音が聞こえるたびに嫌な予感が膨らんでいく。

「ああ、もちろんだ」

「そしてお前はそれ以来、今の今まで実験室を出なかった……とか？」

「ああ、何故わかったんだ？」

龍也の頭の中に最悪のパズルが完成する。

「おい。それじゃ、お前が大量の骨を使って、黒髪の人間を作り出したように周りが思ったっておかしくない、よな？」

「ははは。そんな馬鹿な。そんなことはいくら天才の私でも出来やしないさ。皆それぐらいわかるだろう」

「……だよな」

しかし残念ながら、龍也の嫌な予感とははや予言なのだ。

後に会話する城の人々の反応に、彼は軽く傷つけられることになる。

四話（後書き）

できるだけ更新できるようがんばります。
感想お待ちしています。

あ、あと予約時間を変えてみました。

五話

「よし！ ついたぞリユーヤ」

目の前にあるのは豪勢かつ巨大な扉。

いかにも重要な部屋です！ といった感じた。

「入るぞ」

と一言呟き、大きな扉を叩いた。

「国王様！ 私、ブーゼ・ゲニーが報告があつて参上致しました」
一応、王様には敬語を使うだけの常識はあるようだ。

扉を開けるとそこには王の護衛と思われる騎士がズラツと並び、その奥にやたらと体格のいい王様が鎮座していらっしゃった。

龍也の中では、ここまで王道のオンパレードならば、王様も恰幅のいいおっさんだと思っていた。

しかしそこにいたのは、正直、守られる必要ないんじゃないかな？ と言われてもおかしくないような筋肉を持った大男だった。

そして、その強そうな王様が発した一言目が、
「何だ。ブーゼ・ゲニー。貴様が敬語を使うなんて初めてじゃないか。正直気味が悪いのだが……」

前言を撤回させていただく。

ゲニーに常識は持ち合わせていなかったようです。

「ふん。たまにはこういうのもいいと思っただけ。もう、二度とやらん」

ほんとにタメ口で話し出したゲニー。

王様自体はまったく気にしてない様子だが、間違いなく周りの騎

士が殺気立っている。

「ふん！ うつとらしい騎士どもを下がらせてくれ。大事な話がある」

一応、危険を察知する能力はあるのか、王様に騎士を下がらせるよう言ったゲニー。

しかしそれを周りが許すはずがない。

「ふざけるなっ！！ 貴様みたいな奴を残して出て行けるわけがないだろう！！」

代表して口にしたのは、騎士の中でも一際殺気立っていた男だ。

「大体、突然入ってきたと思えば、なにやら得体の知れない男までこの部屋に招き！！ 挙句、我々に出て行けだ！？ 貴様が出て行け！！」

放たれる殺気は大きくなるばかり。

更に、今まではゲニーに向けてただだったものが先ほどの騎士の言葉で、龍也にも殺気を送られているのだ。

だが、矢継ぎ早に放たれる言葉にゲニーはまったく耳を貸そうとしない。

そして龍也はゲニーのせいでまたも命の危険を感じている。

助け舟は王様から出された。

「口が過ぎるぞ。マハト・ガイラ。私からゲニーに助けを求めたのだ。そいつを侮辱するのは、私を侮辱するのと同じことだと、覚えておくがいい。とりあえずお前たちは皆、外に出てろ」

「国王様！！」

「いいか？ 二度は言わない」

「っ！ 畏まりましたっ！」

そう言つて渋々立ち去るマハト・ガイラとやら。
それにつられる様に周りの騎士たちも去つて行つた。
全員出て行く際、こちらを睨んでいた。

「……それで？ 話とは何なのだ？ そしてその彼は……？」

「ああ、まずリユーヤ！ 自己紹介だ！」

「お、おお」

ここでやつと龍也は発言の機会を得た。

とは言え、王様を前にして、下手なことは言えない。

龍也は持てるゲームの知識をフル活用して、話し出した。

まず膝をつき、

「私の名前は、ヒノ・リウヤと申します！ 私はこのブーゼ・

ゲニーにより、ここに召還された異世界の住人でございます！」

「ほう。挨拶は出来る者ではあるようだな。つて異世界からゲニーに呼ばれただ！？ 勇者召喚は二カ月後のはずだろう！？」

私のときと態度が違いすぎる……などとゲニーがほざいているが、無視して話を進める。

「……この男が言うには、ぶつつけ本番で失敗したら困るから、神の加護も与えない、ただの召喚の魔陣式で練習した……だそうです」
改めて自分の境遇を口にする、やはり憎しみが溢れてくる。
そう考えても理不尽だ。

王様もそう考えてくれたのか、同情した目で見てくる。

「……うちのゲニーが大变申し訳ないことを……」

「正直、まったくもってその通りです……」

「……ほんとすまん。お詫びといつては何だが、君の安全は確実に保障しよう。いつか帰れる日まできっちり面倒を見させてもらう。」

それに、時期が来たら君が異世界の人間だということも発表しよう。
今はまだ、発表しても混乱するだけだ」

とてもありがたい申し出だった。

感謝で涙が出そうだ。

「ありがとうございます。優しいお方に会えて良かったです。正直、
いつ騎士に殺されるかひやひやしてました……」

「ああ、ゲニーの騎士からの不人気はすごいから……。うん、ど
う考えても一方的にこっちが悪い」

常識を持った方がいてくれただけでうれしいです。

「もういいかい？　と言うことで、私の話の一つ目は、この通り。
異世界の住人の召喚に成功したと言うことだ。褒めてくれてもかま
わないよ」

「……………すまない。こういう奴なんだ」
「いつか殺してしまうかもしれません」

五話（後書き）

若干、更新ペースを上げてみます。
そしてストックがなくなりかけたら、元に戻します

六話

現在、わたくし日野龍也は、ゲニーの持つ個人の魔術練習場を探して、迷走中でございます。

いったい何故こうなってるかと言つと。

「……待て、ゲニーよ。一つ目と言つたな？　今。ならばまだ報告することがあるのか？」

「ええ、ですがその前に。……リユーヤ。貴様は先に私の持つ魔術練習場に行っているがいい」

「は？」

「すまない、リユーヤ殿。どうも大事な話らしい。できれば席を外してほしい」

「はあ……」

といった感じで、王様に言われて逆らうはずもなく、言われるがまま外に出て。

「……………え、どこ？」

戻って聞くわけにもいかず、若干迷子になっています。

「さて、どうしたもんか」

途方に暮れていると、前方から緑の髪美人メイドさんが。
天は私に味方した！！

「……………は、はい。あの、ブーゼ・ゲニー様が作り出した化け物が突然声をかけてきて」

……………え、今なんてえ？

「そうか……怖かったのだな？　だが、まだ危険かどうかわからない。話しかけてきてるんだ。まずは話してみることも大切だ。そうだろう？　もしかしたら害がないかもしれない」

あれえ？　危険かもしれないが前提においてある？

「すまなかったな。まだ我々は君の存在を容認できていないものでな。話があるなら私が聞こう」

あれれー？　いつでも剣を抜くことはできます的な立ち振る舞いなんですけど？

「……………じゃあ、あの、えっと、さっきなんて言いました？」

「？　だから我々はまだ」

「じゃなくて、そのメイドさん……ゲニーが作った化け物って」
それを口にすると、メイドさんの体が、震えるのが見えた。――
え、メイドさんって言うのすらだめ？

「ああ、彼女に悪気はない。化け物というのが気に障ったのなら謝罪しよう」

いやいやいやいや、それもそうなんだけど……。

「じゃなくて、ゲニーが作った？　何を？」

「？　君を、じゃないのか？」

「……………やっぱりそういう認識だったかぁー！！！！！！」

「！ な、なんなんだ！ いきなり！」

「ああ、驚かせて申し訳ございません。一つ訂正させていただきますと、俺はあんな変人に作られたわけではございません。本人も生物を一から作るなんて、いくら天才の私でも出来はしないと云ってましたし」

「そう、なのか？ なら君はいつたい何者なのだ？ ブーゼ様は君を実験結果だと」

「ええ、それが勘違いの元なんでしょうね！ 変な事言うから！

……コホン。俺は……移動魔陣の実験の成功例のようです。詳しくは話せませんので、聞きたければ王様の所へどうぞ。あなたが信用されているなら、話してくれるでしょう」

「王に？ ……いや、今は置いておこう。では君は別の国から移動させられた普通の人間なのかい？ 少なくともこの国で、君のような黒目黒髪の人間は見たことはない」

リッターは怪訝な顔をしながらも話を続けた。
てか、この国、黒目黒髪いないんだ。

「……強制的にね！ あの時あなたが私を哀れむように見てたのは間違いではありませんよ！」

「ああ、気づいていたのか……すまないな
申し訳なさそうに言うリッターに龍也は、

「（ああ、この人も常識人だ）」

と、感激していた。

「まあ、全て普通と言うわけではないらしいですけど。何か魔力が

かなり高いらしいです」

「そう、なのか。では君に害はないのか？」

「ええ。国が違いますので、一般常識も異なります。そういう意味ではご迷惑をおかけするかもしれませんが、何か悪さを企てたりともしませんし、もちろん存在するだけで何か悪いことがあるなんてこともありません」

リッターもメイドさんも未だ若干警戒は残るが、とりあえずは信じてもらえたようだった。

「そうか。なら自己紹介から始めよう。自分はアトカース・リッター。この城の騎士団長をしている」

「はい。さっきゲニーから聞きました。剣の腕もあり、軍師としても有能だと。俺が剣を覚えることがあるなら、あなたに教わるように言ってみました」

「ブーゼ様が……？」

ひどく驚いた顔をしていたが、龍也は気にせず自己紹介を続けた。

「では、俺はヒノ・リュウヤって言います。あの最悪の変人で自称天才のせいで、大きな迷惑を被っている『人間』です。これからは、もしかしたら迷惑をかけるかも知れませんが、よろしく願います」

わざわざ、人間を強調したのは、まだ疑われているような気がしたためだ。

「……ああ、よろしくだリユー様。自分のことはリッターでいい」

何とか信用をいただいたので、改めて。

「わかりましたリッターさん。それで、聞いた「あ、あの……」うえ！？」

声をかけてきたのは、先ほどまで泣きながら震えていらっしやっ
たメイドさん。

え、またなんか傷つけられんの……？

六話（後書き）

勇者様はまだしばらくでない予定になります。

七話 (前書き)

短いです。それと龍也君視点ではありません。

は別視点という意味です。

七話

龍也を有無も言わず追い出したゲニー。

龍也が出て行った後を国王がじっと見つめていた。

「……ゲニー……あの異世界人、リユーヤ殿……」

「ああ、魔力値が異常に高い。この私はおるか、かつてこの国に来訪したヤマノ・カズヤをも上回る魔力量だ」

大して気にした様子もなく言い放つゲニーに王は再度問いかけた。

「お前は、一体リユーヤ殿に何をさせるつもりだ？」

「わからんか。簡単な話なのだが？」

「……………何？」

「リユーヤにも勇者とともに魔王討伐の任に任せてもらう。奴がどう言おうともな」

「なっ……………！！ゲニー、お前やはり！」

「ふっ。さすがに付き合いが長いと、お見通しか。察しの通りさ。

まあ、そのことは誰にも言わないことをお勧めするよ。特にリユーヤ本人にはね？」

「……………言いはせん。お前が考えたことだ。私が止める必要もない」

「ははっ！ さすがだな王よ。自分たちでは魔王に勝てないと戦う前から白旗を振り、魔王を倒すものを異世界の人間に丸投げした賢

き王よ！」

「……………」

「まあ、この天才である私に全てを任せるといい。計画通り二ヵ月後に呼び出す勇者とリユーヤを使って、見事に魔王を消して見せるさ」

「……それで、リユーヤ殿はどう鍛えるつもりだ」

「奴は面白いぞ。かつてヤマノ・カズヤが残していたあの魔書をあつさりと読み、なおかつ真文まで読み取ったのだ」

国王は少し驚いた表情をした。

「カカカナを読めたのは当たり前としても、真文までもか」

「ああ、どういう理屈かはわからないがな」

今この国でヤマノ・カズヤが残した文字を読めるのは、リユーヤを除くとブーゼ・ゲニーと国王だけである。

つまり、国王もヤマノ・カズヤに文字を教わった一人なのだ。

「これから、私はリユーヤに魔術はもちろん、出来る限りの魔陣も教えるつもりでいる。その間、リユーヤの命を狙うみたいな、邪魔は入れないようにしてくれよ？」

「当たり前だ。それは彼とも約束したしな。なにより異世界からの来訪者はこの国の、いや、この世界の宝だ」

「まあ、その辺は任せるよ。私はもう行く」

「ああ、必要ならば、騎士団長アトカース・リッターも貸すぞ」

「それはリユーヤしだいかな？」

その頃龍也は、メイドさんと騎士団長の反応にひどく傷ついていた。

八話（前書き）

六話の続きです。

八話

「……はい……なんでしょうか」

先ほどまで怖がつていらつしゃったメイドさんが声をかけてきてくれたのだが、正直今までの会話でかなり傷心の龍也は、恐る恐る問いかけた。

「あ、あああの！ 私はヘンティル・レイと申します！ 先ほどは大変失礼しました！ 大事なお客様であるのに私は……！」

今度は自分の失態を悔やんで泣いてしまいそうなメイドさん改めヘンティル・レイさん。

「あーいや、大丈夫です。気にしてないので。それに俺は客人と言うほどの者でもないので、気に病まないでください」

実際は気にしていないわけではないのだが、女性を泣かせてそのままにしておけるほど、冷たい男であるつもりはなかった。

そのせいで、苦労したこともあったのだが、それは気にしない。

「あ、ありがとうございます……。リユーヤ様はお優しいですね……」

潤んだ瞳で見つめてくる彼女に顔が熱くなる龍也。

しかし、この程度で勘違いしてしまうほど龍也の頭は単純ではない。

「とにかく、ヘンティル、さん？ とりあえず落ち着いて？」

「はい。あ、あの、リユーヤ様？ 私のことはどうかレイと呼びください。それに私はただのメイドです。私なんかにさん付けする必要はありません。どうか呼び捨てに」

「あ、いや、そういうの慣れてないんで……じゃあ、レイさんで」
「はい。リユーヤ様がそれでよろしいのなら」

「じゃあ、レイさん？ 俺も様付けされるの慣れてないんだけど、
どうにかならない？」

「いえ！ それは、その、リユーヤ様はお客様ですし……」

なんとなくレイさんの性格が読めてきたので、じっと見つめてみる。

「……………あう……………あの、それじゃあ、私もリユーヤさん、で……………」
案の定折れてくれた。

やはり押しに弱いようである。

「それで、リユーヤ様はここで何を？」
今まで若干、空気であったリッターさんが問いかけてきた。

「ああ！ やっと、聞ける！ あのリッターさんでもレイさんでも
良いんですけど……ゲニーの個人魔術練習場ってどこですか！？」
それとリッターさんも様はいらないんで」

「様はいらないといわれても自分のは癖だ。すまないが諦めてくれ
……………それにしても君は迷子だったか」

「リッターさん！！ それは言わないで！ そしてレイさん恥ずかしいから笑わないでー！」

こっそりクスクス笑っていたレイ。
さっきまで怯えていた人とは思えない。

それとリッターさんの様付けをとることは出来なさそうだ。

「あ、すみません。確かにこのお城は広いですから。最初はわからないですよね？」

「なんか子供を見る目で見られている気がする……。てか、俺は何にもわからないままここに呼ばれてるわけだから！ 文字もわからないし、どっちに行ったらいいか見当もつかない」

ここまで歩きながら周りを見渡したとき、いろいろ書いてあるのは確認したが、当然読めなかった。

だが、言った途端までも、二人から哀れみの目で見られた。

「文字わからないんですか？ 言葉を話せるから、読めるもの思っ
つていたんですか……」

「うむ。自分もだ」

言われてみれば、確かにそうだ。

と、一瞬疑問に思ったが、俺がここに召喚されたときゲニーは言葉が使えることに疑問を覚えている様子はなかった。

つまり、召喚魔陣式に言語機能が備わるよう設定したのだろう。

それを説明すると、二人とも一応は納得してくれた。

「さて、ブーゼ様の個人魔術練習場だったな。しかし自分はまだ仕事が残っている。君、案内を頼めるか？」

「はい。かしこまりました、リッター様。リユーヤさん、こちらです」

レイさんに案内されるまま歩き出すリユーヤ。

しばらくの間無言が続いたが、耐えられなくなったのか、レイさんが話しかけてきた。

「あのう、リユーヤさん。もし、よろしければですけど……私が文字をお教えいたしましょうか？」

「え！？ いいんすか！？ ……あ、でも、わざわざ時間をとらせるのは迷惑では……」

正直、文字を教えてもらえるのは、願ってもない申し出だった。最悪ゲニーに頼むしかないと思っていたのだ。

しかし、龍也の性格的に迷惑をかけるのは気が引けた。

「いえ、先ほどは本当にひどいことを言ってしまったて……その償いもかねて、です」

「いや、ほんとに気にしないで……。怪しかったのは事実だし」

「ふふつ、リユーヤさんは本当にお優しいですね。普通、私のようなただのメイドに氣を使われる方はいらっしやらないですよ？」

「あー……住んでる国の習慣、かな？」

典型的な日本人です。

「そうなんですか？ いい国なのですね？」

「うーん。まあ、そう、なんですかね？ 他の国を知らないから良くわからないような」

「そんなものですよ。あ、あそこですよ？」

見えてきたのは妙に派手な扉だった。

ゲニーの趣味はおかしいのははつきりした。

八話（後書き）

感想お待ちします！

九話（前書き）

説明ターンその二です！

わかり辛いのはご了承くださいませ！

九話

部屋に入るとすでにゲニーがそこにいた。

「うん？ 何だ遅かったではないか。まったく、どこで遊んでいたのだ」

「どの口がっ……！」

相変わらず人の神経を逆なでするのが自然にできる男だと思う。

ちなみにレイさんはゲニーを発見してから、龍也を盾にするように隠れている。

先ほどの龍也に対する反応や、若干震えているところを見ると、ゲニーのことが苦手のようなのだ。

それに目ざとく気づいたゲニーは、

「ほう……。リユーや貴様、意外に手が早いな？ ふん、遅れた理由はそれか？」

と、またも見当違いのことを口走りだした。

「ふ・ざ・け・ん・な！！ てめえ魔術練習場がどこにあるかも言わずに放り出しやがって。ここまで来るの大変だったんだからな！ 彼女はここにわざわざ案内してくれたんだよ！」

キレ気味で答えても、ゲニーはまるで気にした様子もなかった。

「ああ、そうか。教えなかったな」

「……………」

「……………」

「……………何も言うことはねえのか？」

「？ 何を言っただけなの？」

「謝罪はないのかって聞いてんだ！」

「何故謝罪が必要だ？ 貴様は無事にここに着いたではないか？」

「……もう、いいや。さっさと魔術とやらを教えろ」

……ゲニーの相手は、つかれた。

「あ、あの！ 私はそろそろ！」

「あ、うん。ここまで連れてきてくれてありがとう」

「いえ！ あ、あと文字が教わりたいときはいつでも呼んで下さい」

「ん、ありがとう」

「はい。あー……後、その……がんばって下さい」

「……………うん」

「さて、始めるか」

「……ああ」

テンションが低いのは気にしないでほしい。

ゲニーの存在の所為である。

「先ほど話した魔術については覚えているな？」

「ああ、魔書に書いてある言葉の意味を理解し、イメージしながら、読み上げると、魔術が発動する、だったな」

「その通りだ。そこに属性の話を加える」

「あー、もしかして、発属した属性の魔術しか使えないって事か？」

その辺は王道だろう。

火属性は火の魔術しか使えないとか。

「いや？ そんなことはない。リユーヤのような極端な風属性でも他の属性の魔術は使える。ただし威力は弱くなってしまうがな」

少し予想外ではあった。

つまり俺は一応、覚えれば他の魔術も使えるってわけだ。——あ

の長い文を覚えれば、だけど。

「ということは、風属性の魔術であれば、かなり強いのが使えるってわけか」

「そうなるな。……だが、残念ながら風属性魔術の数は少ないが」
「何故!？」

「なんか、ヤマノ・カズヤはイメージが浮かばんと嘆いていたらしい」

それは何か？ ヤマノカズヤは風属性っぽい魔術をあんまり作れなかったと。

「……まあ、いいや。説明続き」

「ふむ？ なんだ、意外と落胆は少ないようだな。まあいい、先を話そう」

落胆しなかったわけではない。

どうせ魔術とやらが使えるようになるのなら、強い魔術を思っていたのだ。

だが、ひとつ思いついたこともある。

思案している間もゲニーの説明は続く。

「そもそも属性はるか昔から存在したもの。つまりは本来、魔術には関係ないものだ」

「あん？ 魔術に関係ないってどういうことだ？」

「元々、属性と密接に関係していたのは魔陣のほうだ」

「魔陣、が？ 魔陣って召喚のときに使った？」

「魔陣は二種類あり、属性魔陣と特殊魔陣がある。まず属性魔陣は

発属した属性を込めて作る魔陣だ。例を言うと、リユーヤがこれを作るとなると風の魔陣が出来上がるといった感じか。ちなみに召喚魔陣は特殊魔陣に当たる」

なんとなく理解したが、わからない所もある。

「その、属性魔陣ってのはどういうのが出来上がって、どういう風に使うんだ？」

「ふむ、出来上がりも使い方も様々だ。たとえば火の発属者が魔陣を作ると魔陣式によってなべの水を温めるだけのものから、足を踏み入れた途端に火柱が上がるものもできるのだ」

「？ 魔陣は人々の生活に広まっているのか？」

「当たり前だ。家庭では台所に火の魔陣を置いて料理をしたり、地の魔陣を使い重いものを運んだりするのだ。ちなみに値段は出来のいいのはもちろん、発属のしづらさから、光や闇、地や風などが高値で取引される」

「魔陣ってどうやって売ってるんだ？」

「紙であったり、木材であったり、鉄板であったり、だな。——つと少し話がずれたな。戻すぞ」

この世界の常識を知らない龍也にしてみれば今みたいな情報が必要になるのだが。

「とにかく、先ほども言ったとおり、リユーヤは風の魔術が威力を発揮する。あの目的掛けて、まずはやってみろ」

「……魔陣は教えてもらえんのか？」

「魔陣を教えるには少し時間がたりない。諦めたほうがいい」

「……とりあえずわかった」

自らの力で元の世界に帰るには魔陣を覚えるのは必須である。

いずれ必ず覚えなければ。

まずは、風魔術、か。

「えーっと？ キリイカリテバゼサキトヨケヲナヤ？ ……………風よ、刃となり、敵を切り裂け、か？」

刃、か……。ならイメージは…………て、本物の剣なんか見たことねーし。漫画でいつか。

そして、イメージを固め、読み上げる。

「……キリイカリテバゼサキトヨケヲナヤ！！」

ズバアアアアアンツ！！！！！！！！

「……………」

激しい音とともに、狙った的は真つ二つになった。——的だけではなく、地面も切り裂いちゃったが。

どうやら、某鷹の目さんはイメージとしては強すぎたようです。今度、リッターさんに剣を見せてもらって、それをイメージにしよう。

「すさまじい威力だな。少し驚いた。魔力の大きさに極端な風属性なのも効いたのだろう」

あまり驚いた様子の見えないゲニーが話しかけてきた。

「しかし、魔力を使いすぎだ。それでは十発も使えば使えなくなるだろう。魔力のコントロールすることを覚えろ」

一応、イメージだけではなく、魔力を大量に使ったため、これぐらいの威力になったようだ。

「コントロールなんてどうやるんだ？」

「そんなものやりながら抑えろ」

「……………次は火でもやってみるか」

教えるといったはずの人間は使えない。

「えー、最初に書いてあった……よし、トガタホビデマノタヨヨウ
テリワノー!!」

ヒュッ！ ドンッ！！

確かにさっきに比べ、威力は低かった。

しかし、風ではないとは言え、イメージもうまくいったようだ。

「後は、徐々にコントロールしてくしかないか」

「その通りだ。教えたとおり、時間をかけ、徐々に魔力をコントロールしていけ」

お前には何一つ教わっていない。

九話（後書き）

感想お待ちしてます！

次の更新は日にちが空きます。

8 / 6 魔術内容少し変更です。

十話

いくつか練習場で魔術を放ったが、ゲニーが言ったとおり、十数発放ったら、疲労で魔術が使えなくなった。

本当に魔力を込めすぎていたらしい。
少しずつ慣れていくしかない、か。

「……しかし、あの力カカナを一度もつかえずに言えるのはすごいな。さすがの私でもあそこまで早くは言えない」

「んあ？ 早口言葉は得意なんだよ」

「ふむ、羨ましいものだな」

嘘くさい褒め言葉をもらうが、読めても本がその場になれば意味がない。

つまりは文も意味も覚えておかなければならないのだ。

記憶力には余り自信がないのだが。

「そうだ。リユーヤの部屋だが、明日より王から与えられる。だが、今日は時間がなかったので、間に合わん。なので今日は私の研究室に泊まってもらおう」

「ええ……マジか……」

あの部屋で眠れる気がしない。

「諦めろ」

「……わかった」

物で溢れかえっていた部屋をどうにか寝れるようにした。

「つか、ゲニーはどうすんだよ」

「私は自分の部屋があるが、今日は召喚魔陣の研究の続きだ。何せ召喚に成功したのだから」

何も考えず口走るゲニーに殺意を向ける。

それに気づいたのかこちらを見て、

「安心しろ、寝床の下に防音魔陣を作っておく。さすがに安眠を妨害するつもりはない」

またも見当違いのことを言ってくる。

そして、言っていることも当たり前のことだ。

こいつを信頼している王様には悪いけど、本当に殺してしまうかもしれない。

「おい、窓がないから良くわからんがだいぶ遅い時間だと思うんだが、どうか行くのか？」

「ふむ。研究に必要な物が足りないのだな、王を叩き起こして仕入れるように言わねば」

「普通に不敬罪だろい」

「私には関係ない」
「だろうね。」

しかし、ろくでもないであろう研究のために夜遅く叩き起こされるなんて、王様も不憫だな。

本当に出て行ったゲニーを見送り、王様に同情の念を送る龍也。

「？」

さつさと寝てしまおうと思ったが、ふと嫌な気を感じ取った。

「……なんか起きるな」

と、呟いた瞬間、空気が張り詰めた。

「っ！！！」

咄嗟に前に転がり後ろを向く。

それと同時に飛んできた刃物を何とか避ける龍也。

「ほう……？」

感嘆の声に聞こえる呟きをもらしたのは、目の部分以外を全身黒で覆われた、いかにもな暗殺者だった。

「暗殺……？ 何で俺を……？」

理解は出来なかった。

龍也は今日この世界に呼び出されており、この世界のことは何もわからない。

誰かに狙われるほど、大きく目立った覚えもなかった。

しかし、その疑問はすぐに解消された。

「ふっ……私の暗殺を逃れるだけではなく、即座に状況を理解するとは…… さすがと言わせてもらおう。ブーゼ・ゲニー！」

「……………」

あいつの刺客だ————！！！！！！！！！！

何であいつの代わりに狙われなきゃいけないんだ！ いくらなんでも不憫すぎるだろ！ 俺！ 王様なんか目じゃないぞ！！

「ちょい待って！ 俺はゲニーじゃない！ あいつは今王様んとこ

に行ってる！」

「ふん！ 私の攻撃を避けたやつがずいぶんと見苦しい言い訳をするものだ」

「ほんとだって！ このまま俺を殺して意気揚々と帰っても、明日普通にゲニーが現れて、あんたが失敗したってことになるよ！」

それを聞いた暗殺者さんはじっとこちらを見つめ、

「……この技にかからない所を見ると、どうやら嘘をついているわけではなさそうだ」

信じてもらえたようだけど、何か怪しげな技とか使ったらしい。

「それで、貴様は何者だ」

「あの糞野郎の被害者です」

それを聞いた暗殺者がなにやら目を見開いたと思えば、

「貴様がブーゼ・ゲニーが作り「違あうう！！」む！」

何を言おうとしたか正確に理解し、すぐに訂正する。

正直、勝手に情報を流していいのかと一瞬思ったが、変な勘違いをされたままなのは絶対に嫌だった。

「俺は作られてない！ 空間移動の魔陣で何の了承もなく突然呼び出されたただの人間だ！！」

その後も呼び出された拳句、帰れないといわれ、謝罪もなく、周リから化け物扱いされた不幸を懇切丁寧に暗殺者に説明した。

「……不憫だな、君」

そしたら、とうとう暗殺者にまで同情されてしまった。

「しかし、お前は面白い。魔力が異常に高いだけでなく、身体能力もかなりの物だ。鍛えればものになるだろう」

確かに、さっきの攻撃は何故か避けられた。

今までは、頭の中に避けるイメージが出来ても、体がついていなかったが、今は思った通りに行動が出来た。

もしかしたらこれも、召喚されたことで向上したのかもしれない。

またも、王道展開か。

だが、それがばれたら、余計に魔王討伐に手伝わされるかもしれない。

となると、やることは一つだ。

「あの、その身体能力云々は誰にも言わないでもらえますか？」

「なに？」

「いや、あなたの任務には関係ないし、ゲニーを殺すだけなら、ここで待っててもらっても構いませんので」

「……………お前は人殺しを止めようとは思わないのか？」

「あ、出来れば俺が殺したかったですけど」

暗殺者はきよとした顔をし、

「ふふっ……………あははははっ！！」

突然笑い出した。

「えっと……………」

「君は面白いな！ どうせ、安い金で雇われてたんだ。任務は放棄でいい」

「はあ」

「それで？ ブーゼ・ゲニーは君が殺したいんだろ？」

「ま、まあ、出来れば」

とは言え、ただの一般人だった俺が本当に殺せるかどうかはわからないが。

「だったら、私を雇え！ 君を鍛えてやる。暗殺術、気配の消し方、その他もろもろ、私の全てを叩き込んでやる」

「……………」

急展開についていけずポカンとしてしまった。

そして口を出たのは少しずれた言葉。

「おれ、金もってないです」

「後払いでもいいさ。私の全てを使えばギルドでも通用するようになる。それで払ってくれ」

「はあ……。俺が精神的に人を殺せるようになるかはわかりませんよ？」

「構わない。なんとなく君が気に入ったんだ。たぶん、最初に何か起きるとはつきり告げたときからな。あの場面で存在がばれるとは思わなかった」

ああ、あの言葉を聞いたから襲ってきたのか。
やっぱり悪い予感は今よくあたる。

周りに予言と呼ばれてたのは当たりかな？

「私の名はミールイ・カーテルだ」

「名前、言っちゃうのまずくないですか？」

「君だから言ったんだ。これで私の本当の名を知っているのは今は君だけ。同業者にはカーと名乗っているからな。最近では通り名がついて、死風しにかぜなんて呼ばれてもいる。それで君は？」

「ヒノ・リュウヤです。えっと、カーさん」

「リユーヤか。なら、リユーと呼ぶとする。それとリユー、カーさ

んはやめてくれ。呼び捨てにするか、せめて別な言い方にしろ」

「あー……じゃ、師匠で」

「ん、少々むずがゆいがいいだろう。リユー、今後この時間は私と二人で修行だ。明日また来る」

「でも、ここで寝るの今日だけですよ？」

「私を誰だと思っている？ リユーの居場所を探し出して、明日迎えに行く」

「あ、はい。師匠」

なんか流れで師匠を得ました。

十話（後書き）

龍也君の不運は巻き込まれるものだけではなく、自己責任のもの
もたまにあります。

十一話

「いてっ！！」

「起きろ」

どうやら朝らしい。

ゲニーに叩き起こされたことに苛立ちながらも、昨日の夜を思い出す。

昨日、カーテルさんもと師匠が去った後は、何事もなく落ち着いて休むことが出来た。

習うことになったのは暗殺術など。

暗殺というのは少し気が引けたが、今後この世界に居続けたら必ず戦わなければいけないときは来るはずだ。

そのときに気配を消すことを覚えていれば戦闘は最小限に抑えられるかもしれない。

それに剣などを習って、わざわざ表立って戦うのは性に合わない。

——もしかしたら、暗殺は向いているのかもしれないな。

ただ今日の夜から師匠が来るらしいので、正直言つと、もう少し寝ていなかったのも事実だ。

「起きたか。では行くぞ」

「は？ いきなりなんだよ」

「お前の部屋があてがわれた。私がわざわざ昨日遅くに王に進言したおかげだぞ」

お前の用事のついでに研究室に居座られて邪魔な俺を追い出しただけだろうが。

あてがわれた部屋とやらに案内される籠也。

その間に今後のスケジュールを聞かされた。

俺はお前の言うとおりに動かなければいけないのか———と思うたが、魔術に関してはこいつに指示を仰いでいる立場。

多少は言うことを聞いておこう。

「魔術訓練だが、リユーヤは魔力コントロール以外はほぼ完璧だ。

後は何度も魔術を使い、慣れていくしかない。なので、魔術は午後、私の空いた時間にだけ見てやる」

……要はゲニーの暇な時間だけ魔術訓練をすると言うことか。

もう、それでいいや。あんまりゲニーに関わりたくないし。

魔術に関して考えることもあるが、まずは魔力のコントロールをしないことには話しにならない。

「故に、空いている午前は、語学、そして一般常識を学んでもらう。貴様すでに文字を教えてもらえるよう、メイドに頼んでいたな。感謝しろ、そのメイドをリユーヤの専属にしてある」

「……………は？」

ん、おかしいな。若干、話が繋がらなかった気がする。

えーっと？ 空いてる時間はいろんな勉強。そりゃそうしたほうがいい。

そんで？ 昨日確かにレイさんに教えてもらえることになった。で？ 何でそこからレイさんが俺の専属メイド？

「何故？」

「ん？ 嫌なのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「ふむ。王が今リユーヤの存在を知らしめるのは良くないといったのでな、ならば顔見知りのほうがいいだろうと専属にしてやったのだ」

「ふーん……なるほど」

「そうこうしている間に着いたぞ。ここだ」

ゲニーはさっさと中に入ってしまった。

「待てよ……って、広っ！」

案内されたのは、ホテルならスイートルームになるだろう広さの部屋。

「そんなことはない。この城の中では小さめのほうだ。なるべく目立たないようにしたのだろう」

「これで、狭いほうなのか……」

さすがは異世界である。

「ちなみに服はそこにおいてあるのを着ろ。異世界の服は目立つ」「あいよ」

ああ、昨日勘違いされたのはこの服のせいもあるのかなー？ などと考えながら着替えを済ます。

「案内したからな。私は研究に戻るとしよう」

と、そそくさと戻って行ったゲニー。

それと入れ替えに入ってきたのは昨日あった美人メイドさん。

「リユーヤさん。おはようございます」

「レイさん。おはようございます」

「これからよろしくお願いしますね？」

「あ、こちらこそ……でも良かったの？　俺なんかの専属になって」

「はい！　もちろんですよ！」

笑顔で答えてくれるレイさん。

確かにその言葉に嘘はなさそうだけど、若干申し訳なさそうな目をしていた。

「……本当のところは？」

「……あう……その、普通はメイドが専属になることはあまりないんですけど……その、噂が広まりすぎて……その」

「……つまり、俺がゲニーが作った化け物説が広まりすぎて、皆怖がって俺に近づきたくないと」

「………はい………」

……ふっ。予想はしていたけど、やっぱり傷つくときは傷つくな……。

「あ、あの！　本当に私は光栄ですよ！？　リユーヤさんの専属になれて！　リユーヤさんはとても優しいお方ですし！」

「ありがとうございます……レイさん」

「い、いえ！　あ！　そんなことより！　勉強しましょう！　ね？」

かなり凹んでいた龍也を気遣い、話を変えてくれたレイさんに感謝。

「それじゃあ、始めましょう」

「……はい」

気持ち沈んだまま勉強会の開始です。

十一話（後書き）

ストックが切れ始めてきましたんで、すこし更新ペースが落ちます！

どうか見捨てないようお願いします！！

十二話（前書き）

説明ターンその三で！

読みづらいのはお許しください！

十二話

文字については意外と簡単で、文法などは英語と同じ、後は単語さえ覚えれば問題なく読み書き出来るものだった。

幸い、話すぶんには言葉が通じるので、発音などは気にしないでいい。

要は学校で教わる英語と同じで、発音できなくても文を理解出来ればいいというもの。

後、苦勞する点といえば単語を覚えるのが大変なことぐらいだ。

ただ、魔術の文といい、覚える言葉がたくさんありすぎて困る。

「レイさん。文法とかは元いたところに似たものがあつたから、後は単語を覚えるだけでよさそうなんで、今はそれより、他のことを教えてもらっても？」

一生懸命文字を教えようとしてくれていたが、それよりも聞かなければいけないことはたくさんある。

「他のこと、ですか？」

「うん。例えば、通貨のこととか……生活に必要なことを」

「え、通貨も違つたんですか？　どこの国でも共通のものだったと思つたんですけど」

おっと、まずつたか……。

「えっと、辺境の地だつたんで……たぶん違つと」

「そつ、なんですか。えっと通貨は四種類ありまして、それぞれ『鉄貨』^{てつか}、『銅貨』、『銀貨』、『金貨』です。鉄貨が十枚で銅貨一枚、銅

貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、となります」

鉄貨つてのはあんまり聞かないが、ほとんど王道と違いはない。

「大体、一般人の平均月収は？」

「うーんと、大体……銀貨二十枚から三十枚ぐらい、ですかね？」

日本人の平均月収なんてのはわからんが、大体二・三十万だとすると、銀貨一枚は一万円ぐらいか。

となると、鉄貨は十円、銅貨は百円、銀貨は一万円、金貨は百万円、ってところか。

わかりやすくて助かる。

「それで、手っ取り早く稼ぐ方法は、やっぱりギルド？」

昨日師匠がギルドで稼いで払ってくれといっていたのを思い出した。

「うえ！？ ど、どうしてですか？」

「いや、いつまでもここでボーっとしてるわけにも」

「で、でも、リユーヤさんは客人で」

「いずれ必要になると思うから」

「必要、ですか？」

恐らく今後、旅に出る必要が出てくる。

そのためには稼いでおかなければならない。もちろん師匠にお金を払うためにもだ。

旅に出たらまず、ヤマノカズヤという男がどこに消えたのかを探す。

彼が元の世界に帰ったのなら、その魔陣がどこかに存在しているはず。

ここで生き続けているなら、魔陣を作り出さなければいけないが、

それはここでどれだけ魔陣について知ることが出来るかによる。

「それで、どう？」

「あ、はい。確かに一番早く稼ぐ方法としては冒険者ギルドに登録するのがいいと思います」

「やっぱりか。登録に条件とかは？」

「えっと、十五歳以上なら誰でもなれるはずです。ただ、ギルドが行うのは身分証明書の発行と仕事の仲介、報酬の受け渡しだけで、そのほかは一切関知しないと」

「つまり、そのほか全ては自己責任でって事か。わかりやすくていい」

「はい。後は早く稼ぐ方法といえば、やっぱりお城勤めとかですね」
「？ 騎士になるってこと？」

「はい。それと、城仕えの魔陣師ですね。でも騎士は人気で試験などは厳しいみたいで、魔陣師は上級の魔陣を作る人はかなり少ないので、リユーヤさんは難しいかもですね？」

「まあ、城に仕えるつもりはないけど……そうやって聞くとゲニーはほんとに使える奴なんだと思う」

「……はい。ブーゼ様は凄腕でいらっしやいますから」

「嫌いならそう言ってもいいよ？ 俺も嫌いだし、言いふらしたりはしないよ？」

「いえ！ そういうわけで、は………」

「あーごめん。今の話は忘れようか」

ものすごく言いづらそうにしているレイさんを見て、龍也は話を切り上げる。

「……………ありがとうございます」
お礼を言われてしまった。

「話を戻そうか？」

「はい。後は何が知りたいのですか？」

「あー地理、とかかな」

「地理、ですか。正直私もあまり詳しくないので、大雑把になりますが」

そう言いながら紙を取り出し、ざっくりとした地図を書き出した。

「まず、私たちのいるこの国、アインラントを中央において西が『ドイスバード』。商の国と呼ばれていて、その名の通り商業が盛んな国です。各国で使われているもののほとんどがこの国の商品です。そして、南にあるのが『トロワナシオン』。美の国と呼ばれていて、美術や美食の有名な国です。観光に訪れる人が最も多い国でもあります。さらに、この国にはもう一つ有名なところがあつて、それがさつき話した冒険者ギルドの総本部です。ここで各国のギルドの管理を行っています。そして北が武の国として有名な『アルバアグオジャ』です。この国より北には魔族が住む『ソンプルミール』があります。今は武の国であるアルバアグオジャのおかげなのでしょう、魔族たちは大きな行動を起こしてはいません。ですが魔王が現れたなら、それも恐らく時間の問題かもしれません……。あ、ちなみにこの国は魔の国と呼ばれていて、一番魔陣の研究が行われていて、魔陣師も一番多い国なんです。……こんなところですかね？あ、えっと、長々説明してすみませんでした……」

「いえいえ、俺が尋ねたことですし、助かりました」

一応、各国の均衡は保たれているのがわかった。

力があるのは、武の国アルバグオジャ、魔の国アインラントで、恐らくこの二つの国の力は均衡している。なので互いに手が出せない。

うかつに手を出せば、魔族の侵攻をみすみす許すことにもなる。

商の国であるドイスバードを潰せば物流が止まり、美の国のトロワシオンはギルドの本部があるため手を出せば、ギルドを敵に回すことになる。といった所か。

「東は？」

龍也は出ていないもう一つの方角を尋ねる。

「えーっと、東なんですが……険しい山々が続いていて、そこを超えても海が広がり島が転々と存在している状況で、未だ未探査の所なんです。あ、もしかしたらリユーヤさんは東の方の国から来たのかもしれないね？」

「そう、かもね」

レイさんに嘘をつくのは若干、心苦しいが、王様が言ったことなので仕方がない。

「その、もう一つ聞きたいんだけど……魔族や魔獣ってのは？」

「え、知らないん、ですか？」

「う、その……まあいなかったから」

その言葉を聞き、レイさんはキョトンとして、

「珍しいですね？　もしかしたらリユーヤさんは本当に東の国から来ていて、そこには魔族も魔獣もいないって事かもですね？」

「う、うん」

「えっと、魔族って言うのは、魔王が確認される前から存在していて、さっき話したソンプルミールにいる者たちです。魔族はどうやって生まれてくるのかわからない生物で、死んでしまつと体は霧になって骨だけになるそうです」

ゲニーが持つてこさせたのはその骨か。

「魔族は獣型や人型など様々な姿をしています。特に人型は知性があり、力も魔力もとても強いんです。そしてほとんどの魔族が直接、魔力を放出する事が出来ます。威力は魔族の実力によって違います、弱くてもまともに当たれば死に至ることもあります」

「ふーん、それは人間には出来ないの？」

「出来ません。ただ、この国では人間も使えるようにするために、必死で研究されているみたいです」

「なるほどね。魔獣は？」

「魔獣はいわば野生動物です。大陸全てに生息していて、食料として狩られたりもします。食べられないものでも、凶暴な魔獣はギルドで討伐依頼が出たり、魔物にも引けをとらない強さの魔獣なんかは、討伐依頼の他に、懸賞金とかも出てるみたいです。あ、美食の国にギルドの総本部があるのは、食料のための魔獣討伐依頼が多いからかもしれませんね？」

大体、すぐに覚えなければいけない部分は把握した。

「いろいろ教えてくれてありがとう。助かるよ」

「いえ！ 任せてください！ あつと、そろそろお昼ですね？ お勉強の続きは明日ですね？」

「あ、うん。改めまして、ありがとうございました」

「はい。どういたしまして」

さて、次はゲニーとの魔術訓練か。

気分が沈む。

十三話（前書き）

ちよつとだけ説明あります。
わかりづらいかもしれません。

十三話

昼食後、すぐに魔力訓練が始まった。

が、

「何度も魔術を放って魔力コントロールのコツを覚えろ」

この日、ゲニーが練習場で発した言葉はこれだけでした。

——こいつマジ使えねえ……。

結局、本に書いてある魔術を一つずつ魔力の持つ限り放ち続け、この日の魔術訓練は終了した。

練習場を出た後、疑問に思ったことを尋ねる龍也。

「なあ、この本に書いてある魔術やたら光魔術とか闇魔術とか多いんだけど」

「ああ、ヤマノ・カズヤの属性は珍しいもので、光と闇を両方発属していたからな。自分用の魔術が多いんだろう」

「……はあ、自分専用の本だったのか、これ。っと、二つ発属するのって珍しいのか？」

「ああ、かなりな。二属性の発属だけでさえ珍しいのに、彼はそれに加え光と闇という、最も発属しづらい属性を持っていたのだ。彼を敬う人間はこの世界に多数居るはずだ」

こいつはヤマノカズヤに文字を教わったにしては、そのヤマノカズヤを敬っているようには見えない。

何か理由があるのか……どうでもいいか。

「もういいか？ 私は研究の続きがあるからな。わざわざ研究の間を縫ってリユーヤの特訓を見てやっているのだ。感謝しろ」

「いや、もう来なくていいよ」

「そうか。ならば今後は一人でがんばれ。何かあったときだけ呼びに来い。見てやる」

ああ、最初からその予定だったのか。

妙に納得しながら、自分の部屋に向かう。

部屋に入るなり、龍也はベッドに倒れこんだ。

魔力を使いすぎたためだと思う。

別に体力的には問題ないのだが、どうにも眠気が治まらない。

夜に師匠がなければいいと思いながら、龍也の意識は沈んでいった。

目が覚めるとすでに周りが暗くなっていた。

「……大体、八時間ぐらい寝てたか」

自分の体のなまり具合と空腹具合でおよその時間を割り出した。龍也の数少ない特技の一つだ。

ふと横を見ると、冷めてしまっているが夕食が置いてある。恐らくレイさんが準備してくれたのだろう。

たぶん起こしてもくれたはずなので、明日あったら謝っておく必要がありそうだ。

ちなみに書置きも置いてあったが、あいにくまだ読めないのので、書置きは大事に保管して用意された夕食を平らげた。

その後狙ったかのようなタイミングで、一つの影が舞い降りた。

「おわっ！　つと、師……？」

突然の登場に驚いたが、龍也はすぐに誰が来たのかを把握した。把握したはいいが、予想しなかったことに固まってしまった。

「？　どうした？　呆けた顔をして。昨日同じ時間にまた来ると言っただろう」

「じゃ、じゃあ、もしかして……し、師匠ですか？」

「？　当たり前じゃないか」

そこに居たのは、暗闇で見えづらかったが、赤く長い髪を一つにまとめ、まだ若干幼さが残る整った顔立ちの女性だった。

ポカンと見つめていると、何に対して驚いているのかを察した力ーテルが話を進める。

「うん。すまなかった、確かに昨日は言わなかったな。見ての通り私は女だ」

「あ、いえ、こちらこそ昨日の時点で気付かなくてすみません」

「いや、姿は隠して声色も変えていたから気付かなくて当たり前……と言うより気付かれては私の信用に関わるさ」

「そうですね」

妙に緊張感のない会話に、二人は笑いあった。

一通り笑いあった後、龍也は真剣な顔つきになり、

「師匠。師匠に話すことがあります」

と言い、龍也は自らの事を語り出した。

自分がどこから来たか、自分が何のために呼ばれたのかを。

「……信じがたい話ではあるが、話に聞くブーゼ・ゲニーならばあり得るのか。……にしても、君は本当に不憫な人生を送っているな」

「………言わないでください」

「それで？ 何故それを私に話した？」

「……師匠が俺に名前教えてくれたからです。それは信用してもらえたって事ですよね？」

「だがその名前も偽名かもしれない。それに気付かない訳ではないだろう？」

「………だとしても、話していたと思います」

「何故」

「しいて言うなら俺も師匠が昨日言ったのと同じで気に入ったからです。それに、嘘かもしれないのは俺も同じですし」

その言葉にやっと納得してくれたのか、

「ふっ、その通りだ」

カーテルはクスリと笑い、答えた。

「さて、早速だが始めよう」

「はい」

「私が教えるのは気配の消し方、暗殺術と近接戦闘も視野に入れた格闘術、それと征眼術だ」

「征眼術？」

知らない単語に疑問符を浮かべる龍也。

「ああ、征眼術とは魔陣のように陣を使わない特殊な術のことだ」

「えっと、魔術とは違うんですか？」

「ほう、魔術は知っているのか。あれは確か威力はあるが、使えるものが限られているはずのもの……ああ、ブーゼ・ゲニーか……。とにかく魔術とも違う。征眼術はダメージを与えることの出来るような大きな力は発揮できないが、眼にある力を込めるだけで、言葉や準備が必要なく発動できる万能な術」

「へえ、征眼術にはどんな効力があるんですか？」

「例えば、そうだな……使うものの実力にもよるが、遠くのものを見たりするものや、上空からどう見えるかを知ることが出来るものもある。完璧に使いこなせることが出来れば目を合わせるだけで、若干の記憶操作も出来るらしい」

龍也はすごいという感想とともに一つ頭に浮かんだ。

「……………昨日もしかして、使いました？ 征眼術」

「むう、気づいたか。確かに使ったな。あれは相手の目を見、言動に嘘がないかを確かめるものだ。嘘をつくと征眼術を使ったものには相手の目の色が変わった様に見えるのさ」

「なるほど」

「さて、少し話し込みすぎってしまったな。改めて……始めようか、

リユ一」

「はい。師匠」

こうして龍也の各修行の日々が始まる。

十三話（後書き）

考えてみれば、やっと二日目終了。

なにやら長い道のりです。

十四話（前書き）

少し時間が経ちました。

十四話

この世界に召喚されてから数日がたった。

元の世界での俺はいわば行方不明って事になるが。

「むこうでは俺はどう思われてんだろうな……。まあ、学校とかは普通にサボることも多かったし、多分まだ気づかれてないか……。いや、それはないか。すぐにあいつは俺がどこにも居ないことの気づくんだろうな……」

あいつこと、幼馴染の蒼井樹。

龍也がこの世界に召喚される直前にメールを送った奴。

さらに龍也が最後に会話したのも青井樹であった。

「確かなんか用事があるみたいだったし、学校終わりで俺の家に直行して、居ないことに気づく、んで心当たりを一通り探して、ほんとにどこにも居ないことを知って……。んー警察に届けるか、自力で探し出そうとするってどこか」

実際に樹が俺を探したら、本当にこの世界まで自力でたどり着きそうで怖い。

——てか、二カ月後に呼ばれる勇者ってやっぱりあいつじゃね？

「リユーヤ、何をボーっとしているのだ。一人で訓練を開始してから一度も私を訪ねてこないが魔力コントロールは進んでいるのか？」と、訝しげに問いかけてきたのは、俺をこの世界にふざけた理由で召喚した最悪の変人野郎ブーゼ・ゲニーだ。

「……なにやら失礼なことを思わなかったか？」

「事実しか俺は思っていない」

「まあ、いいか……で？　どうなのだ」

「まあまあだよ」

実際はある程度コントロールできるようになっていた。

体内の魔力量も大体つかめるようになっていたので、もう魔力の使いすぎで倒れるようなことは無いだろう。

ただ、その事実をはっきり伝えると「ふふん！　そうだろう！

天才であるこの私が教えたとおりだろう？」とかウザイことを言いそうだったので、適当にごまかしておく。

「ふふん！　そうだろう！　天才であるこの私が教えたとおりだろう？」

くそっ！　これでも言うのか！

ゲニーへの苛立ちを隠せないでいると、

「ふむ、だがそろそろ魔術訓練は切り上げたらどうだ？　疲れているのだろう？」

……………ゲニーが俺に気を使うう？

「何を考えてる」

「……察しがいいな。というか私が気を使うことはそんなにおかしいことか」

「ありえないね。出会って数日しかたっていない俺でもわかる」

「ふむ、まあいい。魔術訓練も大分完成されてきたのだろう。そろそろ別なことを覚える気はないか？」

なるほど。要は俺に魔術以外の戦闘方法を覚えさせたいわけか。
国のために魔族や魔王と戦わせるつもりならば、魔術だけではな
く接近戦もできるようになるほうがいいに決まってる。

「断る」

「……………何故だ？」

「面倒だ」

実際の理由は他にある。

俺は剣以外の戦闘方法、暗殺術を習っている。

師匠が言うにはどうやら俺は、暗殺のための体捌きや気配の消し
方の筋がいいらしい。

体術もある程度形になっているので、新たに別なことを教わる必
要はない。

ただ、征眼術は相性が悪いのかなかなかうまくいかないのが今の
悩みだ。

今後、戦うことがあるかもしれないのはわかっている。
だから戦いを教わっているのだ。

だがこれは魔族や魔王と戦うためのものじゃない。
元の世界に帰るために力をつけているのだ。

仮にその魔王が元の世界に帰るのを邪魔するのならば戦うことも
ありえるが、そんなことはほとんどありえないだろう。

もちろんこの事は誰かに話すつもりはない。

ゲニーはもちろん王様やレイさんにもだ。——レイさんは若干良

心が痛むが、暗殺術を習っているなんて言って怖がられたくないので。

「……………そうか。気が変わったら言え。騎士団長には話を通しておく」

そう言ってゲニーは練習場を後にした。
さりげなくリッターさんの名前を出したのは、剣のことを頭の片隅にでも残そうとしたのだろう。

ゲニーが何を考えているのかはわからんが、もしかしたら今後、何かを仕掛けてくるかもしれないな。

「でもま、確かにあいつの言うとおり少し疲れたし、部屋に戻る……のやめようかなあ？」
あれえ、なんだろうか……すごく嫌な予感がするよ？ 特にこの部屋を出てはいけないよ的な。

「…………でも出ないわけには行かない、か」
そして龍也は意を決し、魔術練習場を出る。

「おい！ 貴様！！　そこで何をしている！！　こちらに来い！！」

「はい、やっぱりー」
もうやだ。この予言を回避する方法はないのですか？

「何を言っている！ 貴様、以前ブーゼ・ゲニーに連れられ、国王の間に入ったものだな！？　ここで何をしていた！！？」

あ、この人前に王様の前でゲニーに怒鳴りつけて、王様に怒られ

た人だ。

名前は……………なんだっけ。

「おい！！ 聞いているのか！！」

「ああ……………何って、魔術訓練……………」

「ふざけるな！！ 貴様に魔術が使えるわけがないだろう！！ 正直に吐け！！」

「いや、嘘なんかついてないし」

「ちっ！！ まだ言うか！！ 来い！ 牢屋にぶち込んでやる！！」

あーもう、面倒くさいな……………。

今程度の實力でも気配を消せばうまく逃げられるだろうけど、こんなところで隠していることをばらすのはなあ……………。

「んー、仕方ないか……………マワカモレゼヲヨ」

龍也の周りに風の壁が生まれ、龍也を連れて行こうとした騎士が風に押され、尻餅をついた。

覚えたての簡単な風の防御魔術を使ったのだ。

「なっ！！」

「これでわかってもらえました？ 俺は魔術を使えて、今ここから出てきたのはここで訓練してたからです」

それだけ言い残し、龍也は自らの部屋に戻った。

残された騎士は魔術に圧倒され、しばらく呆然としていたが、徐々に状況を理解し、使えるものがほとんど居ないという魔術を使つた龍也への嫉妬と畏怖を込め、呟いた。

「化け物めっ！！！」

この件で龍也のゲニーが作った化け物説がさらに進んでしまったことに、龍也は頭を抱え、真実を知るゲニー以外の面々は龍也に哀れみの目をむけ、同情の言葉をかけたという。

十四話（後書き）

龍也君は恐らくどのルートを選んでも、似たような目に合いました。

彼に励ましのお便りもお待ちしております。

8 / 6 魔術内容を多少変更です。

十五話

えー俺こと日野龍也の噂に尾ひれがついて大きく広がっています。

今まではすれ違うメイドさんたち（レイさん以外）は俺を見ると壁際により、俺が過ぎ去るのをじっと待っているだけだった。

てか、それだけでも大分傷ついたが。

噂が広がっている今、メイドさんたちは俺を見ると、小さく悲鳴を上げ逃げ去ります。

……………つらい。

いや、なんかもう自業自得のような気もしないでもないや。

昨日、騎士さんに妙なイチャモン付けられたから魔術を使って逃げたっけ、その騎士さんは、

「ブーゼ・ゲニーが作った人型の化け物は、魔術が使え、気に入らないことがあると容赦なく魔術を使う」

って城中に流したみたいなんだ。

——普通なら信じはしないだろうけど……ゲニーの悪評ってすごいね？ 皆あっさり信じちゃった。

……………つらい。

という訳で、どうも部屋の外には出づらい状況です。

「あの……………リユーヤさん、元気出してください」

励ましの言葉をくれるのは唯一メイドさんの中で噂を信じていないレイさん。

彼女は俺に関わることの多い、専属のメイドということで、先日

王様から直接俺が異世界からの来訪者だと教えられたらしい。
つまり、どう言いつきっかけでこの世界についたかも教えられている
ようで、その次の日はすごく励まされた。

「ありがと。あなたは俺の唯一の癒しです……………」

「そんな……リユーヤさんてば」

若干、顔を赤らめて照れるレイさんに癒されながらも考える。

——さて、何か城の中で動きづらくなっちゃったけど、どうしようか。たぶん城を出ることも許されないんだろっし。

時間的には魔術訓練の時間なのだが、恐らく練習場の前には噂を信じた騎士が厳戒態勢で立っているような気がする。

「うーん……」

「あまり悩みすぎは良くないですよ？」

「ああ、いや最近ずっと訓練漬けだったから、何もしてないと落ち着かなくて」

レイさんはそれを聞き、少し笑って、

「では、お茶にしましょう？ よく考えればリユーヤさんこの世界に来てから勉強や特訓しかしてないですし」

「はあ、まあ」

言われてみれば確かにそうだ。

おかげで大分実力はつきつつある。

「じゃ、準備してきますね？」

そう言い、レイさんは部屋を出た。

「さて、昨日師匠に言われたことでも実践してみるか」

龍也が昨日の深夜、征眼術がうまくいかないことを師匠である力ーテルに相談したところ、筋自体は悪くないが、目に魔力が集中しすぎていると言われていた。

本来、征眼術は魔力が少ないものが自らの生命力を力に変えて使うもの。なので、目に集中すべきは魔力ではなくて、生命力なのだそうだ。

ちなみに生命力を使うといっても、使ったから死んでしまう、など大きいものではなく、使いすぎてもせいぜい次の日に筋肉痛がひどくなるとかすごくおなかが減るとか、その程度のものだそうだ。

龍也は魔術の訓練も同時に行っていたため、どうしても魔力を使ってしまうことが多いとのこと。

師匠によると、特別な呼吸法を使うことで生命力が引き出しやすくなるらしい。

暇を見つけて試すように言われていた。

数回試していると、扉の外に誰かの気配を感じた。

——レイさんか？ ……いや、違う。

集中し気配を読んでみると、明らかな悪意や殺意が混じっている。あれあれ？ とつても嫌な予感がするよ？

嫌な予感を感じ取ったところで、逃げる暇なく扉が開いた。

ぞろぞろと入ってきたのは、武器を構えた騎士が数名。

「……………なにか、御用で？」

恐る恐る尋ねるも答えはなく、代わりに「かかれっ！」の音が響いた。

統率の取れた動きで攻撃を仕掛けてくる騎士たちに、それを危なげなくかわす龍也。

騎士たちの動きは明らかに龍也の命を奪おうとするものだった。

「ちよっ！ 本気で殺す気がって！」

「くっ！ ちよこまかと！」

「おい、攻撃の手を休めるな！ 魔術を使う暇など与えるな！」

一瞬何故自分が！？ と思っただ、どう考えても噂のせいだ。

その証拠に今自分を襲っている騎士の中に昨日の騎士も混ざっている。

騎士の攻撃は緩まるどころか、よりスピードを増していく。

だが、すでに騎士たちの攻撃パターンを龍也は見切っていた。

統率の取れた攻撃は大人数対大人数では効果を成すのだろうが、一人が相手する分には読みやすいものだったのだ。

さらに、龍也の目は暗殺者であるカーテルの動きになれてしまっていたため、騎士がいくらスピードを上げたところで、龍也にとつては取るに足らないもの。

どうしたって騎士の攻撃は当たらない。

「……………」

だが、龍也も反撃には出なかった。

——いや、反撃が出来なかった。

今の龍也の実力ならば、この場で撃退するのは簡単だったが、龍也は戸惑っていた。

今までちよつとした喧嘩なら何度もした。

幼馴染の樹に巻き込まれて、それなりの人数に囲まれることも多からずではあるが、あった。

しかし今自分に対し向けられているのは剣。そして殺気。それに怯えることなくいられるほど龍也は強くなかった。

相手が自分を殺そうとしている現実には、龍也は焦り、恐怖した。

恐怖の時間が続くほどに、龍也の精神を削っていく。

「っ……！ ふー……」

だがそれで折れるほど龍也は弱くもなかった。

恐怖の時間もわずか。

龍也は徐々に落ち着きを取り戻していく。

………落ち着け。冷静になれ。今後、俺にとって殺しは身近なものになる。

何せ師匠は暗殺者。俺もいずれ人を殺すかもしれない。

自分の頭を冷やし、焦りも恐怖も捨てた龍也は、状況を把握した。

ここにいる全員は今俺が倒せない相手じゃない。

だが、この城の騎士を倒してしまうのは問題があるんじゃないか？

今龍也は城に住まわせてもらっている身。それも異世界から来たっただけで特別扱いされている。

しかしそれだけだ。

少しでも城に、いや、国の反感を買ったら、この国にいられないのではないか。

元の世界に戻るための情報が何も無い今、それはまずい。

「あー、どうしょ」

「当たらんっ！！　まずい、奴は言葉を発する余裕がある！　魔術の発動に警戒しろ！」

いや、撃たんし。

「くそっ！！　化け物がっ！！！」

止めてくれないかな？　結構傷つくんだけど。

龍也が悩んでいると、やっと助けが入った。

「お前たち！！　何をやっている！！！！」

『団長！！？』「あ、リッターさん」

現れたのは騎士団長のリッターさん。

つまりは恐らくこの人たちの上司だ。

「ふー、助かったあ」

ついそう呟くと、騎士たちはギロツと睨みつけてきた。

こーわ。

とは言え、すでに助けがいる今の状況で恐怖など感じていない。

「止めないか！　……　すまない、リユーヤ様」

「いえいえ、大丈夫です。傷一つ付いてないですし」

襲われた恨みもちよつと込めて、嫌味を言う龍也。

しつかり嫌味と理解したのか、怒りをあらわにする騎士たち。

「それでも、だ。明らかにこちらの失態だ」

「団長！！　何を言ってるんですか！　我々はこの化け物を！！」

「黙れ」

噂を広めた騎士が俺に殺気を送りながら、リッターさんの説得を始めようとした。

だが、リッターさんはそれを一蹴した。

「お前たちは一体何をやっている！！　リユーヤ様は国王様より直

々に護衛をするよう言われているはずだ！ それをあるうことが剣を向けるなど……」

「しかし団長！！ その化け物は魔術を使い、いずれはこの国にも害を及ぼすかも知れません！」

「黙れといっただろう！！ この事は国王様に報告させてもらう。特にマハト・ガイラ！ お前は今回のことだけでなく、リユーヤ様の根も葉もない噂を流しているだろう。国王様はだいぶお怒りだ。それ相応の処分があると思っておけ！！」

「なっ！！」

あ、そうだ思い出した。名前。マハト・ガイラだ。うん。この人怒られて八つ当たりで誰かに殺気を送るイメージしかないな。

実際この部屋を出るときめっちゃ殺気送ってきたし。

てか、マハト・ガイラ…… また俺になんか仕掛けてきそうな……。

これも予言になっちゃうのか……？

……嫌われるのはもうやだなあ。

数分後、お茶とお菓子を持って戻ったレイさんは、荒れた部屋を見て驚愕しました。

十五話（後書き）

龍也君、少しずつ実力がついてきて、ビビりづらくなっています。

でも心はナイーブ。

十六話

「と言った感じなことがこの二日間でおきました」

マハト・ガイラら、騎士たちの襲撃があつた日の深夜、龍也は力
ーテルに報告した。

「リユー……この短い間に酷い目に合いすぎなのだが。……一回神
殿でお祓いかなんかをしてもらったほうがいいんじゃないか？ な
んというかもはや呪いではないのか？」

同情を超えて心配されてしまった。

しかし………否定できない。

「前向きに検討します」

効かない気もするけど。

「まあ、リユーが今の実力を隠したいのなら反撃しなかったのは正
解だ。騎士たちの攻撃をかわし続けたことは若干実力が知られる恐
れもあるが、逃げるのに必死だったとか言っておけば問題ないだろ
うしな」

「はい。実際そんなようなことを言いました」

襲われてしばらくしないうちに王様から直接、話を聞かれた。
事情聴取だ。

と言つても王様は俺の正体を知っているわけだから、特に詳しく
聞かれずに多少誤魔化してもバレはしなかった。

「それで、征眼術のほうはどうだ」

「呼吸法は暇さえあれば行なってますが、まだ効果は出てないですね」

「ん、まあすぐに効果が出るものでもない。征眼術に関してはゆっくりでいいな」

「……………征眼術に関してはですよ……………」

「ふふっ……………それは今まででもわかっているだろう？」

「……………はは」

龍也が乾いた笑いをもらすのは、今までの特訓……………というか拷問を思い出したためである。

当初、暗殺の特訓だから、気配を消すことと急所の場所を的確に覚えることぐらいだと思っていた。一応、近接戦闘も教えるとも言っていたが、そんなのは嗜む程度だと勝手に高を括ってしまっていたのだろう。

甘かった。

確かに気配の消し方や急所の狙い場所も教わったが、それ以上にそこを的確につくための技術と、一瞬で終わらせるための速さを指導された。

——実践を交えて。

そしておまけ程度だと思っていた近接戦闘術もみっちり叩き込まれた。

——もちろん実践を交えて。

今何故生きているのかは自分でも不思議なところだ。
まあ武術などをまったくやったことがない俺を、この数日と言う

短期間でここまでの実力まで持って行ったのはこの指導方法があったからなのだろうが。

「とにかくあの指導方法を変えるつもりはないんですね……。まったく、どれぐらい強くするつもりなんですか？」

「当然だ。実際強くなっているしな。それとどれぐらいなどすでに言っただけだ。私の全てを教えろと」

「……………それはうれしい限りなんですが、このハイペースのしこき……………一体どれだけ期間で仕上げるつもりで……………」

「ん……………むう、それは詳しく考えてなかったな。そうだな……………まず勇者召喚が二カ月後、と言っていたな。だったらそれを目途にしようか。リユーはそれまでこの城にはいるつもりなのだろう？」

「……………あー」

詳しく考えてなかった。

そういえば俺もそうだが、二カ月後に召喚される勇者も何の了承もなく、勝手に召喚されてしまう存在だった。

どついうやつが来るかはわからんが、そいつも不幸な奴にはかわりない。

出来れば俺が元の世界の帰れることになったとき、そいつも一緒にのほろがいただろう。

だが、今からこの城を出ても実力の低く、冒険や魔陣に関して素人の俺が二ヶ月でヤマノカズヤを見つけ出したり、帰るための魔陣を作り出したりは出来ないと思う。

とは言え一応勇者とやらもすぐには魔王討伐に向かわされたりはしないだろう。

弱いままで殺されては意味がないからだ。
それでも、勇者の修行に費やす時間は長くて一ヶ月。

だったらしつかり実力をつけて、その一ヶ月で帰る方法を探しきったほうがいいかもしれない。

「そうですね。じゃあ二ヶ月で」

もし、勇者が魔王討伐に乗り気だったり、この世界に移住する気満々だったらおいていけばいいし。

「わかったよ。四つの頃から十四年かけて作り上げてきた技、この二ヶ月で叩き込んでやろう」

おおぅ……凝縮された修行になりそうだ。

「って師匠、十八だったんですか」

「なんだ？ もっと大人の女に見えたか？」

と、若干色気を出しながらからかいの意味を込めて問いかけてくる師匠に、

「いえ、可愛い顔立ちだったんで同い年か年下かもって思ってました」

龍也は見事なカウンターを繰り出した。

「なっ！！ か、かわ、いつて……！！」

暗殺者ゆえに人前に出る事のないカーテルはそんなことは一度も言われたこともなかった。

そんなことを知る由もない龍也はさらに追い討ちをかける。

「はい。師匠は可愛いですよ。こんな可愛い人に修行をつけてもらえるなんて光栄ですし」

龍也は人の外見を褒めるなどはあまりしたことがないので若干、社交辞令も入っているのだが、言葉の内容自体は龍也の本心からくるものだった。

なので動揺したカーテルが征眼術で真偽を確かめても、嘘はついてないと出てしまう。

真っ赤な顔を隠すようにうつむいてしまったカーテルに、やっと龍也が気づき声をかける。

「？ 師匠？ どうかしたんですか？」

しかし時すでに遅し。

「……………だ」

「え？」

「修行開始だあ！！！！！！ 行くぞー！！！！！！！！」

「ええ！？ いきなり！？」

カーテルの照れ隠しの指導は、いつも以上にすさまじいものだった。

十六話（後書き）

師匠は照れ屋さんです。

いずれ戦闘も書きたいとは思っていますが……なかなかうまくいかず……もう、何話か先になりそうです。

十七話

龍也は昨日の深夜で酷使しすぎた体を引きずりながら、魔術練習場へ向かっていた。

龍也に対する警戒は王様が直接、必要ないと明言してくれたので、すでに解かれている。

ただやはりと言うべきか、噂は未だ信じられていて、近寄ってくる人はほとんど居ない。

「あーきつつ……師匠、やりすぎだよ……」

「リユーヤ様！」

魔術練習場に付く直前、リッターさんが話しかけてきた。

「ああリッターさん。なんですか」

「いや、自分の部下の不祥事なのでな。もう一度謝罪をするべきかと」

「気にする必要はないですよ。実際無傷でしたし……それより、あのマハト・ガイラ、でしたっけ？ あいつはどうなりました？」

「ああ……とりあえずは謹慎処分となった。王はお怒りになられて追放しようとしたのだが、自分が謹慎に留めてもらった。……すまない、剣を向けられたリユーヤ殿にしてみればあいつはいないほうがいいのだろうが」

「大丈夫ですよ。ただ……正直そんなに反省するとは思えませんけど。というか勘ですけど謹慎ですら納得いつてないんじゃないですか？」

「……その通りだ。自分が正しいと信じて疑わないと言った感

じでな。かなり反発していた」

「ははは……まあ、もうあんなのがないならいいですよ」

「ああしつかり教育しておく」

昨日は魔術の訓練が出来てないので、早めに始めようと思っていたのだが、リッターはまだ何かを言いたそうであった。

「まだ何か？」

「ああ、いや……………君の言ったとおり国王様に確認してね。君の正体を聞かせてもらった」

「あ……………」

「その、なんだ……………あ、もう同情はいいです。もう忘れるようにしたいんで……………すまん」

すぐに言いたい事がわかったのは、すでに若干リッターの性格を掴んでいたためである。

「とにかく自分が言いたいのは、何か困ったことがあれば自分を頼ってくれと言うことだ。自分に出来ることであればなるべく協力しよう」

「ありがとうございます。じゃあ、もし何かあれば」

「確かブーゼ様は剣を習うことがあれば自分に教わるよういつていたのだったな。どうだろうか、習う気はないか？ 昨日の騎士たちの攻撃をよけ続けた運動能力があればいい線までいくと思うのだが」

「あーいや、とりあえず遠慮させてもらいます。剣はたぶん向いてないんですよ。それに昨日は必死だったから出来たことだと思えますし」

「そう、か。気が変わったらいつでも言ってくれ。時間を作って指導させてもらおう」

「……………はい」

ゲニーと似たようなことを言っていたが、ゲニーに協力しているのだろうか。

……いや、ないな。いいように誘導されてるだけか。

とにかく今でいっぱいいっぱいである。他のものを習う暇なんてない。

リッターと別れた後、すぐに魔術練習場前までついたのだが、龍也は扉を開こうとしなかった。

中に誰かの、知らない気配がするのだ。

昨日の今日なので、もしかしたらと思ひ戸惑っているのだ。

ただ、悪意や殺意などはないので、危険はないのかもしれない。

「……ま、いいか」

と、迷った割には軽く扉を開いた。

「お？」

「……………」

そこで待っていたのは見た目若干軽そうな男であった。

……まあ、人を見かけで判断してはいけなないか。

「どちら様で？　ここはブーゼ・ゲニー個人が所有している魔術練習場のはずですけど？」

「おーおー迷いながらうろうろしてたら奇跡的にもかわらず目的地についてたのかい。んでえ？　あんたがブーゼ・ゲニー氏？」

やはり見かけ通りに軽い奴か……。

「ちがいます。俺は許可もらってここ使わせてもらってるだけです。それとお目当てのブーゼ・ゲニーならここには来ないと思います。研究だかに夢中のようなので」

「固っ！ かったいよーお前さん！ もっとフランクに行こうぜ？ オレはカバリオ・セルフ。せるっちって呼んでくり？ それで、お前さんは？」

……うん、なるほど。ゲニーとは違うタイプのうざさだ。
まあ、元の世界にも似たような奴はいたから、さほど気にはならないが。

「ヒノ・リュウヤです。カバリオさん先ほども言いましたが、ゲニーはここには来ません。研究室を探したらいかがですか？ ちなみに俺は知りません」

もちろん嘘である。

だが嫌な予感がするので、これ以上関わり合いになる気は無「だから固いつてば、りゅーやっち。タメ語でいいよ。それより、この許可をもらって使ってるってことはゲニー氏の関係者だろ？ ゲニーって呼び捨てにしてたぐらいだし」……関わらないのは難しいらしい。しかも馬鹿っぽいくせに意外と鋭い。

「ああ、確かに関係者だ。でもそんなことはどうでもいい。まずは……りゅーやっちなんてふざけた名前で呼ぶな。腹立つ。殺すぞ」

「おおー！ 意外と激情家……。わかったよ、りゅーやん」

「……おい」

「んん？ なんだいりゅーやん？」

「……………もういい」

諦めました。

「それで？ ゲニーに何のようだ。話があるなら呼ぶけど」

「ああ、オレはゲニー氏に弟子入りしようところまで足を運んだのさ」

「……弟子？」

「おうさ！ あの人はこの魔の国でトップクラスの魔陣師。その人の弟子になればオレの人生安泰！ うはうはだ！！」

こいつは馬鹿だなあ。

「しかし、自分の欲だけのためか。まあ、否定はしないけど」

「お！ 話がわかるねえ。それでりゅーやんはゲニー氏とどういう関係？」

ゲニーとの関係性、か。

「被害者と加害者だ」

「は？」

「俺はあいつの実験に利用されてここににいるからな」

「はーよくわからんけど、苦労してんだねえお宅も」

「まあ、な。ここにきたのは魔術の練習のためだ」

「………そういえば、何で俺は魔術の練習始めたんだっけか……？
まあいいか。いずれ必要になることに変わりは無い。」

「魔術！？ りゅーやん魔術使えんの！？」

「あー使えるよ」

「すごいな。魔術つてのは魔陣術と違って限られた人間しか使えないやつじゃん。りゅーやんって天才ってやつ？」

「違うよ。ほんととは誰でも使える。ただ、覚えるために必要なもの

が手に入らないだけ。俺はいろいろ理由があるから使えるようになった。まあどういう理由かは、言えないし、言わないけど」

「ふーん、ならいいや。とにかくオレはゲニー^{あれ}氏に魔陣術を見てもらつて、その才能を認められて弟子入りを果たすのさ」

大した自信だ。

「でもたぶん弟子はとらないと思うぞ？」

「えー！？ 何故だ！？」

「ゲニー^{あれ}は研究の時間を別なことに割く男じゃない」

「嘘だどこどん！」

……そのセリフがこの世界にあるとは思ひもしなかった……。

いや、ヤマノカズヤのせいだ。

とにかく結果はわかりきっていることだが、本人が言うなら仕方が無い。

「まあ、言ってみなければわからないよな。とりあえず玉砕して来い」

「うおーい！ そこまで明らかなのかい！」

「まあな」

「じゃあさ、りゅーやんがオレに魔術の基礎を教えてくださいよ！ したら国はオレを城抱えの魔術師にしてくれるかもしれないし。あ、謝礼なら払うぞ？」

「……あー」

金はともかく、こいつは魔陣を使える。

ならば俺がこいつに魔術の基礎を教え、オレがこいつから魔陣術の基礎を教わることが出来れば、元の世界に帰るための準備に繋がります……が。

いかんせんとても嫌な予感がする。

このままこの男に関わってしまったてはいけないような。

「……ん？」

ふと龍也は部屋の外が騒がしくなっていることに気がついた。

それから数分もしないうちに、リッターさんがドアを勢いよく開け、

「リ्यूーヤ様！！ 突然失礼する！ どうやらこの城に何者かが侵入したようで！ 目的は不明。現在居場所を搜索中、で……………」

リッターさんが何かを見つけ、固まる。

龍也も大体想像がついてしまい、ゆつくりと隣にいるカバリオ・セルフに目を向ける。

「セルフ……お前、まさか」

「……………てへっ！」

馬鹿の可愛くもなんと無いふざけた返事が、龍也の問い詰め何よりの証拠になった。

十七話（後書き）

馬鹿っぽい使えるやつがほしかったんです。

十八話

「リユーヤ様、詳しく話を聞かせてもらっても？」

「いや、俺も詳しくわかんねえよ？ この部屋に入ったらこいつ居た訳だし」

ちなみにこの間本当に城に侵入してきたらしい馬鹿は、カバリオ・セルフリッターさんに縛られて座っている。

「なら、すぐに牢屋へ」待つて待つて待つてー！ ちょっと待つてえー！ オレは別に悪いことしに來たわけじゃないんだようー！」
では、何をしにきたのだ」

芋虫状態のセルフが張ってこちらに近づいてきた。

「何って、ゲニー氏に弟子入りしたくて來たんよ」

「弟子、入り？」

「おうとも！ オレには才能がある。最悪ゲニー氏に弟子入りできなくてもりゅーやんに魔術を教えてもらうんだ。いずれオレはこの国に必要不可欠な存在になるぜいー！」

「リユーヤ様、彼の話は本当で？」

「ああ、いや、ちようどどうしようか考えていたところで。魔術の基礎を教えることで、オレはこいつに魔陣術の基礎でも教わろうかなと。でも、まあ不法侵入の犯罪者ではね……」

「おおーうー！！ りゅーやん！！ 友を見捨てるか！！」

「誰が友か。会ったばかりもいいとこだ」

「友情に時間はないぜい！」

「ああそうだな。だが犯罪は関係するかもな」

「だからりゅーやんが助けてくれればその犯罪も関係ないって！」

「何言ってるんだか……この城に住まわせてもらっている身分の俺にそんな権限は無い」

「そんなぁ……」

「いえ、リユーヤ様。君が頼めば国王様も認めてくれるだろう」

「何故に!?!」

「先日の一件のこともあるので、我々としても何かお詫びをと考えていたんだが、もしリユーヤ様がそれでいいというなら自分は国王様にそう伝える。だがしかしリユーヤ様、彼に教わらなくともブーゼ様に教わればいいんじゃない?」

「前に言ったら時間がかかるから教えねえとさ」

「そうなんですか」

「んー……」

「りゅーやん! いや、リユーヤ様!! どうかお慈悲を! お慈悲をくださいい!!」

この国に貸しを作ったままにしておくのも悪くは無いが、貸しにしても少し小さい気もする。

何かお詫びをくれるというなら貰うつもりではいたが……うーん……。

「……ちなみにどうやって城に侵入したんだ?」

「そうだ……! それは自分も気になっていた」

「ん? そんなの空間転移の魔陣に決まっているだろ?」

「「！！？」」

「馬鹿な！ この城はそのような侵入を防ぐために防護魔陣を何十にも敷いてあるのだぞ！」

「ああ、確かにあれを超えるのは苦労したなあ」

「なっ！ …… ちなみに君の年は」

「んあ？ あーっと確か……十六だったか」

おお、同年。

「その若さで、魔陣術を……！？」

「だからいずれ役に立つって言ってるだろう？ オレ」

なるほど、それだけ高度な空間転移の魔陣を使えるなら元の世界に帰る手がかりぐらいはつかめるかもしれない。

「リッターさん。セルフの罪を無くすよう王様に頼んでもらってもいいですか？ それと出来れば小さくてもいいんでこいつの部屋も」

「！ …… いいのか？ それで」

「いいよ、それで。セルフの身柄は俺が預かるってことで」

「おおおお！！ りゅーやんさすが！！ 恩に着るよう！！」

「では彼はどういう立場に置くのがいいだろうか……」

「あー……とりあえずは城勤め魔陣師見習いってところじゃない？」

「しかしそれだと、雑務が多すぎてリユーヤ様が魔陣術について教
わることが出来ないと思うが」

……なるほど。そうなるか。
なら。

「……セルフ。今さっき、恩に着るって言ったよな？」

「お？ ……おう」

「じゃあ、今のところオレの従者って立場でいい？」

「おえ！？ 何故に！？」

「恩に着るんだろ？」

「お、おう……。 …………… りゅーやんって結構悪魔なんだね？」

酷い言われようだ。

いろいろ終わったら、城仕えに魔陣師に推薦しようと思っていたのに。

「すみませんでしたあー！！！」

読まれた！！？

「いやあ、顔に出てたぜ」

「……まあいいや。とりあえず聞いたとおりで、行こう。王様には鍛えたら使えるようになるから、未来の力ある魔陣師として捉えてもらうように言っというてほしい」

「わかった。確かに伝えよう」

「んじゃ、改めてまして。ヒノ・リュウヤだ。よろしく」

「お、おう！ カバリオ・セルフだ。よろしくう！」

魔陣術の師匠であり魔術の弟子でもある従者が出来ました。

「従者つつても間柄は友達でいいんだよな？」

「別に奴隷でもいいんだぞ？」

[illegible]

十九話 （前書き）

リッターさん視点です。

でも最後だけちょっと違います。

十九話

「失礼いたします！ アトカース・リッター参上いたしました！」
「入れ」

王室に足を踏み入れるリッター。

騎士団長である彼は何度もこの部屋に来てはいるのだが、この独特な空気はいつであろうが緊張はするものだ。

すぐにリユーヤ様に頼まれたことをそのまま国王様に伝えと、快く受けてくださった。

「しかし、城の侵入をしたものがそのようなものだとはな」

「そうですね。ただその進入方法が本当に彼の言ったとおりならば一度、防護魔陣の点検が必要かもしれません」

「うむ、至急誰かを向かわせよう」

「その必要は無いよ」

「ゲニー！？」「ブーゼ様！？」

何の予告もためらいもなく王室に入ってきたブーゼ様。

本来ならば当然不敬罪になるのだが、ブーゼ様はまったく気にした様子も無い。

国王様とブーゼ様は旧知の仲であるようなので問題は無いのだろうが、見ているこちらまで緊張してしまう。

「ゲニーよ、必要が無いとは？」

「大体は周りの騎士から何が起きたかは聞いた。今さっき私が確認してきて防護魔陣はどれも異常はなかった。その侵入者、年は若い

らしいが、なかなかどうして見所があるようだな」

「ほう……？ お前が他の魔陣師を認めるとはな」

「この城の防護魔陣は生半可な魔陣で破れるものではないからな。一度会ってやってもいい」

その言葉を聞き、リッターが口を挟んだ。

「本当ですか？ ブーゼ様。それは彼も喜ばれることでしょう。何せブーゼ様の弟子になるためにこの城に侵入したようなので」

「ほう？ 私の弟子に？ ふん、見る目もあるようだな。忙しいので弟子にすることは無いと思うがな」

「はい。リユーヤ様もそれはわかっていたようなので、彼に諦めるよう言っていました」

「リユーヤが？ ……それで、その若い魔陣師は今後どういう扱いになるのだ？」

「は、リユーヤ様の願いにより、とりあえずの扱いをリユーヤ様の従者にして、成長すれば城仕えの魔陣師として雇うという形に。そしてその間リユーヤ様が彼に魔術を、彼がリユーヤ様に魔陣術の基礎を教えていくと言うことになりました」

「……………何？」

「国王様にも許可をもらいましたので、今から城のものにそう伝えるに「待て」……は？」

リッターの言葉を遮るようにゲニーが言葉を挟む。

「ブーゼ様、何か？」

リッターが怪訝な顔で尋ねる。

「……………いや、魔陣術を教えるのは早すぎる。そのことで魔術が疎かになるやもしれん。それに他の人間に魔術を教えるのもまずいだろう」

「はあ……………」

「しかしゲニーよ。今リユーヤ殿は魔術以外の訓練を断っていると言った。今回もリッターが直接剣を教えると言ったようだが、剣は性に合わないと言ったらしい。だったらその空いた時間で魔陣術を勉強するのはそう悪いことだとは思わん」

戸惑っているリッターに代わり国王が話を続けた。

「それに魔術を教える側になることで本人も魔術を覚えてゆくだろう。何よりどちらも基礎に過ぎないし問題は無いと思うが……………」

まあ、貴様がやめたほうがいいというならリユーヤ殿とそのカバリオ・セルフ、だったか？ 二人に謝罪して、カバリオ・セルフには別な待遇をとらせるが」

「……………いや、いい。どこまでを基礎と扱うかは少し気になるところではあるが、別段問題は無いだろう。……………さっきの話は忘れろ」

「ああ」「わかりました」

「それでは自分は失礼致します」

話が終わった後で、ゲニーと国王がアイコンタクトを取ったのを見たリッターは即座に退室することにした。

「ああ、ご苦労。リユーヤ殿たちには先ほどの通りでいいと伝えておいてくれ」

「はっ！」

退室した後のリッターはしばらく王室の扉を険しい目つきで眺める。

「……どういふ内容の話が行なわれるのかはわからんが……リユーヤ様に何もなければいいが」

この国に召喚された異世界の住人の不幸度合いを見てきたためについ出てしまった呟き。

龍也の身を案じながら、国王の言ったことを実行するために龍也の部屋に向かうリッター！。

仮に龍也が先ほどの呟きを聞いていたとすれば「その一言は、フラグー！」と、ツツコミを入れていただろう。

リッターの退室した後、国王はゆっくりとゲニーを見定めて尋ねた。

「……カバリオ・セルフとやらはお前の言う計画にとっては邪魔か？」

その言葉にゲニーは少しだけ眉を寄せるが、すぐにいつも通りに戻り、

「ふん、放っておいても問題は無い。多少ズレが起きそうだが、修正範囲内だ」と返した。

二十話（前書き）

お気に入り登録件数200件超えました！
本当にありがとうございます。

今回は十九話中の龍也とセルフの話です。

二十話

リッターさんが王様に報告に出た後、改めてセルフに尋ねた。

「聞きたいんだが、お前の使ったって言う移動魔陣ってどんななんだ？」

するとセルフはにやつと笑い、

「知りたいか？ いいぞ、特別だ。……オレの魔陣式には……血が使われている。しかも、自らの血が、な」

「ふーん」

「反応うすっ！ え、何か予想外なんだけど」

「いや、俺魔陣のことまったくわかんねーし……」

ただ、あの言い方だと普通の魔陣には自分の血は使わないみたいだな。

でも移動魔陣が召喚魔陣と似たような部類なら、体の一部を使用するはず。

……つまりは普通の移動魔陣は血とか骨みたいな生きるのに必要な部分じゃなくて、髪の毛とか爪みたいな軽いものでもいいのだろうか？

それとも、移動魔陣と召喚魔陣は別物？

「ま、それはそのうち、だな」

「何一人で完結してるんだよう！」

「わり。で？ 魔陣の基礎ってのは？」

「んー……基礎って聞かれると結構難しいんだよね……。なんてい

うか、まあまず見てもらったほうがいいな」

そう言ってセルフはおもむろに懷から何かを取り出し、床に何かを書き出した。

「つとう！　こんな感じか？　見ろ、これが魔陣式だ。これに誰かが魔力を込めることで、魔陣術は発動する」

それは円の中にいろいろな模様が描かれているものだった。

「……………わかんね」

正直、よくわからなかった。

もしかしたら規則性があるのかもしれないが、今の時点でそれを見抜くことは出来なさそうだ。

「まあ、これ一式見ただけで理解されたらオレの立場がねえよ。これはちなみに火の魔陣式。使ってみろい」

「おう」

龍也は床に書かれた魔陣式に近づき、手をかざして魔力を込めた。すると、大きな火柱が上がった。

「おお！」

「こんな感じだ。属性魔陣は多少は違えど、ほとんど魔陣式に代わりはないから、これを見て覚えるといい。ちなみに威力は中心部の紋様を複雑にすればするほど強くなる」

「へー……………つまりこの少ない部分にどれだけ紋様を組み込めるかで魔陣師としての腕が問われるのか」

「……………その通りなんだが、すぐにその結論にたどり着くりゅーやはやはり天才かん？」

「ちげーよ。天才に追いつこうと必死で頭だけは鍛えたんだよ」

「？ よくわからんが続けるぞ？ 本来、魔陣術を戦闘で使う場合は、何か別なものに予め魔陣式を組み込んでおいて、必要になったら魔力を込めるって感じだ」

「なるほど。剣に組み込んでおけば、剣士も魔術みたいなことができるってわけか」

龍也は漫画や小説でよくあるようなことを何気なく口にする。
だがそれに対し、セルフは予想外に反応を示す。

「……いや、それは考えたことなかったなあ。今まで魔陣を地面に仕込んで畏にしたり、紙とかに書いたりして、相手に向かって魔力を込める、みたいな戦い方しかしてなかったし」

「へ？ なんだそりゃ。何かもつたいない」

「いや、もしかしたら何らかの理由で実現が難しかっただけかもしれないし……まあ、暇なときにでもやってみるか」

「つと、そういえばりゅーやん、属性は？」

「風だ」

「そうか。これは基本的なことだから知ってると思うけど、属性付きの魔陣は、作る人間の属性に左右される。だからりゅーやんが属性魔陣を作ると風の魔陣しか出来ないってことなあ」

そういえばゲニーがそんなことを言っていたような気もする。

「じゃあ、セルフは火属性か」

「おー、平凡的だろう？」

「とりあえず、属性魔陣についてはわかった。じゃあ次は「失礼します。リユーヤ様。国王様に確認を取ってきた。先ほと言った通りでいいそうだ」……ういっす」

王様に会ってきたリッターさんが意外と早く戻ってきた。

「つまり晴れて俺はりゅうやんの従者ってわけかい」

「そうなるな。よろしく。で、それはいいとしてさっきの続きなんだが」

魔陣術についてさらに尋ねるつもりの龍也だったが、またもリッターに止められる。

「すまない、リユーヤ様。まずは彼に城に勤める証と部屋を与えなければならぬ」

「おお！ 待ってましたあ！」

セルフは龍也をおいて勢いよくリッターの元に走っていった。

「……………まあ、また今度でいいか」

リッターに連れられ、意気揚々と出て行く従者を見つめながら、龍也は元の世界のことを思い浮かべ、魔術訓練を始める。

二十話（後書き）

繋ぎの話でした。

次の話から少し何かが始まります。

二十一話

セルフが城に侵入し一週間がたった。

つまり俺がこの世界に召喚されて大体二週間だ。

いい加減元の世界でも搜索願ぐらいは出てるだろう。

理由はわからないが、城の中では最近やっと、他のメイドさんたちが俺に対する警戒を解き始めていた。

まだ、やはり近づけば緊張の色を見せるが、その後は戸惑いながらも会話をしてくれるようになったのだ。

よかった。……ほんとによかった。

——ちなみにセルフが龍也の従者となったことでよく一緒に歩くようになったセルフと、漫才のような会話するのを周りが頻繁に目にするようになったのが理由であった。

ただ、騎士の中にはまだ俺を敵意の目で見てくる人も少なくない。噂を信じているものもそうだが、騎士たちの攻撃を全てよけきってしまったのが、騎士たちの間で広まってしまったようだ。

何度も偶然だと言っているんだが。

一応、何度も殺気向けられるうちに意外と殺気に慣れてしまったが、やはりいい気分はしない。

「はて、どうしたもんか……」

「なにがさね？ りゅーやん？」

「セルフ。突然後ろから声をかけるのはやめる」

「ぜんぜん驚かないくせにー」

当たり前だ。

こんなに近くににいるのに気配に気づけなかったら、修行している意味が無い。

気づけなかったら、それこそ師匠に殺されてしまう。

「で？ なにがどうしたもんかって？」

「んー……この城の騎士が俺に対して敵意を向けてくることが多いなって」

「ああ、そっぴやそうだねい。なんかしたんか？」

「いやなにもしてないよ。俺は」

どうもゲニーのせいのような気がしてしょうがないんだが。

「ま、騎士団長さんは友好的だからいんじゃないかね？」

「まあ、リッターさんはな」

王様に俺が異世界から来たと教えられているし。

セルフにはまだ俺が異世界から来たことを教えていない。

もちろん他の知っている人間にも言わないように頼んである。

「（従者でもあるし、機会を見て自分で言うべきだろう……）」

「おっとオレはこれからメイドさんたちとお茶してくるよう！　じゃねー」

そう言い残し、止める間もなく走っていくセルフ。

「は？　おい！　……」

反応するのが遅れ、セルフの方を見ても、すでに去った後だった。見た目どおり、軽いノリで着々と城内の女の子たちと仲良くなつていくセルフに一言。

「爆発すればいい」

セルフとわかれた後、訳も無くふらふらと城内を歩く龍也。
暇なのだ。

午前中はいつもの魔術訓練で、本来ならこの時間はセルフに魔陣術を教わる時間だったのだが。

「あいつ従者って言葉の意味わかってんのか？」

と、ぶつぶつ文句を言いながら歩いていると龍也は嫌な気を感じ取った。

「……はたしてこれは修行の成果なのか、いつものものなのか……」

うんざりしながら龍也がそう呟くと、

ドオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！！

激しい音が城内に響き渡った。

「何だ!？」

自身が呟いた瞬間だったためか、非常に驚く龍也。

しばらく城内の様子を見て回っていると、

「リユーヤさん……！」

レイさんが焦りながら駆け寄ってきた。

「レイさん！？　どうかした！？　一体何が！？」

「そ、そそれが、まだ、よ、良くわからないんですが、城門の扉が爆発したと」

「は！？　ば、爆発！？」

「は、はい……い今、騎士の皆様が急いで城門まで……」
理解できない状況に動揺が隠しきれないレイさん。

「落ち着いてレイさん！　今はとりあえず安全な場所に」

と龍也が言い終わると同時に、騎士の一人が走りながら状況を伝えだした。

「魔族だ！　爆発とともに獣型の魔族が数体、城内に侵入した！！
戦える者はこちらへ！　それ以外は安全な場所に避難を……！」

魔族……予想以上の早さで出会ったことになったな……。

二十二話 （前書き）

レイさん視点です。

二十一話

わ、私は一体どうしたらいいのだろう……！？

最近リユーヤさんの従者になられたセルフさん（リユーヤさんはさん付けなのに従者であるセルフを様付けするわけにもいかなかった為、さん付けになった）にお茶に誘われたけれど、リユーヤさんがいないということなのでお断りした私は、そのリユーヤさんを探していました。

リユーヤさんは午前中魔術訓練のために練習場に行っていたはず。——だったら、その付近を。

ドオオオオオオオッ！！！！！！！！！！

「ふええええええええええ！！！？？？」

しばらくいろんな場所を探していると突然大きな音が聞こえ、軽くパニックになりました。

無性に恐ろしくなった私は急いでリユーヤさんを探しにいったんです。

その際、急いでどこかに向かう騎士様に城門が爆発したと教えられました。

詳しい状況はまだわかっていないようで、この掴めない状況にさらに恐ろしくなりました。

そしてやつと城内を見て回るリユーヤさんを見つけました。
どうやら現状を把握しようと搜索していたようです。

「リユーヤさん！！！」

慌てて駆け寄る私をリユーヤさんは優しく抱きとめてくれました。

「レイさん！？　どうかした！？　一体何が！？」

「そ、そそれが、まだ、よ、良くわからないんですが、城門の扉が爆発したと」

さすがに少し動揺気味のリユーヤさんに先ほど教えられた情報をお伝えしました。

「は！？　ば、爆発！？」

「は、はい……い今、騎士の皆様が急いで城門まで……」

ここまで話したところで、自分の体が震えていることに気がつきました。

「落ち着いてレイさん！　今はとりあえず安全な場所に」
リユーヤさんがそう言った直後。

「魔族だ！　爆発とともに獣型の魔族が数体、城内に侵入した！！
戦える者はこちらへ！　それ以外は安全な場所に避難を！！！」

——……ま、魔族？　何でこの城に……？

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

私の頭の中が恐怖でいっぱいになって……。

リユーヤさんはそんな私の頭に手を置き、

「レイさん、大丈夫。何とかなる。……いや、何とかするよ」

そう言って私を諭してくれました。

魔族が侵入したというこの状況で、とても落ち着いているリユーヤさんを見て、安心しました。

この人のそばにいれば大丈夫だと。

私は、小さく深呼吸をし、

「……………リユーヤさんが何とかしてくれるというなら、私はそれを信じます」

と答えました。

するとリユーヤさんは笑顔を向けてくれました。

その後リユーヤさんが何かを言おうとしたのですが、

「りゅーやん！！ 無事か！？」

数人のメイドを連れたセルフさんがこちらに駆け寄ってきたので、言うのを止めたようです。

「ああ、そっちは」

「今近くにいたメイドさんたちを安全な場所に案内してるところだぜい。何でも敵の侵入にそなえた、避難部屋見たいのがあるみたいだわ」

セルフさんはどうやら暇を見つけて、城内部の探索を行なっていたようです。

「そうか、じゃあレイさんも一緒に頼む」

リユーヤさんは私をセルフさんの後ろに誘導しました。

「……りゅーやんはどうする気だ？」

「ん、寄るところがある」

他のメイドたちはきよんとしています。

しかしセルフさんは険しい顔でリユーヤさんを見て、

「オレもメイドさんたちを安全な場所に運んだらすぐに合流する！

！ 無茶はするんじゃないぞ！？」

と叫びました。

そこでやっとメイドたちがリユーヤさんが何をしようとしているのかを察したようです。

リユーヤさんはそんな事はまったく気にせずに言います。

「何の話かわからないが、さっさと行け」

「……こっちだ！」

セルフさんは迷うことなく走り出しました。

後ろを見るとすでにリユーヤさんは走り出しており、声をかけても届きはしないでしょう。

それでも、

「気をつけてください……リユーヤさん……」

そう、呟いてしまいました。

二十二話（前書き）

続きです。

二十三話

敵の気配を探りながら走る龍也。

レイさんに自分が何とかすると大見得きつたのは、今後旅をする上で必ず必要になるはずの獣との戦闘を練習することにしたからだ。

冒険者ギルドで稼ぐとして、魔獣討伐なんてのは必ずあるだろう。だったらたとえ魔族とはいえ、初戦は周りに騎士もたくさんいる城内で戦ったほうが安全だ。

それだけならあそこまではつきり「何とかする」とは言わなくてもよかったのだが、怯えるレイさんを落ち着かせるのはああ言うのが一番だったはずだ。

「しかし……少し残念かな」

震えながら抱きついてくるレイさんを落ち着かせているとき、同時に自分も落ち着かせていた。

女の子を抱きしめるといふ経験をあまりしたことの無い龍也はあの時、見た目にはわからないが酷く動揺していたのだ。

もしかしたら吊橋効果もあるんじゃないかと、邪な考えさえ浮かんできたほどだ。

程なくセルフが近くまで駆け寄ってきたので、レイさんを安全な場所に誘導することが出来たが。

「ま、それはいったん忘れよう」

気配を調べると、人じゃない気配が多数あるのが感じ取れた。そしてその近くに数十人の人の気配も。

「なるほど、これが獣型魔族の気配か」

騎士たちに全部倒される前にと、足を速める龍也に鋭い殺気が迫った。

その直後何かが飛んでくるのを感じ取る。

「っ！……！」

咄嗟に身を振じらせ何とかそれを避ける龍也。

改めて集中しながら気配を探ると、ごく僅かな気配を感じ取った。龍也はその方向に、師匠からもらったナイフを投げつける。

カキンッ！

そのナイフは弾かれ、龍也の足元の突き刺さった。

「……………誰だ！」

叫ぶ龍也の元に低い声がある。

「へへ……驚いた驚いた。まさか一発で終わらないどころかこっちの居場所までバレるたあね」

声が出た直後、龍也の目の前に全身を紫で着飾った長身の男が現れた。

纏う空気でわかる。

こいつは師匠の同業者だ。

「……………」

無言でナイフを拾い構える龍也。

それを見た男は、感嘆の声をあげる。

「ほほう、すげーなすげーな。様になってんじゃねえか。さっきの動きといい、今の構えといい……小僧、貴様俺と同業だな？ ……いや、少し未熟か。なら、同業に師事を仰いでやがるな？ 誰だ？」

「……………」

無言を突き通す龍也。

「はっ！ ま、そくだよなそくだよな。暗殺者がわざわざ師匠の名前を言うわきゃねえか。もし言うようなら教えた奴はただの屑だ」

状況で言えば前に師匠とあったときと同じだ。

だが、今回は間違いじゃなく明らかに俺がターゲットだ。

……一体誰が……。

考え事をしながらも警戒は怠つてはいない龍也だったが、相手は龍也の警戒などまったく気にする様子も無い。

師匠のときは、何の實力もなかったので、相手との實力差など気づくはずもなかった。

——今は師匠として實力を惜しみなく見せてもらって、自分との大きな差を実感しているが。

今回もまた、暗殺者と相対す事となり、今は多少なりとも実力が付いたお陰なのか、相手がどれほどの実力がわかってしまう。

「小僧、なに気張ってんだ？　なに気張ってんだ？　もうわかってんだろ？」

この男のほうが自分よりも強い。

「……じゃ、冥土の土産とかは？」

軽くおどけて言っただけ。

もちろん警戒は解かない。

「すまねーなすまねーな。自分より弱い相手だからって手を抜くよ。うな奴は暗殺者には要らないんだよ」

どうやら、王道展開のように付け入る隙すらもらえないようだ。

「それじゃ、終わらせようか終わらせようか。暗殺を……っと、もうバレてるし、暗殺じゃねえな」

「……………」

「暗殺じゃなく、抹殺だ抹殺だ」

二十三話（後書き）

やっと戦闘描写的のを始めました。

次で戦う……と思います。

二十四話（前書き）

今回、戦闘……つぽいのがあります。

二十四話

「暗殺じゃなく、抹殺だ抹殺だ」

その言葉の直後、殺気を感じた龍也は横に飛び退いた。

その行動は正解だったようで、先ほどまで自分のいた場所には多数の暗器が突き刺さっていた。

だが、そのことに安堵している暇はなかった。

「くっ！！！」

ガキッ！！

細身の剣を持った男が、突進してくるのを何とかナイフで防ぐ。

「ちっ！」

男はすぐに持っていた剣を捨て、どこから複数の暗器を取り出し、猛攻を繰り返してきた。

龍也は身を翻し、それをかわす。

しかし、男はなお攻撃の手を休めない。

何とか男の隙を作り、体術で反撃に出るが、体格差がありすぎて対したダメージにはなっていないようだ。

「なんだ？　なんだ？　マッサージか？」

「くっそ！！！」

苦し紛れに相手が落とした暗器で反撃に出る。
だがそれは、所詮は使い慣れていない武器。

そんなものが通用する訳は無い。

当然のようにそれを避ける男。

龍也は暗器をかわした一瞬の隙を付く。

「ふっ!!」

龍也はもう一つ持っていたナイフ取り出し、それをを横に振る。

当たりこそしなかったが、何とか男を引き剥がす。

ガチャガチャと暗器を落としながら、距離をとる暗殺者の男。

いったん離すことは出来たが、男の顔には笑みが浮かんでいる。

「なるほどなるほど。未熟な腕なりにがんばるじゃねえの？」

「……死にたくは無いんでね。喰らいついていけるってことは、もしかしたら返り討ちに出来る可能性もあるしね」

「無理だな無理だな。今は精神を集中して何とか喰らいついてはいるようだが、人間そんなに集中力は続かんよ。それは小僧もわかってることだろ？」

「……………」

確かにその通りだ。

正直なところ、もう限界が近いのはわかってる。

ただ、もう一つだけ試す価値あるものもある。

「もういいか？ もういいか？ さ、殺ろうか」

暗器を手に構えを取る男に、じりじりと距離をとる龍也。

これで倒せるとは思っていない。

ただ、隙を作るぐらいは出来るかもしれない。

持てる限界のスピードを出し、走りながら呪文を紡ぐ。

「キリイカリテバゼサキトヨケヲナヤ!!」

ズバアアアアアアンツ!!!!!!!!!!

途中で止められぬように、動き回りながら魔術を放つ。

今までの訓練で、魔力コントロールは形になっていたが、今は初めて読み上げたときと同じように、魔力のコントロールなどまったく気にせず読み上げた。

魔力の消費が大きいのだが、そんなことを気にしている余裕は龍也にはなかった。

今持てるほとんどの魔力を消費し、魔術を放った。

「はあ……はあ……」

魔力を使いすぎ、若干息のあがる龍也だが、休んでいる暇はなさそうだった。

魔術が炸裂した先には今、土煙が舞っているがその中にわかりづらかったが、まだ男の気配を感じたのだ。

「っち!! 傷ぐらいは負わせてるだろうな……!!」

だが、恐らく今手傷を負わせていたとしても逃げ切れはしない。

「……………!!」

ならばと龍也は出来る最大限気配を消し、足を速め、土煙の中に突っ込んでいった。

そして見えた人影にためらいなく刃を突き立てる。

しかしそれは、いとも簡単に防がれてしまう。
そして土煙が晴れる。

「っ……！」

「いやー、面白かった面白かった。今のが魔術か」

そこに現れたのは傷一つ負っていない暗殺者の男だった。

「なっ……！」

「はははっ！ 驚いたか？ 驚いたか？ 元々ターゲットが魔術を使うってのは依頼者から聞いてたんでなー。何が来るかわかっていればかわすのも簡単だ。まあ、まさかこれほどの威力とは思わなかったが」

そう言い男は、魔術が防がれたことに驚愕し、構えを取るのが僅かに遅れた龍也の隙をつき、一気に龍也との距離をつめる。

「っ……！！ マワカモレゼレ……っがあ……！！！」

咄嗟に呪文の短い防御の術を放とうとしたが、男にのどを掴まれ使えなくされてしまう。

「もう何もさせないって何もさせないって」

「……………あっ……！」

のどを掴む手にさらに力を込められ、意識が遠くなってきた龍也の耳に、

「ふふっ、まあ魔術を放つまでは及第点。ただその後、防がれたからといって動揺したのはだめ。まだまだ鍛錬が足りないかな？ リ

ユー」

批評の声が届いた。

その瞬間のどに一気に空気が入り込んだ。

「がはっ！！ はあ……！！ はあ……！！ ……し、しょう？」

目を開くと目の前にはいつもの黒装束に身を包んだ師匠が立っていた。

「うんそう、まあ少し休みな？ 多少格上の相手との戦いで疲れただろう？ ……初めての戦いにしてはまあまあだったよ？」

その言葉を聞き、絶対的な安心感を得る龍也。

そしてそのまま壁に身を預け、師匠の戦いを観察する。

二十四話（後書き）

龍也君初戦闘は敗北で。

それにしても戦闘描写はどれも苦手です……。なので、短いのはお許しください。

もうちょっと文章力がほしいですな……。

二十五話

「……そうかそうか、てめえがその小僧の師ってわけか……！」

暗殺者の男は突然現れた師匠に気付いていなかったようで、驚き、警戒を露わにしているようだった。

もはや先ほどまでの余裕は感じられない。

「ご名答。リユーの運の悪さならそろそろ……」と思ってね。張っていたら案の定だったよ。……通り名持ちが出てきたのは少し驚いたけど？ 千殺せんさうのナール」

「っ……！ 何故！ 何故！ その名を……！」

名前を呼ばれた瞬間、暗殺者の男——千殺のナールは驚愕し、さらに警戒を強めた。

てか師匠……ひどい。

「ふふっ……名のある同業は全て顔を覚えているのでね？ まあ、名のあると言っても君はたかが知れてるけど？」

俺の心の中など知る由も無い師匠は、今回何故か声も変えずに、話し方も女性らしく会話をしていた。

「……へっ！ 女にしてはやるじゃねえか、やるじゃねえか。ただ、暗殺者が調子に乗っていると足元すくわれるぜ？」

「私が気を抜いていないのは君もわかっているだろう?」

気を抜くどころじゃない。

後ろに座っている俺にすら殺気が伝わってくるくらいだ。

「……だが、小僧に対して多少格上ったのは間違いだな。そいつは生き延びるので必死だったぞ」

「それが、多少と言った所以なんだけど?」

「なっ!?!」

「リユー。彼と戦ってみてどうだった? 彼の実力をどう見た?」

「!?! はいっ!?! えっと……勝てないとはっきりわかりました。実力は自分のだいぶ上だと」

話しかけられると思っていなかった龍也は、戸惑いながらも答える。

「……へっ! ほら見るほら見る、小僧もそう言ってるじゃねえか」
ナールが笑いながら言う。

「そう。リユーがそう言うように……相手の実力は掴んだと」

「はあ?」「……え?」

師匠が言った事を理解するのに少しの時間がかかった。それは敵であるナールも同様だった。

「てめえ、てめえ、何を言って」

ナールの言葉を遮り、師匠は話を続ける。

「リユー、覚えているといい。実力のある暗殺者は……相対したと

「ここで何かを悟られるものじゃ、ない」

そういつた瞬間、先ほどまで充満していた殺気が消え、師匠からは何も感じなくなった。

まるで、初めて師匠と会った時のように。

……そうか、初めて会ったとき何も感じなかったのは、俺の力がなかったからじゃなくて、師匠が自らそうしていた……。

「その後は修行のために實力差をわからせてもらっていたのか……」
そう呟くと、師匠は一瞬こちらを見てクスリと笑った。

「それにナール。圧倒的な實力差があったら、生き延びるので必死であつても、殺せるはずさ?」「っ!!!!!」
言われている事が正しいと判断したのか、ナールは屈辱に顔を歪めた。

「さてリユー。改めてよく見ておくといい。私の……死風の實力を」

「……………え……………」

正直なところ、何もわからなかった。
見ていると言われ、俺は瞬き一つしなかったはずだ。

しかしいつの間にか事は終わっていた。

師匠が元いた場所から消えたと理解したときには、師匠はナールの後ろに立っており、そのナールは何の言葉を発する暇もなく、どこから大量の血を流していた。

そしてゆっくりと、音もなく崩れ落ちる。

だが、あまりの手際の速さに、初めて目の当たりにした殺しを龍也は意識できていなかった。

そして、改めてナールの死体に目を向け、

「……………」

やっと状況を理解する。

これが自分が今教わっているものと、わかっていたつもりだった龍也だが、やはり今まで遭遇する事のなかった出来事。

何も考える事が出来なかった。

顔をしかめ、言葉を発する事も出来ない龍也に師匠は言い放つ。
「リユー、固まっている暇は無いよ。このままだったら、君がこいつをナイフで殺したとされてしまう。今リユーは実力を隠しているのだろう？　こんなところでバレるのはまずい。だから、君の使える魔術でこれを燃やしてしまうんだ」

「……………」

「む？ わからない？ 君はこの暗殺者を、魔術で倒し、燃やした……という事にすればこのどの傷を隠せ、君がナイフで殺したとされる事はなくなる」

「……あ、は、はい……！」

龍也は停止していた頭を必死で働かせ、ようやく状況を把握する。

今このナールの死体が発見されれば、襲われたのが誰か発覚する。そのとき死因がナイフによる傷とバレたら、俺がそれをやったとされてしまう。

それはまずい。

誰かに助けてもらったにしても、ナイフで人を殺せる人間なんて限られている。

偶然近くを通った暗殺者に助けてもらったなんて言い訳が通用するはずも無い。

だったら、俺が魔術で殺したといったほうが筋が通る。

何せ噂のせいで、俺が魔術を使えるのはこの城中誰でも知っているのだ。

龍也は改めて死体に目をむけ、死体の大きさを確認し、

「……ヤルガホキハメノツンニオクイミヨセヲエワ……」

覚えていた、目で確認した範囲のものを燃やす事の出来る魔術を放つ。

——この魔術は範囲が大きければ大きいほど使う魔力が大きくなるので、あまり大きなものには使うことが出来ない。

死体が轟々と燃える中、師匠が静かに告げる。

「先ほどの私を見て、そしていずれ自分も同じ事をするかもしれないと考えたとき、リユーがそれをつらいと思うなら、ここから先の修行はお勧めしないが」

しかし龍也は師匠を見定めて言い放つ。

「大丈夫です。最初はどうかあれ、これは俺が選んだ道です。続けま
すよ」

「……………そうか」

少し時間が経ち、多少落ち着いた龍也。

さてと、この後どうするか……………って、まだ魔族生きてるや。

「……………あれ？ 魔族、数は一体まで減りましたが、何かその一体は、気配がかなり強くなっているような……………」

「ああ、あの獣型魔族たちは暗殺のための陽動として用意されたらしいが、その中の一体に共食いする事で強くなる種族が混ざっていたらしくてな。そいつが他のやつを全部食ったらしい」

「……………で、その一体が圧倒的に強くなつてると」

「そうなる」

「……………俺行っても役に立つかわかんない」

ここまで言ったとき、見知った気配が近づいてくるのがわかった。

「む、ブーゼ・ゲニーか。なら私がここにいるのはまずいな。もう行くよ」

「あ、はい師匠。……さっきは助かりました。ありがとうございます」

「ふふつ、弟子を助けるのは当たり前さ。……でも、わかってるよね？」

「……………はい」

わかってる……………次は、次こそは俺一人だけでも……………！

言い終わると同時に目の前から師匠は消え、当然のように気配も消えていた。

「ほう。貴様もしっかり倒せたようだな」
「……も？」

突然現れたゲニーに龍也は疑問に思ったことをすぐに口にする。

当のゲニーは大して気にした様子を見せず、

「ああ、私のところにも暗殺者が来てな。まあ、私を暗殺に来たにしては弱かったが。その後、天才たる私はすぐに情報を得るため、捕まえて拷問にかけた。意外としぶとかったが、やっとな誰に依頼されたかと誰を狙ったかを吐いてくれたよ。今その話が本当か確認をしているところだろう」

と、物騒な事を織り交ぜて言った。

「拷問……」

「当たり前だ、捕まえたなら聞く事を聞かなければな」

「……まあ、当たり前、か。」

「で、それが終わったからこっちも見に来たと」

「ああ、貴様に死なれては困るのでな、適当に助けてやるつもりだったのだが……ふむ、その必要も無いようだ」

ゲニーは黒焦げになった死体に目を向けながら言う。

「……ああ」

——俺がやったわけじゃないが……。

龍也は複雑な心境を抱えたままうなずく。

それにしても、俺のここには通り名まである強めの暗殺者来たんだけど……。

なんでゲニーのほうは弱い奴なんだ……。

「それで？　いつまでここに居るつもりだ？」

「……は？」

何の前置きもなく意味のわからない事を言うゲニーに疑問符を浮かべる龍也。

「獣型はまだ生きてる。さっさと倒して来い」

「……俺が行って役に立つか？」

「剣より魔術のほうが威力はあるからな」

「まあ……そうか」

だったらお前がいけよと龍也は言おうとしたが、

「私は暗殺者の件とその黒幕の事を王に伝えてくる。貴様はさっさと倒しにいけ」

「……はいはい」

その前にゲニーに先を越され、渋々走り出す。

先ほどまでの戦闘で疲れた体を引きずり、龍也は魔族の元に向かう。

二十五話（後書き）

師匠がすごいって風にしかったんですけど……出来てましたか？

ちなみにゲニーも天才を自称するだけです。

ゲニーの所に行った暗殺者もそれなりの強さでした。結構な拷問で吐かせたようで。

二十六話（前書き）

と言うことで、獣型の魔族さんと対峙します。

二十六話

「これが魔族……でかすぎね……？」

魔族の気配がある場所に到着すると、龍也の身長の三倍はある化け物がそこにいた。

獣型と呼ばれるだけあって、牙や爪がすごい事になってる。

龍也が呆気にとられていると、獣型はその巨体に似合わぬスピードで動き、周りを取り囲んでいた騎士たちを吹き飛ばした。

「がはっ！！」

「うわっ！！」

「つくっそ……！ 化け物が！」

一応吹き飛ばされただけで、さほど大きな怪我はしていないようだ。

周りを見る限り、他にも怪我をしている人間は見えない。

「落ち着け！！ 隊列を乱すな！！」

『はっ……！！』

先陣を切りながらもリッターさんは部下に指示を出している。

とりあえずリッターさんと合流しようとする龍也よりも早く、獣型が行動を起こした。

一度距離をとったと思えば、何かを溜め込むように動きを止めたのだ。

その行動にいち早く気づいたのはやはりと言うべきか、騎士団長

のリッターさんだった。

「っ！！ 全員下がれ！！ 魔力の放出だ！！！」

魔力の放出。確かレイさんが魔族の説明のときに言っていた魔族しか使えない技。

その言葉通りなら、魔力そのものを相手にぶつけるといったものだ。

リッターさんの今の焦りようからもその威力の大きさは絶大なのだろう。

レイさんも一撃当たれば死に至る事もあると言っていたし。

リッターさんのすばやい判断により、ほとんどの騎士たちが物陰に身を隠す事が出来たが、一人逃げ遅れたものがいた。

マハト・ガイラではないが、前に龍也を襲撃してきた騎士の一人だ。

「ちよっ！！！」

龍也は反射的にその騎士の前に飛び出した。

「！！ リューヤ様！！ っ待て！！！」

リッターはこのときようやく龍也の存在に気づき、引きとめようと声を出したが、すでに龍也は獣型と騎士の間に割り込んでいた。

「なっ！！ お前は！！！」

騎士が何かを言おうとしたが、それより早く魔力の放出が始まってしまった。

ゴオオオオオッ！！！！！！

迫り来る圧力に驚きながらも、龍也は怯まず、風の防御魔術を放った。

「マワカモレゼヲヨ！」

ズンツ！！！！！！！！！

魔術で作り出した風の壁を、何かが圧迫してくるのがわかる。

「痛っ！ 威力、半端ね……！」

あまりの威力に若干押し切られそうになったが、龍也も負けじと魔力を込める。

——バアンツ！！！！！！

放たれた魔力を魔術で押しのけ、何とか無傷でその場を切り抜ける。

が、

「……あ、やべ。魔力切れた」

午前中に行なっていた魔術訓練と先ほどのナールとの戦闘、そして今の魔術で龍也の魔力は全て尽きてしまった。

しかしそんな事を待っていてくれる相手ではない。

獣型は自分の魔力砲（今、命名）を防がれた事で、かなり苛立っている様子だった。

今にも襲い掛かってきそうな勢いだ。

「ガアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

——やべー……怒ってるっばい。

そして獣型は一直線にこちらに走ってきた。

「！こっちだ、歩けるか！？」

そういつて倒れている龍也に肩を貸してくれたのは、先ほど助けた騎士だった。

「あ、大丈夫です……。歩け、ます」

ふらふらと、歩き始めようとする龍也を有無も言わず、騎士が支える。

「無理をするな！ 急ぐぞ。一旦戦線を離脱しよう」

「は、はあ」

リッターさんの指示で、騎士たちが龍也を守るような陣形を取り、何とか獣型の襲撃を受けずに安全な場所まで移動できた。

一旦壁に身を預け休む龍也に、ここまで運んだ騎士が尋ねる。

「……なぜ、助けた。俺はお前を化け物と言い、あまつさえ殺そうとした男だぞ」

「いや、それは今関係ないでしょ……。それに、実際あん時は騎士さん、怒られたでしょ？ 王様とかリッターさんとかに」

「……そんな小さな罰を俺が受けたから、お前は俺を許すと言うのか……？ そんな事でお前は俺が許せるのか。実際俺たちは謹慎だけで、それ以外のたいした罰は受けていないんだぞ！？」

龍也の言葉に徐々に声を荒らげ始める騎士。

しかし龍也は気にせず言っただけだ。

「怒られた事以外で罰があるとしたら、今の状況、かな？ 今、騎士さんは自分の罪に対する罰の小ささに苛立っている。もっと大きな罰を受けるべきじゃないかと自分を責めている。……その自分に

与えてる罰で、チャラって事で」

「っ！……………っ」

騎士は目を見開き、絶句した。

「？あの」

言葉を発しない騎士を不思議に思い声をかけようとする龍也に騎士が、

「俺の名はルグレ・スクード。…………これが終わったら、改めて謝罪をさせてくれ」

と、申し訳なさそうに呟いた。

「ちよっ！」

龍也は若干死亡フラグを匂わせる台詞を使ったスクードさんを止めようとするが、思うように体が動かなかった。

恐らく今まで蓄積されたダメージのせいだろう。

そうこうしている間にスクードさんは獣型のいる方へ走り出してしまった。

「今のはまずいだろ……。俺も行った方がよさそうだ」

「りゅーやん！……！」

追いかけてようと、体に鞭打つ龍也の元にセルフが駆けつける。

「すまん！遅くなった！！途中、客としてきていた貴族に捕ま
ってなあ、時間くった！！死ねあのクソ貴族！で！？りゅー
やん無事か！？」

「ああ、見ての通り無傷……だけど魔力使いすぎて、思うように動けん。行かなきゃまずいつてのに」

スクードさんだけじゃなく、恐らくあそこにいる誰にもあの獣型は倒せるように思えなかった。

「魔力……か。……オレにまかせろい！！……ただし、絶対誰にも言っなよう！」

そう言ってセルフはウィンクをした。

——いや、ウィンク出来てねーよ。

二十六話（後書き）

龍也君は基本的にはいい子なので、助ける事が出来るなら助けます。

二十七話 (前書き)

スクードさん視点です。

二十七話

俺は間違っていた。

スクードは後悔で頭がいっぱいだった。

——俺は何故あんな事をしてしまったのだ……！

あの男は化け物なんかじゃない。

ただの人だ。

優しくも強い、ただの人だった。

俺は償う。

この戦いであいつを守る事で、自らの罪を。

「おおおおおおおつ！！！！！」

スクードは自らの剣に更なる力を込め、獣型に向かって突き進む。

獣型に剣を突きたてるも、毛が固いのか体が固いのか、すぐに刃が弾かれてしまった。

「くっ！」

それでもなお、攻め込もうとする俺を団長が止めに入る。

「落ち着けスクード！ 士気を高めるのはいいが、先走るな。この獣型の魔族はお前一人でどうこうなる相手じゃない」

「……はっ！」

「………どうした？ 何かあったのか？」

戦闘中にもかかわらず、俺の変化に気づいた団長はその場で真意を確かめてきた。

「いえ、俺を助けてくれたあの男と話し、自分がどれだけ愚かだったかを知っただけです。今より俺はあいつを守る剣であり、盾です」

「……ふっ、そうか。自分の道を見つけるのはいい事だ。だが、死ぬなよ？ 自分もまだリユーヤ様の人となりをつかっていた訳ではないが、お前を助けにあの場に割り込むぐらいだ。お前が死ぬのは良しとしないだろう」

「もちろんです。この戦いの後、正式に謝罪するつもりなので」

そこまで言ったところで、獣型がこちらに走り出してきた。

俺は咄嗟に後ろに下がるが、団長は動かなかった。

「団長……！」

「ふん、死なないつもりならいい、さ！」

そう、話しながら団長は迫り来る獣型の腕に向けて剣を振るった。

「なっ！？」

その剣も獣型に弾かれるのを想像していた俺の予想を裏切って、団長は獣型の腕を切り落とした。

「ガアッ！？ ガアアアッ！！！！！！」

この戦いで一度も傷つく事のなかった獣型は驚き戸惑う。

「はあああああっ！！！！」

さらに団長は追い討ちをかけ、獣型の足をも切り落とす。

獣型は転がるように団長から離れていった。

「すごい……どうして……？」

「コツがいるのさ。人を斬るときは人の、魔族を斬るときには魔族の、な。」

そう笑いながら言う団長に改めて凄さを感じた。

噂に名高い、若き騎士団長アトカース・リッター。

これが王に剣の腕を見初められ、実力だけではこの地位まで上り詰めた男。

「……元々自分は今回、指示以外で手を出すつもりはなかったのだがな」

「え……？」

団長の言葉の真意がわからずにいると、団長は厳しい目つきで獣型を見つめていた。

そして団長は続けるように言った。

「この城の騎士たちはほとんどの者が魔族と出会った事が無い。そこに今回のこれだ。最初に現れた数体は、ちょうどいいお前たちの訓練になるかと思ったんだが……一体、厄介なのがいたせいで手を出さないわけにはいかなかった」

「……………」

あまりの衝撃に絶句してしまった。

この方は今日の大事件を利用しようとされたのだ。

「まあ、後は時間をかけて追い詰めればお前たちでも倒せると思うが……」

そこまで団長が言ったところで、後ろから影が走りぬけた。

「ん？」「え？」

団長も俺も状況を把握しきれていなかった。

横を通り抜け、今自分たちに前に立っているのは、先ほど魔力の放出を防ぎ、戦線を離脱したはずの男だったからだ。

先に状況を理解したのは団長だった。

「リユーヤ様！！何を「大丈夫です」！！」

確かにさっきに比べ、大きな魔力を感じる。

「獣型の近くにいる騎士さんたちを離れさせてください」

「……総員退避！！！」

団長があいつの指示に従い、周りの騎士を下がらせる

その言葉を聞き全員がその場を離れた。

そしてあいつは集中しだし、静かに何かを読み上げる。

俺を含め、そこにいる全員が固唾を飲んでそれを見つめる。

二十七話 (後書き)

龍也君復活、
です。

二十八話

「魔力……か。……オレにまかせろい！！……ただし、絶対誰にも言っなよう！」

そう言ったセルフは自分のナイフを取り出し、おもむろに自分の手を切りつけた。

「なっ！ お前何を！」

「ほれ」

龍也の質問をまるで無視して、切りつけ血の出ている手を差し出してくるセルフ。

「だから何なんだよ！」

「……オレの魔陣には血が使われてるつつつたる？ あれ、何でだと思う？」

「知らん！！ さっさと止血しろ！」

「それはな、オレの血が特殊だからさ」

龍也の話を聞こうとせず、セルフは淡々と話を続ける。

「オレの血には高濃度の魔力が混ざっている。これは普通の人間ではありえないことだ。そのせいで昔から苦労してきたんだが……今はまあいい。で、俺が魔陣に血を使うのは、血に含まれる大量の魔力で魔陣の力を上乘せしてるって訳」

「……それは今、何の関係があんだよ？」

突然始まった身の上話に若干戸惑いながらも、龍也は尋ねる。

「決まってるだろ？ オレの血は高濃度の魔力が混ざってる。だからお前がこの血を飲めば、魔力は回復するはずだ」

「……！ 苦労したってお前」

「かーっ！ 頭の回転速いねえ！ まったく！ ……その通りだ。まあ、今はそれはいいって。さっさと飲みゃ！」

明るく振舞うセルフに、

「セルフ……ありがとうな。わざわざその秘密を俺に話したって事はそんだけ俺を信用してくれたって事だろ？」

はつきりと礼を言う龍也。

「……………照れるねえ。ま、大事なご主人様のためって事でおちゃらけてはいるが、若干本気で照れているようだ。」

龍也は血を飲みながら話す。

「俺も後で話すことがある。そんなに秘密って訳でもないが、大事な従者だからな」

にやりと笑い、からかい返す龍也。

「……りゅーちゃんにはかなわんよ」

それを聞いて苦笑いのセルフ。

セルフの血を飲んだ後、体に湧き上がる魔力を感じて思わず、声が漏れる。

「すげーな……」

「早く行けっつの」

「おう！」

龍也が駆けつけると、獣型の腕と足が一本ずつ切られていた。

あれ……なんかもう倒せそう……。

龍也の頭は情けなさで恥ずかしさでいっぱいになる。

——初めての戦いぐらい自力で勝つ気でいたのに……結局ナールのは負けて師匠に助けてもらい、魔族との初戦闘も防御だけで力尽きる。しかも自分以外には倒せないとうぬぼれ、回復して戻ってきてもみたらもうほとんど終わってた……俺まったくいらぬ。

と落ち込む龍也であつた。

しかし、このまま何もしないのは、さすがにセルフに申し訳ない。

「（せつかく戻ってきたんだ！ 暴れてやらあ！！）」
と、龍也は半ば憂さ晴らしの八つ当たりで、魔術を放つことにした。

ゆっくりと魔術射程範囲まで足を進める。

話しかけてきたリッターさんに周りを下がらせ、集中を始める。

読み上げるのは、ヤマノ・カズヤが作った魔本の中にある、風属性最大の魔術。

「ヲユトオゼリタウウナイヨカイチヨレナウゼキホワカルズトヨ」

る。

「——っ！！——っ！？」

あまりの驚きに声も出ない龍也を氣遣って、リッターがその場をまとめる。

「お前たちっ！！ 何をしている！！ 今は他にやる事があるだろっ！！ まず是他にも魔族がまぎれて無いかの安全確認。その後、国王様への報告と城内にいる人々に伝令を！！」

『は、はっ！』

命令に応えながらも、獣型魔族を一撃で倒した龍也と話したそうにする騎士たちに、スクードが続けて言う。

「彼は今、魔族を倒したばかりでお疲れだ。休んでいただくのが先だろう」

そして有無も言わずスクードは龍也を医者のある場所に連れて行く事に。

若干引きずられながら龍也は運ばれていく。

「あれ、オレは忘れられたのかな？」

獣型魔族討伐に裏で一役買ったセルフは、手から血を流しながら

眩
いた。
た。

二十八話（後書き）

龍也君八つ当たりー。

はたしてこれが吉と出るか凶と出るか。

二十九話

魔力を使いすぎたと言うことで、現在自分の部屋で横になり、休養を取ってます。

「……………」

部屋の中には俺以外に、一時間ぐらい前に入って来たスクードさんが座ってます。

ちなみにここに来てからスクードさんは一度も言葉を発してません。

だんだん空気が重くなってきました。

何なんだろうか……。

するとそんな空気を吹っ飛ばすかのように、ドアが開いた。

「やつふうーい！！ りゅーやん！！ 体の調子はどうだい？」

「セルフか。調子はまあまあだ。何か用か？」

「ああ！ オレに話すことがあるつつつてたから聞きに来たぜい」
「なるほど」

その言葉を聞き、龍也が立ち上がろうとすると、

「……まだ横になっている。お前も従者なら主人の体調に合わせろ」
スクードがそれを収めた。

「んんー！？ 誰だいお前さん？ てか、龍也がそれでいいってんならいいだろうて。それに良くわかんないけどお前さんもりゅーやんに用事があるんじゃないのかい？」

「それは……」

「そう、入ってきてからずっと黙ってるけど、何か用か？」

この機を逃すなとばかりに龍也はスクードに質問をする。

「……言っただろう。あれが終わったら正式に謝罪すると」

「ああ。それで」

「……ヒノ・リユーヤ……様。以前の数々の無礼お許しください」
「いいよ」

「今後一層反省し……は？ 今なんと？」

「だから、いいよって」

ポカンとした様子でスクードは龍也を見る。

「……簡単に許しすぎでは？」

「別に何もされてねーし」

襲撃の際、結局龍也が無傷で切り抜けた事を思い出し、複雑そうな表情をするスクード。

「んじゃ、その話は終わりって事だな？ で？ りゅーやんの話は？」

そんな中、一刻も早く話を聞きたいと言った様子のセルフが口を挟む。

「……では、俺はこれで失礼す「ああ、ついでだからスクードさんも聞いてけば？」……は？」

空気の読めない馬鹿^{セルフ}の発言に厳しい目を向けながら、部屋を出ようとするスクードを龍也が呼び止める。

「りゅーやん、いいのか？」

「ああ、どうせそのうちバレることだし、スクードさんに先に話したって問題ないべ」

「……………呼び捨てでいい」

話を聞いていたスクードが龍也に対して言う。

そしてゆっくりと腰を下ろす。

どうやら聞く気があるらしい。

「あそ、じゃ俺も呼び捨てで」

「ああ」

「で、話つてのは別に大した事じゃないんだけど、俺はゲニーの実験のせいでこの世界に召喚された異世界の住人なんだ」

「へー……………」

何の気なしに伝えた内容で、二人はまったく違う反応を見せた。

ちなみに最初の軽いほうはセルフで、後のかなり驚いてる声を出したのがスクードだ。

「ああ、そういうえばゲニー氏とりゅーやんの関係は加害者と被害者って言うってたな。あれってそういう意味か」

「まあなー。それで魔術を使えるのは、魔術に使う魔文字って呼ばれるのは向こうの世界の文字だから、俺が簡単に読めるのが理由」

「そっかー」

と、セルフと和やかに話していると、

「何故そんな軽いノリで話してるのだ！！！？」

今まで言葉を発しなかったスクードが動揺しながら叫びだした。

「異世界からの来訪者など、かつてのヤマノ・カズヤ様以来の出来事！ しかもそれはブーゼ・ゲニー様によるものだと言うのか！ それは大事件ではないのか！？ 魔術を使えるのはブーゼ様に習ったものだとばかり……！」

「いや、そんな事件ってほどじゃないだろ」

「そうだぜえ、オレなんかりゅーやんなら何でもありのような気もするぜ？」

「なんだそれ、俺はそんなに異常じゃない。割と普通の部類だ」

「いやいや、りゅーやん本質は大分、異常よりだと思っ」

「はっ！ 俺で異常なら樹を前にしたら腰抜かすぞ」

龍也が鼻で笑いながら言う。

「イツキ？」

「俺の幼なじみで前に話した天才」

「ああ、何か必死に追いつこうしたとか言ってたような……」

「話を続けても！？」

「どうぞ」

スクードがキレ気味だったので、脱線していた話を元に戻す。

「とにかく、それは大事だ！ 国王様はそれを！？」

「知ってるよ。てか隠すよう言ったのは王様だし。なんかすぐに話したら騒ぎになるからって」

そしてそれを聞いたセルフはスクードを眺めて、
「なるほど」

と納得しながら言った。

それに龍也も同意する。

「最初は大げさに言ってるんだろうな程度に考えてたけど、今納得

した」

「……………」

「？ スクード？」

黙り込んでしまったスクードに龍也が声をかけると、

「なら異世界から来た事を発表するなら今だな」

「……………は？」

突然とんでもない事を言い出した。

セルフもポカンとしている。

「今回、獣型魔族を討伐した事で、リユーヤに褒賞が与えられる事は決定している」

「…………いや、何で褒賞？ 俺ただとどめ刺しただけじゃん。実際の時も俺いらなかったじゃん」

「いや、我らだけで普通に戦っていたらまだまだ時間はかかっていただろうし、怪我人も増えたかもしれない。それに獣型にあそこまでの傷を負わせたのは団長だ。我らは何も出来なかった」

「だったらリッターさんだけでいいじゃん！」

正直厄介な事になりそうなので、褒賞なんかいらないのだが。

「団長ももちろん受け取る。だが、それ以上にあの魔術にはインパクトがあった。リユーヤにも褒賞が無いとおかしいだろう」

——しまった…………憂さ晴らしにでかい魔術を使ったのは失敗だった…………！

自業自得な展開に頭を抱える龍也。

「リユーヤが褒賞を受け取るとき、その場で異世界の事を発表すれば、間違いなくこの城の人間は受け入れてくれるだろう」

「ちょ、何言って……」

「すぐさま止めに入る龍也。」

しかしスクードは聞いてないのか聞こえてないのか、一人で話を進めてしまう。

「うむ、そうと決まれば国王様に進言しなければ！」
そういつて立ち上がるスクード。

「……ちよつと待てえー……！！ それは面倒事のフラグー！！
！……」

——結局待つてくれずに行ってしまったスクード。
「……………いろいろ失敗した……………」

今後の嫌な予感を察し、落ち込む龍也の肩を、セルフは無言で軽く叩いた。

二十九話（後書き）

凶と出ましたー。

てか、吉と出る確率は龍也君の場合低すぎる……。

でもま、今回は自業自得の不幸展開でした。

感想、ご指摘お待ちしております！

三十話（前書き）

今回！ 暗殺事件の黒幕が！！

わかりきってるんですけどね。

『おおー！ー！ー！ー！ー！ー！』
ずいぶんノリいいな。

「まずはその剣の腕で、獣型魔族を追い詰めた者、アトカース・リッター！ー！！ 前へ！ー！」

「はっ！ー！」

まずはリッターさんが呼ばれた。

とりあえずリッターさんを手本にしようと思う。

…… ほんと褒賞とかいらなんだけど、ここまで来て断ったら逆に大変な事になりそうなので大人しく貰っておく事にした。

なれた様子で褒賞を受け取るリッターさん。

まあ、当然といえば当然である。

リッターさんは何かを受け取り、ゆっくりと戻ってきた。

と言うことは、

「そして！ その強大な魔術で獣型魔族を見事撃退した者、ヒノ・リューヤ！ー！！ 前へ！ー！」

「はい」

…… 昔から大きな声で返事とか苦手です。

言われるがまま王様の前まで行こうと歩き出したとき、騎士の中から声が響いた。

「お待ちください！ー！！」

声のした方を見ると、そこにいたのは俺に殺気をぶつけまくってるマハト・ガイラだった。

——またお前かあ……。

俺がうんざりしていると、王様がそっちに声をかけた。

「マハト・ガイラ。なんだ」

「はっ！ 私はその者に榮譽を与えるのは反対でございます」

「理由を言ってみよ」

「その者が危険だからです！ 黒い目に黒髪とこの国ではありえない色を持ち、使えるもののほとんどいない魔術をも有する。その者を迂闊に信用するべきではございません！ もしかしたら魔族と通じており、今回の件で魔族を呼び寄せた可能性すら考えるべきです！！」

「……………」

……………えええええ！？ 何その勝手な言い分！！ 酷くない！
？ なんか周りがザワザワしちやってるよ！！

「私は即刻この者を牢屋に入れるべき……いや、この場で処刑すべきだと考えます！！」

「……………」

ひいー！ また酷い事を！ 王様つてば黙ってないで助けてー！

そんな事を考えていると、その願いが通じたのか、国王が口を開いた。

「……マハト・ガイラ。言いたい事はそれだけか？」

「はっ……………」

「貴様はなにもバレていないと、自分の立てた作戦が一回失敗しただけだと考えて無いか？」

「国王様……？なにを」

助けてくれたのはいいけど……何か王様の顔がどんどんキレ顔に……ちよつと怖いんだけど。

「黙れ！！マハト・ガイラ！！貴様が今回ブーゼ・ゲニー、そしてヒノ・リユーヤの暗殺を指示した事は調べがついているんだ！！そして暗殺から目をそらすために獣型魔族をこの城に放つように指示したのもな！！！」

『なっ……！！』

俺を含めこの部屋にいるほとんどの人が驚いている。
いろんな人が騒ぎ出したけど、王様が一睨みしたらすぐに黙った。
——王様すげー。

そして俺は驚きとともに納得もしていた。

あの時何か嫌な予感がしたのはこの事だったのかと。

そして暗殺者が——ナールが俺が魔術を使えるのを知っていた事の説明にもなった。

「そんなっ！国王様！何故私がそのような」

「黙れといっただろう！！貴様の計画はゲニーのところに行った暗殺者が全て吐いたわ！！それは城内の征眼術師により、嘘偽り無い事が確認されている！！」

「っ……！！……」

ああ、征眼術には嘘つくと目の色が変わって見える技もあるって言うってたな、師匠。

てか、征眼術師なんてのもいるんだ……。

と、関係ない事を考えている龍也をよそに、話しは続く。

「国王様！！……わかりました……いや、わかってました！ あなたはブーゼ・ゲニーによって洗脳されているのです！ だからこんな得体の知れないブーゼ・ゲニーの作った化け物を擁護しようとするのです！！」

すごいな、そんな事まで想像してたのか。もはや妄想だ。

「馬鹿な……ゲニーは魔陣師で魔術師でもあるが、征眼術師ではない……仮にそうだったとしても、私は王として訓練を重ねている。実力のある征眼術師であつてもこの私を操る事など出来ん！」

これには王様の側近っぽい人とか、貴族っぽい人とか、大臣っぽい人とかも頷いていた。
一部の人にいたってはマハト・ガイラに向かって、呆れ顔の人もいる。

当たり前だ。

この強そうな王様がそんなに簡単に操れるなら、操った奴は世界征服できる。

……でもゲームとかではよく操られてるんだよねー、王様とかつて……。

そして怒りのままに王様は、

「貴様はもう国外追放などではすまされん！ 然るべき処置の後、処刑だ！！」

と、言いました……って、ちよっ！

「王様！？ 別に追放……とかでいいんじゃないですか！？」

この空気の中で発言してしまったので、かなりの注目を受けてしまったが、仕方ない。

「……リユーヤ殿。あなたのお優しい気持ちはわかるが、そういう訳にはいかない」

「何ですか？」

「仮に暗殺者を使い、あなただけを狙ったとする。その場合でも私は処刑を言い渡すと思うが、リユーヤ殿が止めるよう言うならそうする事も出来るだろう」

「なら……！」

「しかし今回はリユーヤ殿だけじゃない。この国の貴重な戦力であるゲニーをも狙い、さらには魔族を放ち城を混乱に陥れた。これは国を滅ぼしかねないものだ。生やさしい罰で済まされる事ではない」
「！……………」

その通りだ。

これはもう俺一人じゃなく、国の問題。

俺が口を挟むことじゃないんだ。

龍也が黙っていると、渦中のガイラが口を開いた。

「ふん！ 偽善を見せつけ自分の信用を得ようとしても考えているのだろうな！ 狡猾な化け物が！」

守るような言葉を発した龍也をさらに陥れようとするガイラに、さすがの龍也も呆れながら言葉を発しようとしたが、それは国王によって遮られた。

「いい加減にしろ……！！ 貴様を守ろうとしたリユーヤ殿にまたもそんな口を利くなど……！！」

と、殺気を放ちながら王様が叫ぶ。

……顔、怖い。てか王様、師匠レベルの殺気出してるんですけど……。

その殺気のまま国王は続ける。

「いいか、マハト・ガイラ！！ よく聞け！！ 貴様が化け物と罵るリユーヤ殿は…… 異世界からの来訪者だ！！！！ ゲニーがそれを見つけ、混乱を避けるために今まで隠していた！」

「なっ……！」

その言葉を聞き、ガイラは信じられないといった顔で、立ち尽くしていた。

「貴様は異世界の住人を侮辱し、それどころか殺そうとまでした。この時点ですでに重罪だ。大人しく罪を受け入れるんだな」

呆然としているガイラを他の騎士たちが引きずっていった。牢屋にでも入れておくのだろう。

周りが俺の事で驚愕しているとき、俺は別な事を考えていた。

「（……ゲニーが練習で召喚した事はやっぱり伏せておくのか……納得できん）」

三十話（後書き）

と言うことで、判明しました！。

まあ、誰かわからないようにしてたわけじゃないんで……。

話的には、微妙に長くなりそうな気がしたので、二つに分けました。

個人的に言うと、話のメインは次になります。

三十一話（前書き）

続きですー。

三十一話

「さて……すまなかつたな、リユーヤ殿」

「あ、いえ大丈夫です」

ゲニーに対する不満を頭の中でぶちまけていると、王様が話しかけてきた。

先ほどまでの怒り狂った顔ではなく、ニッコリといった感じの笑顔だった。

……殺気に満ちたあの顔を見た後だから、この笑顔は逆に怖い。

その後無事に褒賞を頂き、これで終わりかと思っていると、

「さて、リユーヤ殿。もう一つ話し……というか相談があるのだが」

「……はあ……」

……あれ、なんか、嫌な、予感がするよ？

なんとなく周りに目を向けると、いつの間にかリッターさんも下がっていて、周りにはお偉いさんっぽい人たちしかいなかった。

その人たちは、俺が異世界から来た事に対して、まだざわついていた。

それも王様がすぐに収め、話を進めた。

「相談と言うのはだな……」

「はい……」

「……二カ月後に召喚される勇者と共に魔王を倒してほしいのだ！」

「……………」
「その為の援助ならこの城が……いや、この国が全力で行おう！！
もちろん勇者と共に行くならば、必ずや他の国も協力してくれる
！……」

『おおおおおおおおおつ！！！！！！！！』

——はい、やっぱりー。嫌な予感的中。

まったく……おー！　じゃないよ……。

俺の目的は元の世界に帰ることだから、面倒な事は断りたいだけ
ど……何か、ものすごい期待と希望の目を向けられている。

……なんか、雰囲気的に断れそうにない。

しかも少し前の王様のさつきを見せられた後でもある。
何か断ったら殺されそう。

——いや、実際そんな事はされないとは思うけど……怖い、よね
！。

もう、受けるしかないんだろうな……。

その時、ふと龍也の視界にゲニーの姿が映った。

こちらを見て、ニヤリと笑うゲニーの姿が。

——ん？ 何だ、その顔。

あれ？ そういえば、今考えるとおかしいな。
何であいつ俺を助けに来た？

師匠は弟子を助けるのは当たり前、みたいな事言ってたけど。

ゲニーはそんな奴じゃないだろう。

それに何で俺が死ぬと困るんだ？

別に俺が死んでもあいつにとっては関係無いはずだ。

利用するつもりだったとしても、所詮は練習台。本命は勇者だ。

そもそも、俺が行かなくても獣型は倒せそうだった。

つまり、騎士たちだけでも……少なくともリッターさんがいれば
倒せる相手だったってこと。

それをゲニーが知らないわけ無い。

.....あ。

——は、嵌められたあああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ゲニーは初めからこの展開になるよう仕組んでたんだ！

もしかしたら、マハト・ガイラの計画もある程度知ってたのかも
しれん！

いや、そうに違いない！

それを放っておいて、最終的に俺が魔術で敵を倒して、褒賞を貰
う。そこで俺が異世界から来たって事を発表して、魔王討伐を頼め
ば断れなくなると踏んで……！

そうだ、そもそも俺が殺されたら困るからって助けに来たくせに、
その後ボロボロの俺を、危険なはずの魔族との戦いに向かわせたの
も、本当は騎士だけで倒せる魔族をしつこく俺に倒させようとした
のも、今考えると明らかにおかしい！

だったら王様が殺気を振りまいたのも、俺を脅す作戦か。

三十一話（後書き）

こういう感じに落ち着きました。
残念ながら未だゲニーの思惑通り。
そのうち何とかしたいですね。

感想、ご指摘等ございましたら、お願いします。

三十二話（前書き）

説明ターンです！

少しでも設定詰めてみたんですけど、わかりづらいです……。

三十二話

えー、ゲニーに嵌められたと気づいたあの屈辱の日から、数日。

マハト・ガイラの件はすぐに片がついた。

どうやら奴の家は、マハト家と言う高位の、しかも代々良い騎士を出す名家だったらしいなので、俺はなんとなく処刑に対し、何らかの抗議が入ると思っていたが、その予想に反し、マハト家は「すでにガイラは勘当した。マハト家の名は、ガイラが勝手に名乗っていた」と切って捨てたらしい。

王様が言うには、ガイラの罪によって自分の家に迷惑がかかるのを恐れたらしい。

それほどまでに奴の——ガイラの罪が明白で大きいものだというのが良くわかる。

今は、とりあえず投獄され、ある程度事情を聞いた後、処刑されるそうだ。

……あまり、いい気分の話では無いな。

俺のほうは、あれからというものの、今まで絶対に近寄ってこなかった、見た目お偉いさんっぽい雰囲気がある人たちが代わる代わる俺に会いにきた。

それと噂も相まって、俺に対し、常に恐怖が付きまとっているように見えたメイドさんや使用人さんがいきなり好意を向けてくるようになり、殺意をぶつけてきた騎士さんたちに至っては、一度全員

で謝罪に来て以来、今や尊敬の眼差しさえ見て取れた。

うん、言いたい事はわかる。

それぐらい異世界って言葉には力があるんだね。

正直、今まではほとんど俺にいい事がなかったから、うれしいっちゃうれしい。

でも、なんか……この期待度は逆にづらい……………。

なんでそこまで態度を一変できるかな……………？

うう、過度のプレッシャーでお腹が痛くなってきた。

「リュ、リユーヤさん？ 大丈夫ですか？」

お腹を抱えてうずくまっていると、ちょうど勉強の時間で部屋を訪れたレイさんが心配そうに声をかけてきた。

「はい、大丈夫です。最近来客が多かったから疲れただけです」

「ああ……確かにリユーヤさんが異世界から来た事が発表されてから、ここに来る人の数はすごいですからね。…………お疲れなら、今日は止めにしますか？」

「いや、大丈夫。今日は誰も来てないし…………ってそういえば何でだ？」

そう言うとレイさんはキョトンとした顔をこちらに向け、

「あれ？ ご存じなかったですか？ 今日は大四国^{だいしこく}の国王様達が、集まってる話し合いがあるんです」

「大四国…………？ って…………？」

「はい。アインラント、ドイスバラド、トロワナシオン、アルバア
グオジャの四つの国です。今回は我が国での会議となっておりますので、
皆さん準備に追われているようです」

首脳会議、みたいなもんか……？

「ああ、この前言ってたこの国を含めて、魔の国、商の国、美の国、
武の国、だったか。あの時はザックリとした国の特徴しか教えても
らってなかったっけ？」

「そうですね。今日の勉強ではこの国の事をもう少し詳しく話しま
すね？ あ、それと他の国なんですけど、実は私もこの前話した事
ぐらいしか知らなくて……後はどんな人が王になるか、ぐらいで」

「わかった。てかそれで十分だよ。そのうち自分で調べるし」

「ありがとうございます。その優しさもリユーヤさんの人気の一つ
ですね？」

と、若干ずれた事を言ってくるレイさん。

「いやいや。人気じゃ無いよ、多分。今のうちは異世界って大きな
名前があるから騒がれてるだけで、そのうち収まると思うし。特に
勇者召喚が近づけば近づくほど」

「そう、ですかね……？ 私はそんなこと無いと思います。今日な
んか他のメイド達に、リユーヤさんの世話役を代わってほしいだと
か、世話役を交代制にしようとかいろいろ言われましたし」

「えっ………！」

……意外とずれてるという訳では無いようだ。

龍也はかなり驚いた。

異世界と言う存在がそこまで影響力があるとは思わなかったのと、せつかく大分仲良くなったレイさんが世話役じゃなくなるのは、さすがに嫌だったためだ。

そんな龍也の心情を察したのか、

「ふふつ、大丈夫ですよ？ リューヤさん専属メイドは私ですって断りましたから」

と、微笑みながら言ってきた。

「……………あ、ありがとう……………」

なんとなく照れくさくなって、若干妙な空気が漂いだしたが、

「さっ！ そろそろお勉強を開始しましょうか？」

レイさんがそれを打ち切った。

どうもいいようにならかわれている気がする。

そんな事を考えている龍也をよそに、話は進む。

「リューヤさん、文字は大体覚えたんですよね？」

「ああ、覚えて無い単語はまだまだあるけど、必要最低限は」

「じゃ、さっきの話に進みますね？ えっと、まず大四国と言われている、各国のあり方はやはり違います。この国、アインラントは、優秀な魔陣師の血族から次の王が選出され、選ばれた王は自らの手腕一つで国を動かしていく仕組みになっています」

「ああ、見ただけで優秀ってわかるよ、あの王様は」

「そうですね。今の国王様は特に優秀な方で、魔陣師としてだけではなく、かつてヤマノ・カズヤ様に魔文字も教わり、魔術も使える

そうです。それに格闘技も武の国の人間に引けをとらないとか」

「……………本格的に守られてる必要ないな。てか、もう王様が魔王倒しに行けばいいのに」

「あはは……………まあ、国王様がそう簡単に国を離れるわけも行かないですし」

「ま、そうか」

「それで、次にドイスバラドなんですが、あの国は商の国と呼ばれるだけあって、東西南北に地区が分かれ、それぞれで商いを競うあつています。そして五年間の各地区で売り上げた金額の平均額が最も高い地区のトップがそれから三年間、王として国をまわしていきます。トロワナシオンも似たような感じで、年に一回ある美人コンテストで一年間の王が決まるそうです。ちなみに毎年、くじでその年の王様が男性か女性か決まるらしいですが、今年は男性だったみたいですよ？　後はアルバグオジャ何ですが……………」

「いいよ、そこはわかる」

「え……………」

「アルバグオジャは最も強い奴が王様になるんだろ？」

「え？　ええ、大体、あつてます。元々アルバグオジャには年に二回、武術大会があるんですが、それとは別に、国王になりたいものを集めて、戦って勝ったものが王になるそうです……………なんでわかつたんですか？」

「いや、わかるでしょ。何かそれっぽいし。……………それより、この国以外は正直、誰かが王になっても、王としての仕事が出来なさそうなんだけど……………」

「いえ、意外とそうでもないのです。ドイスバラドは一年間、前国王が国政を手伝い、その一年の間に新しい王が仕事を覚えさせられて、その後二年間を任されるようです。トロワナシオンの国王は一年で代わる事が多いせいか、王はほとんど国政には関わりません。王として君臨するだけで、事実上、国を任されているのは政者せいしゃと呼ばれる方々です」

なんだ、意外と何とかなりそうに聞こえる。

「アルバアグオジャは？」

「あの国は……簡単に言うと、強さが正義で、強さが全てです。国でやっているのは犯罪者を叩きのめすだけです。犯罪以外は何をしようにも強ければそれでいいとされてます」

「は？ ……それって危なくない？」

「それも意外とそんな事も無いのです。国の唯一絶対の法律として戦わぬ者に手を出さないというものがありまして、つまり反撃をしなければ手を出したものが犯罪者です。国王軍に囲まれます」

「……つまり、弱い奴はただ逃げればいいと？ 逃げられない場合だつてあるだろうに」

「それはどの国でも同じですよ？ 要は逃げ切つて国王軍に助けを求める事が出来れば勝ち。捕まれば負けです。国王軍は強者しか集まりませんので」

「……まあ」

確かに逃げられない場合があるのは同じか。

むしろ逃げきれれば必ず助けがある方がいい。

「さて、ここまでで質問はありますか？」

「んー、商の国、美の国、武の国の王になることの利点と、今の大
四国の王様はどんな人なんだ？　って事かな」

「あ、そうですね。利点が無いとどの国も王様にはなりたがなさそ
うですよ」

それでも武の国は大体想像はつくけど。
強い者の象徴だからとかそんなん。

「でも私もそこまで詳しくないので、ザックリになりますけど、商
の国は王様を選出された地区にかなりの額の報奨金が出るとか。そ
の他にも何かあるようですけど、私にはわかりかねます。美の国は、
王といっても仕事の内容は無いに等しいので、要はきれいな姿を国
民に見せているだけで一年間、王様の暮らしを経験できるというわ
けです。後の武の国は簡単です。王様は強さの象徴であるからです」

……武の国合ってた……。

「後は今の王様でしたね？」

そう、それが本題。

どういう人間が王になるのかは理解した。

じゃあ今、この国に集まっている王たちはどんな人間なのか気にな
る。

「はい。この国の王様は説明の必要ありませんので、まずはドイツ
バラド。今の国王は、東の地区のトップだった人で、前国王でもあ
ります」

「つまり前の三年間も王様をやつて、その間も商業成績は落ちずに、
また王様になったと」

「はい。これはすごい事です。普通は報奨金が出るといっても、国
政に追われ、地区の成績を落としてしまうものなのに。今は前の経
験を活かし、さらに国政に商いを取り入れる事で、更なる発展を目
指しているようです」

「頭が切れるタイプってどこか」

レイの説明にボソリと感想を漏らす龍也。

その呟きはレイには聞こえなかったようで、説明は続く。

「トロワナシオンは、今年面白い事が大好きな人が王様になったみ
たいで、わざわざしないでいい仕事をしてみたい、いろんなイベン
トをやつて国民の人気は得ているようです。それと、コンテストに
一位になっただけあつて若くてかつこいらしいです。……けど、
王様よりも王妃様が目立っているようです。何か絶世の美女だと
噂されてます」

「ふーん、一度見てみたいもんだ」
何気なく龍也はそう口に出した。

「……そうですか」

すると何やらレイさんが不機嫌に……？

「……え？ 何か怒ってる……？」

「いいえ……？」

「……………！」
見事な笑顔だったのだが、目が笑っておらず、龍也は言葉をなくす。

「……コホンッ！　続けますよ？」

「は、はい！」

とりあえず怒りは抑えてもらえたようだが、なんとなく敬語になっってしまった龍也。

「でも噂では、その王妃様は結構やり手みたいですよ？　自ら政者に名乗りを上げて、今じゃ国をまとめ上げてるのは王妃様らしいです。……ちなみに今回は来てませんよ」

「ふーん」

何か「今回は来てませんよ」のあたりでかなり睨まれた様な気がしたけど……気のせいだね？

「そして現アルバアグオジャ国王は、かつて武術大会を三度も制覇し、年老いた今も国王の座を勝ち取るほどの実力者らしいです。何でも歴代最強だ何て言われてるようですよ？」

歴代最強ね……絶対会いたくないな。

てか、普通にアルバアグオジャ行きたくないな。

……………あ、しまった。行くフラグと王様に会うフラグが立った気がする。

俺の馬鹿……！

「リユーヤさん？　大丈夫ですか？」

頭を抱える龍也を不思議に思い、レイが声をかける。

その言葉に龍也は持ち直し、話を続けた。

「大丈夫です。それにしても、その人たちが今、この城に集まってるって事が……」

「ええ。……恐らく話し合う内容は」

「魔王について、か」

三十二話（後書き）

思いついた設定を詰め込んだだけですので、矛盾などたくさんあるかもしれません……。

もし何かありましたら、ご指摘お願いします！

三十三話 (前書き)

各国、王たちの話し合いの様子です。

三十三話

アインラント国、シュロス城の中にある応接の間。

そこに集まったのは、大四国と呼ばれる四つの大国の王達。

始まりの言葉は、集まる場所になった国である、アインラントの国王だ。

「まずは商の国、美の国、武の国、各国の王にお集まりいただき、感謝いたします」

その言葉を聞き、すぐに武の国王が口を挟む。

「堅苦しいのはよせ、魔国の。お前もそんな柄では無いだろうて」
その言葉に魔の国王も同意する。

「そうだな、では今から各自話しやすいように」

「では早速話を進めましょうか？」

商の国王が口を開く。

「何故お前が話を進める、商国の」

「いちいち話を遮らないでもらえますか？ 武国の王様。ヤマノ・カズヤの教えにあるでしょう？ 『時は金なり』ですよ」

「ふんっ！ あいつは強かったが、たまに訳のわからんことを言っただものだ。今のお前のようにな」

武の国王と商の国王が軽く言い合いを始めたが、

「止めませんか？ 争いは楽しくないですよ？ ボクはそのヤマノ・カズヤ、と言う方にはあったことはございませんが、たぶん

争いは望んでないと思いますー」
すぐに美の国王が止めに入る。

彼はこの中で一番若いが、この中にいても平然と自分を保てるだけの度胸だけはあった。

「……………そう、ですね。言い争いで時間を使うほどもったいないことは無い」「あいつは戦うことも好んでおったわ!」

ほぼ同時に言われたことに、美の国王は苦笑いをし、魔の国王は一度咳払いをして話を進める。

「確かに商国のが言うように無駄話をする場ではない。話を始めよう」

「ええ」「はいー」「ふんっ!」

「議題となるべきはやはり魔王のこと、だろうな」
顔を歪めながら魔国の王は言う。

だが、武の国王は納得のいかない表情を浮かべる。
「しかし、魔王か……………あんなのは子供だましの御伽噺だけだと思っ
てたが、本当に出たのか? 人型魔族と見間違えただけじゃないのか?」

商の国王はすぐに反応し、
「それならそれでいいんですよ、武国の王様。だけでもし本当に魔王ならば、洒落にならないんです。それこそ……………御伽噺のよう
に、ね。……………それに見間違いにしても、私の国での情報量が多すぎ
ますし」

美の国王が納得したように会話に参加した。

「ああー。あなたの国は、商いの国というだけあって、情報も高値で取引されているんですねー」

「ええ、ここ最近、魔王の目撃情報は頻繁に売りに出されている。

正直、異常なほどにね」

「だが、商国の。我が国で魔王をはっきり見たという奴は名乗り出てないぞ」

美国の王は驚き、疑問を投げかけた。

「武の王様ー？ それは本当のことですー？ 妻が言うには、ボクの国の冒険者が武の国で聞いたと言ってたらしいですー」

「美国の王様、武の国に情報という言葉は無いと思ってください。

恐らく武の国の人間はたとえ魔王を見たとしても、わざわざ誰かに言おうとは思わないでしょうし、話したとしてもそれは、仲間内の、しかも酒の席くらいでしか話さないでしょう……と、奥方にお伝えください」

美の国王は「はいー」と言って笑った。

今回は武の国王も口を挟まず、黙って聞いていた。
言われたことを事実と、とらえていたためである。

そこに話し合いを開始してから、今までほとんど言葉を発しなかった魔の国王が口を開いた。

「情報もそうだが、うちのゲニーが魔王の存在を察知したと聞いたならば間違いは無いのだろう」

その言葉に、商の国王、武の国王がそれぞれ反応を示した。

「なるほど、最高の魔陣師を名乗る彼ですか。彼も魔文字を学んだ

者ですよ？ 確かに彼がそう言うのなら、可能性は高いのでは
う」

「あの天才変人か。今回の魔王対策で、勇者召喚に魔陣を作るのも
奴だったな。それはいいが魔国の。お前は相変わらず使いにくい駒
を飼ってるな」

魔の国王は確かにと、心の中で呟き、苦笑いを漏らす。

その表情を見て、商国の王が人の悪い笑みを浮かべ、
「使いにくい、ですか……。確かにそのようですね？ ほんの少し
前に入ってきた情報なんですが、彼が何かやらかしたそうですね？
二カ月後に迫る勇者召喚の前に」
と目を細め、魔の国王を見つめる。

「……………どこで……………いや、どうやって手に入れた情報だ。その
ことを知るのはほんの一握りのはずなのだが？」
商の国王を睨みつける魔の国王。

「そう睨まないで下さい。情報源はいろいろあるということです。
おっと、こんな事で怒ったりしないてくださいよ？ どうせお互い
様でしょうし、何より今はそんな事で争うときではないでしょう？」

その言葉を受け、苦々しく顔を歪め、
「……………まあいい、だが……………やりすぎは国のためにはならんぞ」
殺気を込めながら話す。

「……………ええ、心得てますよ」
商の国王は静かに笑みを浮かべ、答えた。

「で？ 何のことが我らにはまったくわからんのだが、説明はもらえるんだろうな？」

「そーですねー？」

武の国王はイライラしながら、美の国王は笑いながら尋ねた。

「ええ、今の話はここにいる全員に伝えるべきだと思いますが？ 魔国の王様？ 争いの種を消すためにも」

商の国王もそれに便乗し、話すよう魔の国王に促した。

勇者召喚前に呼び出された、異世界からの来訪者の事を。

「……まあ、いずれわかることだ。……数週間前、うちのゲニーが勇者召喚の魔陣を練習用に試し、一人の異世界人が呼び出された」

「なんだとっ！……！」 「あらー」

武の国王は大きく驚き、美の国王は驚いているのかわからないような声を漏らした。

商の国王は笑みを作りながらそれを見ている。

「ゲニーの考えはともかく、異世界人の来訪は今回の魔王騒動に好都合だ。彼には二カ月後に召喚される勇者と共に魔王討伐に向かってもらうことは、了承済みだ」

「魔国の、わかっているんだろうな。奴がやったことはかなりの事だぞ。何の理由もなく異世界から呼び出したんだからな」

「……わかっている。だが、今はそんな事を言っているときでは無いだろう。もしも本当に魔王が現れたなら、戦力は多すぎて損はない」

武の国王は少しの間、押し黙り、改めて口を開いた。

「……ふん！ 何にせよ事が進むのは二カ月後、と言うことか」
「そういう事だ。まあ、その間に魔王が動きを見せなければな」

タイミングを見て、商の国王が話をまとめだした。

「話も終わったようですね。と言っても結論としては『二カ月後の勇者召喚を待つ』と、当初となんら変わらないものですが。美国の王様も、奥方にそうお伝えください」

「はいー。ボク、記憶力はいいもので、今日の話し合いの内容は一言一句間違うことなく、妻に報告します」

話し合いが終わるかと思ったが、魔の国王が思い出したかのように話題を切り出した。

「ああ、勇者召喚はすでに各国の民たちに伝えてあるんだったな。反応はどうだ？」

それに商の国王が答えた。

「盛り上がってますよ。入ってる情報では各国の民、皆共に勇者を待ち望んでいるようです。……ああ、武の国は少し違いました」
武の国王もその言葉に続けた。

「我が国は勇者がどれくらい強いかな戦いたい、と言っているようなやつらがほとんどだ」

「ふむ、つまり、それほどまでに魔王の話が出回っていると言うことか。……武国はともかく」

この話し合いの目途もある程度ついたところで、再度、商の国王が話を終わらせ始めた。

「ええ、では二カ月後は私の国からは、使者を送りますので、召喚の儀の見学をさせてあげてください?」

「ふむ、商国の。お前はこないのか?」

「一国の王がそう簡単に他国に出向くわけにも行かないでしょう。情報だけ集めさせてもらいます」

「……そうか。武国のと美国のはどうする」

魔の国王は二人に眼を向けた。

「我も同じだ。簡単に国を離れるわけにもいかん。……それに魔王討伐ならば、我が国に足を踏み入れるのは確実だろう。その時会いばいい」

「ボクもそうですねー。僕のほうは形だけとは言え王は王ですから。あ、でも妻が行くよう言うなら、来るかもしれませんねー」

全員の答えを聞き、魔の国王は改めて話をまとめる。

「ならばまた次の話し合いのときまで会うときは無いだろうが、勇者が国に来訪したときは、手助けをしてやってくれ」

その言葉に全員が頷き、話し合いは終わった。

各国王が応接の間を出る直前、武の国王が思い出したかのように尋ねる。

「そうだ、天才変人が呼び出した異世界人の名は？」

「ああ、言っていなかったな。名は……ヒノ・リユーヤ殿だ」

三十三話 （後書き）

魔の国王様と武の国王様が言ってた「商国の」とか「美国の」とかは、呼び方、と言うかあだ名、みたいな感じです。

イメージとしては某大佐が言うところの「鋼の」ですね。

三十四話 (前書き)

蒼井樹視点です。

三十四話

龍也が召喚された日、とある部屋。

パタンッ

と、開いていた携帯を閉じ、蒼井樹はクスリと笑う。

「ふふん、これで龍也は明日の僕の用事が気になって、夜も眠れないだろうね。……明日何も用事は無いと知ったら、どんな顔をするのか……くっくっく、楽しみ」

小悪党のような笑い方をしながら、樹は床につく。

明日学校に行けば会えるはず、だった親友の顔を浮かべ。

「んー……なんだ、日野は休みか。……相変わらず休み多いな、こんちくしょう」

担任教師が龍也の文句を言いながら欠席をとっている。

「（……休み、だとう！ まさか僕のメールで怖気づいたか！？ いや、そんな龍也は性格をしていない！ ……まさか、風邪！？）」

とりあえず学校が終わり次第、龍也の家に行くだ。

ドンドンドンッ！

「龍也！ 出てきたまえ！ いないのっ！？ てか無事！？」

そして何気なくドアノブを掴むと、

ガチャッ

「……開いてる………これだとサスペンス系の王道になってる気が」

親友の死体とかあったらやだなあ、などと考えながら、樹は恐る恐る龍也の家に入る。

「………誰もいない。………これは、とりあえず死体がなかったことにホッとすべきか……？」

そして樹は改めて部屋の中を見回す。

「相変わらずコタツは出っっぱか。いい加減しまえばいいのに」

と、樹は足元に落ちていた携帯を見つける。

開いて確認してみると、

「……ん、受信メール確認欄のまま閉じてある。僕のメールを見た直後そのまま閉じたのか。………どこに行ったのやら………と言うか財布まで置いてあるのだが………」

もしか、誘拐？ ……は、無理がある。そんな歳でもなければ、別に彼は取り立てて裕福でもない。

夜逃げ？　は無いな、するタイプでもないし、いろいろ物を置いてきすぎ。

じゃあ、やはり何か事件に巻き込まれた？　……うん、やっぱりそれが、一番可能性が高そうだ。

僕もそうだが、彼もなかなかのトラブルメーカーだ。
まあ、僕も龍也もそれは自覚してるけど。

それにしても、今度はどんなことに巻き込まれたのか。

学校内の喧嘩に始まり、通り魔事件、不良集団同士の抗争、銀行強盗。

あ、不良同士の抗争と銀行強盗は僕も一緒か。

と言っても事件を解決したとか人知れず戦ったとかじゃなくて、ギリギリまで巻き込まれたくせに、特に怪我もなく帰還、みたいなのがいつものパターンだ。

不良の抗争にいたっては、誰も僕たちには目もくれなかったのに、人ごみに流されて、気がつけば二人してトップ同士の決戦の真っ只中に立ってたし。

……とりあえず置いておく。

まあ、今までいろいろ巻き込まれてきたから何が起こっても違和感はないけど。

ただ、どんどん巻き込まれる事件が大きくなってきてるし、もうここまで来ると、

「異世界からの勇者召喚とかに巻き込まれたとしても、驚かないなあ……」

樹は冗談半分で呟く。

——それが事実なのだが……。

「ふむう、とりあえず様子見で数日は付近を搜索するだけにしてみるか。もしかしたらひよっこり帰ってくるかもしれないし」

口では軽く言っているが、内心樹は焦っていた。

今まで自分に内緒で親友がどこかに行くことはなかったからだ。

樹は持てる情報網を使い、龍也を探すが、当然何一つ情報は入ってこなかった。

そして約一週間後。

「おう、今日も日野は休みか。……うん、さすがに少し心配だな。電話にも出ないし。誰か奴の所在知ってる奴いるかあ？」

ザワザワする教室内だが、だれも名乗り出る者はいなかった。

「誰もいねえのか。おう、蒼井。お前あいつと昔からの馴染みだつたろ。何か知らねえのか？」

担任教師は、若干目の下に隈を作った樹に話しかけた。

「……そうですね。実は一週間ぐらい前に彼の家に様子を見に行きました」

「なんだ。そうだったのか」

「はい。家の鍵はかかっておらず、本人もいませんでした」

一瞬にして教室内が静まり返った。

「……………」

担任もほぼ放心状態で黙ったままである。

なおも樹は続ける。

「中に入ってみると、携帯は床に落ちていて財布も置きっ放しでした。他にも何かを持ってどこかに出掛けたって言う様子は見られませんでしたね」

ここでやつと担任教師が口を開いた。

「……………それは」

「ええ、行方不明です。そのうち帰ってくるかと待ってみましたが」

「……………」

「僕自身も少し付近を捜してみましたが、痕跡一つ見つかりませんでした」

樹は『少し』と言ったが、実際は学校に言っている時間以外は常に、ここ数日は夜通し探していた。

「……………警察には」

「さっきも言いましたが、そのうち帰ってくるかと思ってましたので、なにも連絡してません」

「……………えー、い、一旦自習とさせてもらっ」

担任教師は言い終わると同時にダッシュで教室から飛び出して言った。

教室内は未だ静まり返っているが、すぐに大騒ぎになるだろうと予想した樹は、自主的早退することにした。

教室を出て数秒。予想通り教室から騒ぎ声が聞こえた。

そしてさらに一週間と数日。

あの後すぐに警察に連絡がいったようで、すぐに龍也の搜索が始まった。

僕も事情を聞かれたりもしたが、意外とすぐに終わった。

警察が搜索を始めたのはいいかもしれないが、この僕が二週間と数日かけて見つける事が出来なかったんだ。
警察程度に見つけられる気はしない。

中二病っぽいって？ 余計なお世話だよ。

しかし、こうなってくると本格的に何か、非現実的に事に巻き込まれてるんじゃないのか？ 龍也は。

まあいい、仮に本当にそうだとしても、

「……龍也、必ず僕が見つけてあげるよ。待っていたまえ！」

同時刻。

ビクッ！！

「……なんだ？ 頼りにはなるけど更なる厄介事になるような微妙に嫌な予感」

暗殺騒ぎに加え、ゲニーと王様の策略に嵌められた事に傷心の龍也に、妙に具体的な予言が舞い降りていた。

三十四話 （後書き）

これだけでは、まだ樹がどんな人間なのかまだわかってませんよね……。

勇者召喚されてから、もう少し樹の話も書く予定です。

……ただこれだけやっておいて、まだ勇者が登場できて無いとは……自らの文才のなさに呆れます……。

だがしかし残念ながら、次も勇者が絡む話ではありません。

三十五話 （前書き）

セルフ視点です。

最後ちよつとだけ龍也視点になります。

三十五話

異世界から来たことの発表から数日。

セルフは、

「いやー、りゅーやんは相変わらず苦労してるようだあ」

と独り言をもらしながら、すでに日課となつてしまった城の探索をしていた。

もうほぼ、城内部は把握してしまっているセルフだったが。

「あ、カバリオさん？」

声をかけてきたのはメイド服に身を包んだ若い女の子だった。

「お、メイドさん」

「……カバリオさんってばあたしの名前、ちゃんと覚えてます？」

「もちろんさね！ 新人メイドのフェア・ネンちゃん？ ネンちゃんこそ、オレのことは名前で呼んでって言ってるじゃん？」

「もう！ あたしはもう新人じゃありません！」

その言葉にセルフはにっと笑い、さらにからかう。

彼女はセルフが暇を見つけては開いているお茶会によく顔を出すメイドだった。

「おお、それはすまん。新しい子が入り、新人ではなくなってより一層、怠け者になったと噂のネンちゃん」

「セールーフィーさんー！？」

「くくくつ悪い悪い。でもそうやって名前で呼んでくれたほうがうれしいよい。それに、実際に今はサボってんだろ？」

実際、お茶会に顔を出すのも、サボる口実に使われるところがほと

んどだったため、セルフは少しカマをかけてみた。

「うっ！」

図星だったようだ。

「ま、黙っててやつから、いつも通り知ってること教えてもらえるかい？」

「別にいいですよ？」

セルフはたまに、城仕えのメイドや使用人から情報を得ている。もちろん、機密に関わるような深い部分ではなく、誰々の好物だとか、城内の恋愛事情だとか、そういった軽い情報ばかりなのだ。

これも日々、城内を暇つぶしの散……コホンッ！ 城内の探索をしている賜物である。

……さて、今日はどんな事聞けっかなあー。

「へええ！ そんなことに……」

「ええ……結構大変みたいですよ？」

ん？ どんな内容か気になるって？ 他人のプライバシーを探るもんじゃないよう？

「……誰に言ってるんですか……」

「特に誰と言うことはないよん。ってか、心の中を読まないでくれるかい？」

「顔に出てましたよー」

「むむむっ！　これがメイドクオリティ……恐るべし」

セルフがニヤニヤ笑いながら言うが、

「え？　確かにあたし達メイドが一人前と認められるには、必要なことですけど……なんでセルフさんが知ってるんですか？」

「……………」

正解してしまい、沈黙する。

——まさか合ってたとは……ほんとに予想外だぜい。

「……セルフさん？」

言葉を発しないセルフに、ネンが怪訝そうに話しかけた。

「いや、なんでもないよい。それより他に何か無いかの？」

「後は特に……………あ！」

「お！　何？　何かあった？」

「ヒノ様がセルフさんのことお探しだと聞きました！　何でも魔陣術の勉強の時間だとか」

「……………」

忘れてたぜえ……。

龍也に対してどう言い訳しようかを必死で考え、冷や汗をかくセルフをよそに、ネンは話を続ける。

「確か、ヒノ様に会いに来た、大勢のお客様に「自分の従者とやることがある」と言って、追いついたそうです」

その話を聞いたセルフは、

「……ネンちゃん、お茶会でもしようか？」

面倒くさくなった。

言い訳を考える事どころか、龍也のところに行く事自体に。

「え！？ 行かないんですか！？」

驚きながら尋ねるネンを諭すように囁く。

「りゅーちゃんには……誰かと会話すると言つことも必要さあ……」
「はあ……」

良くわからないといった声を出すネン。

それはそうだ。

セルフ自身も適当に口走った言葉で、特に意味は無い。

それでいいのかと言いたそうな表情のネンを連れ、セルフは高らかに宣言した。

「さ！ 行こう！ お茶会に！！」

一方その頃。

龍也は、従者が何時まで経っても現れないことを知り、自分を売り込もうとする来客から必死で逃げていた。

くそう！ どうして俺は逃げてるんだ！？ そもそも逃げる必要

はあるのか！？

ある！！ ぶっちゃけ、ただ座って何が言いたいのかわかん話を聞かされるのもうコリゴリだ！

「セルフ！ 何故来ない！ セルウウウウフツ！！」

結局この後、来客全員の相手をするになり、疲れ果てた龍也は、「セルフぶっ飛ばす」と心に決めた。

三十五話 （後書き）

とりあえず、次の話から勇者を絡めた話にしていきたいと思います。
（多分章も区切ります）

それに当たりまして、次の更新まで、少しの間時間をいただきたく思います！

活動報告にも多少詳しく書いてありますので、よろしければそちらの方で確認お願いします。

読んでいただいている皆様には申し訳ないですが、それほど時間をかけずに更新を再開したいと思っています。

三十六話（前書き）

本日より再開します。

矛盾やミスなど発見しましたら、出来ればご指摘お願いします。

三十六話

二ヶ月……あつという間……て訳でもなかったなあ……。

目を閉じれば浮かんでくる師匠による死の境界線を十歩ぐらい踏み越えたぐらいの修行。

ナールとの戦いの後に言われた「あの程度で動揺してはだめだ。だから精神を鍛えるために今より少しだけ修行をきつくしようと思う」のお言葉。

少しだけ……ね。——あ、やべ。思い出したら吐き気がしてきた。もう考えるの止めよう。

「……まあ、一応形にはなつたらしいし……もう修行のことは忘れよう……」

ちなみに今、俺は魔術練習場にいる。

魔術に関してはやっぱりあの魔本に書いてあることを全部覚えるってのは面倒だったので止めにして、自分が使いそうな、必要最低限の魔術だけ暗記した。

つまり魔術は大体自由に使えるようになった。

今は何をしているのかというと、ある事を人知れず実行しようとしていた。

「風の魔術、魔法……なかなか思いつかないな……何か漫画でなか

ったかな……？ ……多分ヤマノカズヤも思いつかなかったから、風の魔術が少ないんだなあ」

——それは、魔術を創ることだ。

かつてヤマノカズヤが創りだした魔術。

だがその元はただの言葉遊びだ。

ならば同じ要領で自分の持てるイメージを言葉にできれば、魔術を自分で作れるのではないか？
ゲニーから魔術について教わるときに真っ先に思いついたことだった。

だが、残念ながら今までなかなかそれを試す暇がなかった。

理由として大半を占めているのは、俺がひとりになれる時間が少なかったのにある。

専属メイドのレイさんや従者になったセルフはもちろん、俺が異世界から来たことを知った来客がほぼ毎日やってきた。

やっとひとりになれたかと思っても、狙いすましたかのようなタイミングで、ゲニーが俺の様子を見に来る。——嫌がらせか。

まあその理由以外にも、師匠の修行による疲労のためとか、魔術訓練や魔陣術の勉強とか、師匠の地獄のような修行により精神が擦り減っていたりとか、師匠の地獄を思い出して寝込んだりとかもある。

そして二ヶ月経ち、ようやくひとりになれる時間が増えてきたの

だ。

「んー……それにしても、やっと試せるか」

途中でゲニーが嫌がらせに來ないよう、扉の外にスクードに立つてもらった。

もちろん誰も入れないように言っている。

ちなみに俺が異世界からきたことを発表した日、スクードが俺の護衛を名乗りだした。

最初はそういう大げさなのは必要ないと言ったんだが、スクードはひく気が無いようなので、必要なときは呼ぶ、となっていた。

それで今回頼んだと言うわけだ。

とにかく、今の時間でいろいろ考えてみよう。

とは言え、今まで知ってる漫画やアニメを思い出してたけど『風』で浮かぶもの、なかったんだよねあ。

「……あー……風って考えるから、幅が狭まってるのかも。……風は、動く空気と考えると……空気、なんかあったかな……あつ！」
あつた。俺の好きな某海賊漫画で。

「じゃあ、あれを言葉に……呪文に置き換えて……」

……。

「よし、こんな感じか。……早速。」
「ッー！」

——ボツ！！ ドオオオオオオ…… オオオオオオンツ！！
！……！！！！！！

「……………おう……………」

……………予想以上にすごい威力だった……………。
漫画だから実際に本物は見たこと無いけど、本物より威力上かも……………。

しかしやりすぎた。
練習場が荒地になった。

「リユーヤ！！ 何の音だ！？ 大丈夫か！？」
爆音に驚き、スクードが部屋のドアを開いた。

「あ、大丈夫。少しやりすぎただけ」
「……………っ！！ これは……………！」
部屋の惨状に顔を険しくするスクード。

あれ、もしかしてやりすぎたから怒られるかな？

「これを……………リユーヤが？」
「あー……………っと、ちょっと練習中に魔力が暴走しちゃって！」

魔術の威力のせいで怖がられても困るから、適当な言い訳を、

「ぼ、暴走っ！？」

あ、余計に怖がらせてしまった。

言い訳間違えたな。

えーっと……。

「大丈夫だ。勇者が近くにいれば問題なく安定する。俺は勇者召喚まではなるべく魔力の使用は抑えよう」

うーむ、自信ありげな顔で言っちゃったけど、我ながら適當かつ何の根拠も無い話だ。

さすがに無理があるな。
どうしよう。

「そう、か……ならいいんだ。安心した。リユーヤのようなすごい魔力の持ち主に暴走されてはかなわんからな」

………うん、まあ、信じたからいいや。

それにしても、勇者か。

確か召喚の日は……三日後の正午、だったか。

三十六話（後書き）

勇者召喚二日前でした。

三十七話

魔術を創り始めて三日たった。

最初に創った魔術の他には、ある程度創ってはあるが、まだ試していない。

それよりも今日。

あれから三日たったということは。

今日、勇者が召喚される。

勇者がどんな奴で、今後どういう風に勇者が動かされるのかはわからないが、その間に俺は元の世界に戻る方法を探す。

——それが俺の目的……なんだけど……。

正直、この城でいろいろな人に世話をしてもらったことで、少しだけ守れるなら守りたいって気持ちも出てき始めた。

でもやっぱり、異世界からの勇者だけに頼り、自分たちは援助だけしかないって言う他力本願の精神は好きになれないし……。

どうすべきかを悩んでいる龍也の後ろに、知ってる気配が近づいてくる。

「リユーヤ。ここで何してるのだ。もうすぐ勇者召喚の儀が始まる。見に行かんのか？」

ブーゼ・ゲニー。

俺をこの世界に練習で呼び出した男。

「お前こそ。もうすぐ始まるなら、何でここにいんだよ。お前が呼び出すんだろ？」

「違う」

いつも天才だと自称していたので「当然だ」と言うと思ってたが、帰ってきたのは否定だった。

「……違うのか？」

俺が尋ねると、ゲニーは表情も変えず答えた。

「勇者召喚は貴様を召喚したときと訳が違う。リユーヤのときは何も無いただの召喚陣だが、今回は勇者召喚と言うことで、神の加護を与えるために、神殿より高位神官が呼ばれた。私は魔陣を提供しただけだ」

……神殿、はレイさんの勉強で聞いた事がある。

確か、魔の国の東にある山の麓にある建物、だったはず。

「神殿に入るには神官になるしかなくて、神官になるには生まれた国を捨てなければいけない……だったか？」

「そうだ。自分の持っていた全てを投げうってまで、神を信仰する者達のみが神官になる」

「うん。神官や神官になろうとする人は、神を意思を知る事が出来るってやつだろ？」

俺がそう、覚えている知識を確かめようとすると、その答えは予

想外のものだった。

「ふん。そんなものは、思い違いもいいとこだ。神など存在しない。神官はただ、大気に存在している自然魔力を感じ取っているだけ。魔力の動きを知ること、その場所で何が起こるのかがなんとなくわかるだけだ。それを神などと……はっ！ 馬鹿馬鹿しい」

ここにいない何かを嘲笑うかのようなゲニー。

その様子に若干引きながらも、俺は尋ねる。

「自然魔力ってなんだよ？ それに神がいなくてんなら神の加護ってなんだよ？」

ゲニーはこつちを見ることなく、俺の問いに答えた。

「自然魔力とはその名の通りだ。体内に存在する魔力とは別に空間にも魔力は存在している。それはある事が当たり前すぎて一般人が気づくことはない。当然、普通は知られていないことだからリユーヤが知らないのも無理はない」

確かに俺はレイさんにもセルフにも魔力は生物の中にしか存在しないと教えられていた。

……それは間違い？

俺はポカンとしたまま、ゲニーの話を聞く。

「そして神の加護だが、あれは高位の神官しか使えないとなっている。一般的にはそれは神に認められたからというのが常識だが、そんなものではない。単に自然魔力を操作する事が出来るようになってただけだ。つまり神官の行う神の加護とは、神官が無意識に自然魔力を操作し、人間の体内に注ぎ込んでいるに過ぎないのだ」

この世界に詳しいつもりはなかったが、今ゲニーが言ったことが本当なら、それは世界の常識を覆すようなことではないのか？

それほど重要な話をどうでもよさそうに話すゲニー。

その姿に妙な恐怖心が沸いた。

「……何でそんなことお前が知ってるんだ？」

俺がつい発したその言葉に、ゲニーはこちらを向いた。

そして怪しげに笑い、

「そんなもの私が天才だからに決まっているじゃないか！！ 人が知りえないことを知る！ それこそが天才の証だ！！！」

と高らかに宣言した。

沸いた恐怖心が一瞬で霧散した。

……こいつ本当に天才なんだろうが……根本的な部分で馬鹿だ。

「……お前が言った事が本当なら、それは広めたほうがいいんじゃないのか？ 世界的に」

「ふんっ！ そんなことをして何になる？ 私に何も利益が無いじゃないか。私と違い天才では無い人間達が、どう勘違いしようが私には関係ない」

こいつ救いよう無い。

「あー……おい、ゲニー。召喚見に行くんじゃないのか？」

話を聞いて、何かどうでも良くなった俺は、未だ高笑いを続ける天才である変人に呼びかけた。

「おお、そうだった。さあ、行くぞ」
ついて来いと言わんばかりのゲニー。

その背中を見ながら、ため息を吐いて、召喚が行なわれる場所に向かう。

三十七話（後書き）

今後かなり説明などが続いたりします。ご了承くださいませ。

三十八話（前書き）

……とつとつ……。

三十八話

俺とゲニーは謁見の間に足を踏み入れる。

謁見の間で召喚することになったのは、単にこの場所が一番広く、人数が入るからだそうだ。

そして、俺とゲニーは入ってすぐの壁に背を預け、召喚の儀を待つ。

今、この謁見の間は異様な空気だった。

言葉なんて発せそうに無い。

勇者召喚を行なう者の集中、周りの人々の興奮、期待、そしてほぼ全員が抱えている召喚失敗への恐怖。

それらが混ざり合って、妙な緊張感に包まれていた。

……うん、今まで生きてきて、現実にはそんな場面に立ちあう事があるなんて思ってたけど、小説とか漫画を読んできた限り、大体こういう緊張感に包まれる描写だった。

そう、間違っても練習、みたいな軽い感じで、人間は召喚されないよね……？

今更愚痴ってもしょうがないんだけど。

まあ、そんな空気の中、隣には早く終わらせてほしそうにあくびを浮かべるゲニーが立ってる。

……ああそうだよな。

こいつはあの召喚の魔陣で俺を呼んだわけだから、この儀式の失敗なんて、こいつにとってありえないわけだ。

そりゃ緊張感もクソもあつたもんじゃないよ。

見ていると腹が立ってくるので、ゲニーから召喚魔陣のほうに向きなおす。

魔陣の近くに集中した様子でたたずんでいたのは、全身白の服を着て、青く長い髪の遠目で見ても美人だとわかる女性だった。

恐らく彼女が、召喚魔陣を発動させる者、そして召喚する際に神の加護を与える高位神官なのだろう。

……あんな美人に召喚されるのは正直ちょっと羨ましい。

しばらくボーっと見ていると、ゆっくりと彼女が動き出した。そろそろ召喚の儀が始まるのだろうか。

……それにしても、若干視線がウザいな……。

俺が異世界の住人だつてのはこの城の人はもちろん、他国でも数人には知られてるつてのは聞いてたけど、今くらい勇者の方に注目しろよな……。

まあ、確かに俺がいてゲニーがいたら目立つだろうけど。

堂々と好奇心だけで見てくるならもう慣れたけど、数人は気配を消して隠れながら観察してきてる。

ってか、監視なのか？ あれ。

どっちにしても中途半端に気配を消してるから気になってしょう

がない。

……つと、魔陣のほうから魔力の動きを感じる。

俺が観察者に気をとられているうちに、召喚の儀が始まっていた。

周りの人たちが固唾を吞んで見守っている。

そして、

——カッ！！！！

魔陣が眩しいぐらいに輝きだし、視界を奪った。

ドサッ！！

何かが落ちてくる音が聞こえた。

……目はまだ開けられないが、確かに気配が一つ増えている。

そして光が落ち着いていき……。

「——ってえ……！ なんなんだ？ 一体……って、え？ え？

な、ええ？」

目を開けると、まだうつすらと光り続ける、魔陣の上には一人の男がしりもちをついていた。

大分困惑しているな。

ま、あれが普通の反応だよな。

俺は改めて観察する。

……うん、樹じゃない。

それにしても誰だろ、あいつ。とりあえず俺は知らな……いや、どうだろ……どっかで見たことあるような気も。

「——ワアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

俺が勇者さんについて思い出そうとしていると、周りの人も召喚成功を悟ったのか、部屋中が歓喜に沸いた。

当の勇者本人は、状況が把握できなく、若干涙目だ。

もちろんすぐに王様が皆を静め、神官さんが改めて勇者さんに語りかけていた。

「突然およびたてして申し訳ありません。わたくしはサント・アンジユと申します。あなた様のお名前を教えてもらってもよろしいですか？」

「え？ えっと、新堂創一……です」

んまー、よくまったく理解できない状況の中で自己紹介できたね。新堂君もなかなか……ん、新堂創一？

……あ！ 思い出した！！ 噂に名高い、新堂創一君か！

そうだ友達から無自覚でモテまくる野郎がいると聞いた事がある。しかもそいつが実際話してみると、気は弱いが結構いい奴で、憎しみを持ちづらい奴だと。

直接の面識はなかったから思い出せなかったけど、同じ学年だ！勉強運動共に、樹に次ぐ学年二位だったはず。

そうか、樹じゃなくてそっちが来たか。

確かに勇者ってハーレム形成すること多いし、少し納得かも。

……あれ、そういえば樹のやつがモテるって話は聞いた事無いな。あいつも容姿はかなり整ってる方だし、性格もいい、と思う。
？ ……なんでだろ。

俺が考えてる間も話は進んでいく。

「シンドー・ソーイチ様ですね。改めましてシンドー様……」

勇者として魔王を倒してください。

多分そういう感じのことを神官さん（サント・アンジュさん、だっけ？）は言うつもりだったんだと思う。

でもそれが言葉としてでる前に、

——カッ！！！！

今までずっと淡く光り続けていた召喚魔陣が再度強い光を発した。

そういえば、俺が召喚された後の魔陣式は光ってなかったような……。

眩い光の中、そんなことを思い出していると、またもこの場に気配が一つ、増えた。

三十八話（後書き）

長かったです、やっと勇者召喚です。
ずいぶんかかりました……。

大変お待たせしました。

感想ご指摘等お待ちしております。

三十九話 (前書き)

新堂君視点です。

三十九話

おかしいな……何がどうなってるんだろう……？

頭が可笑しくなったんだろうか、俺は。
いや、少し記憶を辿ってみよう。

学校は楽しかった。
それはいつも通りだ。

放課後になつて、帰る支度をしていると、

「新堂君、一緒に帰ろう！！」

「創一くん今日も送ってもらえるんだよね？」

「……そういち、帰ろ？」

と、三人が声をかけてきた。

「ああ、多菜葉さん、亜笠さん、麻耶さん。いいよ、一緒に帰ろう」

彼女たちは、俺がこの学校で出来た初めての友達。

元気いっぱいふたみの二見多菜葉さん、しっかり者の一条いちじょう亜笠さん、
ちよつと無口の三井みつい麻耶さん。

今まであまり人付き合いも得意ではなかったので、すごくうれしかった。

ちょっと困ってるのは、名前で呼ばないと怒ることぐらい。

苗字呼びは癖みたいなものだから、何か変な感じなんだけど……慣れるしかないか。

それ以降はちゃんと男の友達も出来た。

ただ、男友達は彼女たちが俺と一緒にいると、何故か皆、妙な顔をする。

女の子の友達は今のところ彼女たちと、もう一人だけだ。

他の女子は何故か僕を見ると、顔を赤くして、怒ってどこかに行ってしまう事が多い。

そのことを少しショックに思っているのは内緒だ。

あ、ちなみにもう一人は、別の学校に通ってる。

それは置いて、四人で仲良く帰っていると、

「あ、また警察だ。最近多いなあ……」

横に立っていた人を見て、亜笠さんがそう漏らした。

「そうだね……」

最近、この辺に警察が巡回している。

俺が通う学校で一人、行方不明者が出たからだ。

しかも俺と同じ学年。

名前は、日野龍也さん。

日野さんと俺は直接の面識は無いけど、文武共に学年一位の蒼井さんといつも一緒にいるのは知っていた。

……つまり蒼井さんにとっては、突然大事な友達がいなくなったということだ。

「辛いんだろうな……」

「えっ！？ どうしたの？ いきなり」

つい呟いてしまった独り言を多菜葉さんに聞かれてしまった。

「いや、なんでもないよ。それより、三人の家は向こうだったよね？俺はこっちだから」

俺がそういうと彼女たちは、残念そうな声を漏らしてくれた。

「えー、いいじゃん一緒に！」

「そうね、それに送ってくれる話だったと思ったけど？」

「……………家の鍵なくしたから、そういち、泊めて？」

本当に俺は友達に恵まれている。

……………麻耶さんはとんでもない事言ってたけど。

「ごめん、今日はバイトだから。それと、気軽に泊まりとか言った

ら駄目だと思うよ？ 麻耶さん」

「うーん……わかった！ また明日ね？」

「明日はちゃんと家まで送ってくださいね？」

「……残念。……明日」

……残念って……。

でもま、本当にいい友達を持てて幸せだな。

その後は少し時間がギリギリだったので、急ぎ足でバイト先に向かった。

と、思っていた。

そうだ、その時、足元に穴が開いてたんだ。
俺は抗うすべなく、ゆっくりと落ちていく。

——待ちたまえ！！！！

暗闇に落ちていく中、上にある自分が落ちてきたであろう場所から声が聞こえ、その後すぐに意識を落とした。

そして、軽く叩きつけられるような衝撃で目を覚ましたんだ。

「——つてえ……！　なんなんだ？　一体……つて、え？　え？　な、ええ？」

なんだ、これ……。

見渡す限りに、人。それもたくさん、しかも外国人だ。

あ、一人黒い髪の人もいた。

ど、どうなってるんだ？

今起きていることを必死で整理していると、

『——ワアアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

ビクッ！

いきなり歓声を上げだした。

怖いよ……昔から涙を見せるのは嫌いだったけど、今はちょっと泣きそうだよ……。

そんなことを知ってか知らずか、何か王様っぽい人がそれらを抑えてた。

——……つて王様……だって？　本当にここどこ？　外国か何か？

俺の困惑をよそに、サント・アンジュってすごいきれいな人に自己紹介された。

……あ、礼儀として名乗られたら、こっちも名乗らなきゃ。

「え？　えつと、新堂しんどう 創一そういち……です」

俺の名前を聞いた、サント・アンジュさんはゆっくりと俺の目を見つめ、何かを言おうとした。

けどその前に、突然俺の座ってた場所が光りだした。

もう……今度はなんだ……？

光で目が見えない中、隣で、

ドサッ！！

と言っ音と、

「あべしっ……！！」

と言っ伝説のやられゼリフの一つが聞こえた。

恐る恐る目を開けると、そこにいたのは、

「え？ あ、蒼井さん？」

三十九話 （後書き）

話の中に出てきた女の子たちは、恐らくもう登場することは無い
かと思います。

故に結構適当な名前をつけてしまいました……。

もし余力があれば、新堂君の今までの日常と言う形で、彼女たち
も出てくるかもしれません。

10/7 設定内容等、若干変更いたしました。

……一体どここの事でしょうか。

感想等もお待ちします。

四十話

光の中、聞き覚えのある声が響いた。

「あべしっ……！」

……無意識なのか何なのか……ふむ、個人的には「ひでぶ」のほうがいいだな。

「え？ あ、蒼井さん？」

顔見知りか……いや、まあ当然か。

にしても……何が起こったのかまったくわからんな。

ここにいる全員が呆然と突っ立ってたから、誰も理解して無いだろうが。

ふと横を見ると、ゲニーは他の人とは違い、何故か笑みを浮かべていた。

当の樹は、言葉を失っている人々を見て、少し考え込み、すぐに顔を上げた。

そしてすぐに口を開いた。

「すみません、僕は巻き込まれただけです。こちらのお方こそ、あなた方が求める勇者様です」

……相変わらずと言うか、なんと言うか……あの少し考え込んだ一瞬で状況を把握したんだろうが。

その言葉にアンジュさんが戸惑いながら、尋ねていた。

「え？　そ、うなのですか？」

しかしそんなことはお構いなしに樹はまくしたてた。

「はい、僕は一般人です。今は親友を一匹探してる最中で、巻き込まれただけです。その親友ですが、恐らくこの近くにいると思うんですが……」

そう言つて、樹は周りを見渡し……俺と目が合った。

「あ、いた」

樹は俺を見つけるなり、一直線にこちらへ向かってきた。

他の人たちもわざわざ樹に道を空けなくてもいいのに。

「あ、少しお待ちを……っあ！」

樹を引きとめようとしたアンジュさん。

だが、召喚魔陣で魔力を使いすぎたのか、よろけてしまった。

倒れる！　と思つたが、近くにいた男が彼女を抱きとめていた。

「だ、大丈夫ですか？」

新堂創一君だ。

「は、はい……ありがとうございます……」

「よかった……」

アンジュさんが顔を赤らめて礼を言ったのがここからでも見えた。

うーん……あれが無意識にハーレムを作っていくからくりか……。

そんなことをボーっと考えていると、樹がタツクルをかましてきた。

「ぐっ！」

「くつくつく、やっと見つけたぞ、日野龍也！」

「その笑い方止めろって」

「無理だな。これが僕の仕様だ」

久々の親友の会話をしていると、周りがポカンと見てくるのがわかった。

すると、ゲニーが話しかけてきた。

「リユーヤ……彼じ「知らん。魔陣式に関してはお前の専売特許だろうが。俺に何も聞くな」……では、君に聞こう。君は勇者じゃないのか？」

俺は当然答えを拒否ると、今度は樹に尋ねた。

「違いますよ。僕は何の力も無いただの一般人です。大体、こんな女の子が、勇者なんか出来ると思えますか？ 戦えすらしませんよ」
「……そう、か」

ゲニーは一応納得したようだが、俺は内心、呆れていた。

——よく言う。何が何の力も無い一般人だ。何が女の子だ。今まで自分で女子であることをアピールしたことは無いだろう。

だが、よく見てみると、本当に樹から魔力が微量しか感じ取れなかった。

おかしいな……あそこにいる新堂君もそうだし、俺でさえ魔力が大量にあるのに、今まで天才の名をほしいままにしてきたこいつが、魔力がほぼ無い？

最初はかなりの魔力を感じたような気もしたんだけど……気のせいかな、新堂君の魔力と勘違いしたか？

そんな疑問を持つ俺をよそに、樹はドヤ顔で俺に話しかけていた。

「ふふん……やはり僕の予想通り、めっちゃくちや厄介なことに巻き込まれてたか。だが、喜びたまえ。僕がいればもう安心だ」

その姿に若干イラツときたが、よく顔を見ると、目の下にはひどい隈が出来ていて、心なしか少し痩せたようにも見えた。

——……ふう、どうせこいつは、馬鹿みたいに俺を探しまくったんだろう……。

つたく、

「ありがとう、樹。安心したわ」

「おお！？　おー……」

素直に礼を言われると思わなかったのか、どもりながら照れている樹。

そんなやり取りをしていると、向こうで何やら王様やお偉いさん、それにアンジュさんと色々話していたっぽい新堂君が、こつちに近づいてきた。

こつちで喋ってる間に、正式に勇者になったんだらうか？

……むむ、何か嫌な予感がある。

ふん、甘く見るな。

この二ヶ月俺も遊んでいたわけじゃない。

嫌な予感を覚えた際の回避方法は取得済みだ！！

よし、とりあえず速やかにここを離れよう。

ぐっ！

……うん、速やかに、

ぐっ！

あれれ？ どうして動かないのかな？ ……答えは、未だ腰に樹が張り付いてるからだよ。

「樹さん、離してもらえまいか？」

「何を言ってるんだ。やっと見つけたんだ。しっかり捕まえとかな

いといけないじゃないか」

……お前こそ何を言ってるんだ。

俺は一刻も早く勇者から離れなければいけないんだ。
そんな思いを込めて樹を睨むと、

ニヤツ……っと笑いやがった。

こいつ……俺の心情を読んでの確信犯かつ！！

必死で抵抗を試みるも、樹が離れることはなく、気がつけば新堂君は目の前にいた。

「……やあ、何、かな？」

「ああ、えっと、始めまして、だよな？　俺は新堂創一。君は日野さんだよな？」

はいはい、日野さんですよ。

どうして俺の名前を知ってるんだろうか？

四十話（後書き）

感想ご指摘お待ちしております。

四十一話（前書き）

続きですね。

四十一話

結局、新堂君の話は「君も魔王討伐を手伝ってくれと聞いた！一緒に頑張ろう！！」だけだった。

なんだ……俺の嫌な予感が外れた、のか？

いや、それともあの時の嫌な予感は別な何か……？

それはさておき、新堂君は、まだ正式に勇者になっただけではなかった。

どうやら王様やアンジュさんに事情を聞かされただけらしい。ただ、事情を聞くなり即答で勇者になることを受け入れたそうだが。

その人の良さっぷりは、真似出来ない。

そう、思っていたのだが、

「ソーイチ殿もリユーヤ殿と同じでお優しい心を持っているようだ」
王様が近づいてきてそう言った。

隣にいたゲニーが小さく笑いながら言った。

「ふむ、貴様と同じで、いい感じにお人よしのようだ」

実は王様の近くに立っていたリッターさんが言った。

「リユーヤ様といいソーイチ様といい、異世界人は皆あのように、寛大な心を請ってるのだろうか」

「……………何故か、俺の評価は新堂君と同じ様に、人がいい扱いをされているらしい。」

「何でだ……………」

「いやいやりゅーやん、自分を暗殺しようとした人間を殺すことに反対しておいて、そんなこと言うかい？」

いつからいたのかセルフが呆れたようにそう言った。

今は、一旦新堂君を部屋に案内して、少し状況を説明をするらしい。

で、落ち着いたら正式に王様から新堂君に、勇者となって魔王討伐の依頼をする。ということになっている。

ちなみに樹は、俺と新堂君の話が終わったら、すぐに俺から離れた。

何が、せっかく見つけたから、しっかり捕まえとかなないといけないじゃないか、だ。

樹はとりあえず俺の部屋に行くことになった。

勇者召喚で、二人も呼び出されるとは思ってたから、部屋は勇者のための一つしか用意してなかったからだ。

樹は部屋につくなり話し出した。

「いやーさっきの話から想像するに、君はこっちに来てからも、かなりいろんなことに巻き込まれたようだね」

「……さっきの話ってのは、王様とかゲニーとかが言った、あれか」
「そう、ゲニーってのは誰のことかはわからないけど、恐らくそれだ。暗殺とか物騒な単語も聞こえたし」

……セルフのせいかな。

「って言うかお前もそうだろう。結局巻き込まれてこの世界に来てるし」

「いや？　今回、僕はちょっと違うよ。巻き込まれたんじゃない」

「でも、召喚されたとき、そう言っただろ」

「言ったね。あれは嘘さ。ああ言っただろうが、僕は巻き込まれないと思ったからね。龍也は単純だね」

「あーはいはい。じゃあ、どうして巻き込まれて無いあなたはここにいるんですか？」

「自分で飛び込んだからね」

「……はい？」

「だから、自分で飛び込んだんだ。僕は少し離れたところで、新堂君が黒い穴に落ちていくのを発見したんだ。異常事態だったけど、僕は龍矢を探すので忙しかったから、無視しようとした。けどその穴から何やら君の気配を僅かに感じてね」

「……で、その穴に、自分から、飛び込んだ……と」

「正解だ」

「……………そのネタちと古くないか？　微妙にわかりづらいし」

「僕は好きなんだ、これ」

「……………にしても、だから時間差でお前が召喚されたのか……………」

「そうだね、異世界の穴が閉じかけてたから、こじ開けるのに苦労したよ」

「そうか……………え、今なんて言った？」

「ん？　苦労したよ」

「その前だ。……………そうだね、って言ったらぶっ飛ばすぞ」

「ふう、つまらない……………異世界の穴が閉じかけてたから、こじ開けるのに苦労したよ」

「……………こじ、開ける……………？」

「うん、こう、手でバツ！　と」

そう言っただけは大きなジェスチャーをとった。

「……………そんなもんなのか」

……………うん、考えるのは放棄しよう。

とりあえず、樹だから。

で、何でも説明できる。

「さて、俺がいなくなって二ヶ月。その間の事を聞かせてもらうか」
「うーん、そうだな。特に変わったことは無いんだけど。クラスの
皆も割りと普通だし……警察が近所に増えたぐらい？」

「そうか」

いなくなっても問題ない奴だったのか、俺は……。

多少は気づいてたところもあったけど、改めて言われると、凹むな
……。

「あ、聞きたまえ。一応、君の両親にも連絡したけど」

「いいや、答えわかってる。『そのうち帰ってくるだろうから放つ
とけ。死んでたら死んでたで、そんとき考える』だろ」

「エレス・コレクト正解だ。いやー、さすがだね。一言一句間違いないよ」

「わかってた。……てか、そのネタ、もういいよ」

「僕は好きなんだ」

四十一話（後書き）

感想お待ちします。

四十二話

どうも、日野龍也です。

さつき王様に呼ばれて、王室までやってまいりました。
新堂君が正式に勇者となるそうです。

さて、今ここにいるメンバーは、まず主役である新堂君。
そして王様と、恐らくその護衛のリッターさん。
神官のアンジュさんもいた。

少し離れた場所で、壁に背を付け、ゲニーも立っている。

そして今呼ばれたばかりの俺と樹。

王様はもちろん、リッターさんやゲニーがいる理由は、この国の
戦力で、実力的にトップにいる人達だからだと思う。

多分今後、新堂君に戦闘技術あれこれを教えるのは、リッターさ
んとゲニーになるということか。

そしてアンジュさんがここにいる理由もなんとなくだがわかる。
恐らく、彼女は勇者と共に旅に出るパーティの一人、と言うこと
だろう。

それが王様からの頼みなのか、自らの意思なのかは知らないが、
多分『自らの意思』のような気がする。

俺が呼ばれたのは、勇者のパーティである事が確定してるから。

樹は異世界から来たことには変わらないので、一応呼ばれた、ってことだと思う。

そんな予想を頭の中で繰り広げているうちに、少し話が進んでいた。

「それでは、ソーイチ殿……いや、勇者殿。改めてお願いしたい。魔王を倒し、この国に平和をもたらしてはくれぬか」

「はい。この国だけでなく、他の国も救って見せます！」

おお……！ はつきり断言したよ。かつこいい。

てか、王様詳しい説明してなかったと思ったけど、いいのか？

……あ、さっき召喚されたときに説明受けてたか。

「そうか……！ 感謝するぞ！ だが、一人で魔王に向かうは危険。よって勇者殿、仲間を集めよ。幸い、この国にはもう一人魔王と戦ってくれるという異世界人がいる」

おい、それって俺のことか。

「そこにいるリユーヤ殿だ。彼の力はすでに証明済み。必ずや勇者殿の冒険の助けとなるだろう」

俺のことだった。

王様、口にこそ出して無いけど、勇者に対して「そいつを連れててけ」って言ってるような心の声が聞こえる。

「はい。彼も共に戦ってくれと言ってくれました」

……………え！？ 言った！？ そんなこと！

えっと……………もしかして、あの「一緒に頑張ろう」ってそういう意味！？

いや、にしても俺、それに対して返事してなくね！？

「……………相変わらずだね、君は」

うっさいよ、樹！！

「そしてここに居られる、神官のサント・アンジュ殿も勇者殿と共に旅に出ることを志願してくれた」

俺の予想的中。

てか、やっぱり志願だった。

「……………しかし、危険な戦いになるかもしれないですよ？ そんな中に彼女を連れて行くわけには……………」

おい、その気遣い俺に対しては出てこなかったのかい？ 新堂君。

……………やめる樹。無言で俺の肩に手を置くな……………悲しくなる。

微妙に俺の心を荒らした新堂君の言葉にアンジュさんが、静かに返した。

「心配は無用です、ソーイチ様。私はそれでも高位神官です。それ

なりに実力はあるつもりです。……それに、私はあなたと共に戦いたいのです」

「アンジュさん……」

「アンジュ、で大丈夫ですよ」

「いや……さん付けは癖みたいなものです。俺のことは呼び捨てで大丈夫です」

「わかりました。……でも、やっぱり呼び捨てていただきたいです」

「……じゃ、じゃあ少しでも慣れたら呼び捨てますね」

「はい、ありがとうございます。ソーイチ……」

なにやら微妙に二人の空間を作り出し始めた。

王様も気まずそうにしてるよ。

しかし、空気を読まない人間ってのはどこにでもいる。

「勇者。どうでもいいが、これをもってくれないか？」

さすがゲニー。

空気を読まない最悪っぷりは健在だ。

アンジュさんはムツとしているが、王様とリッターさんはホツとした表情を浮かべていた。

ゲニーが持ち出したのは、前に渡された、属性を調べる水晶だった。

「これで、勇者の発属した属性を調べたい」

ゲニーの態度にアンジュさんが少し機嫌を損ねたようで、
「ちよつとあなた、勇者様になんて口のきき方しているの？」

と、若干怒り気味で話し出した。

……そんな言い方すると……。

「貴様こそ、この私になんて口のきき方をしているのだ。たかが神官風情が」

「なっ！！　っあなた！！」

……やっぱり。こういう奴だよこいつ。

「待つて、アンジュさん！　俺は大丈夫だから。むしろ敬語使われるより全然いいよ」

「ソーイチ……わかりまし……いえ、わかったわ」

新堂君の言葉に早速敬語を止めたアンジュさん。

……意外と単純だな

「それで、これをどうすれば？」

「持って力を込めるだけでいい」

新堂君が水晶を手を取った。

その時、

——カツ！！

と、水晶が輝きだした。

この感じだと、やっぱり光属性か。

「こ、これは……」

王様もかなり驚いているようだ。

「勇者。もういい、返せ」

ゲニーが慥然とした態度で水晶を受け取り、光も収まった。

「……すごい！ ソーイチ！ あなた光属性ね！ それもあれほど強力な光属性は見た事が無いわ！」

アンジュさんが興奮した様子で新堂君に話しかけていた。

しかし当の新堂君は、キョトンとした顔をしていた。

……ああ、当然だろ。何にも知らないんだから。

「え……？ すごい、んですか？」

新堂君は素直に質問することにしたらしい。

アンジュさんが答えるかと思ったが、その前にゲニーが答えていた。

「ああ、属性の中で、光と闇はかなり珍しい。ほとんど発属するこ
とは無い属性だ。そしてその強さも一級品だったな」

「は、発属？」

「そのあたりの説明は、魔術を教えるときに一緒にする。今は置いておけ」

「はぁ……」

相変わらず投げやりだな……。

てか、俺のときより説明雑だし。

すると今の話を聞いていたアンジュさんが、
「心配ないわ、ソーイチ。あんな奴に教わらなくても、私が教える」
と自慢げに言い出した。

それを見てゲニーはニヤリと笑い、

「そうか。なら、魔術を教わりたくなったら、私のところに来い。
この国で魔術は私か王かリユーヤしか使えんからな」

「……………なるほど、雑な説明やあの態度は自分の負担を減らすた
めか。」

ぼんやりその光景を見ていると、ゲニーは水晶を持ったままこちらに近づいてきた。

そして水晶を樹に突き出した。

「一応、貴様も持ってみるといい」

ああ、まあ樹も異世界人だからな。

でも、魔力がそんなに無い事がわかってるから、一応、ね。

「ああ、僕はいいです。僕、魔力ほとんど無いんで
そう言って樹は断った。」

ゲニーも強く勧めることもなく「そうか」と言っで、元いた場所に
戻っていった。

……………ん？ 今、何かが……………？

四十二話（後書き）

感想ご指摘お待ちしております。

四十三話

俺の頭に何か引っかかりを持ったまま、話は進む。

「それでは勇者殿。あなたは召喚されて間もない。魔王と戦ってもらうにも失礼ながら実力不足だ。そこで、ここにいる我が国の騎士団長アトカース・リッターから剣術を、そして我が国が誇る最高の魔陣師にして魔術師のブーゼ・ゲニーから魔術を習ってもらいたい」

「はい！」

新堂君いい返事するね。

リッターさんがスツと新堂君の前にまで歩き、

「自分の名はアトカース・リッター。勇者様に自分の持て全てを教え込みましょう」

と膝をつき、頭を下げた。

「や、止めてください！ 俺は頭を下げられるような人間じゃありません！」

「は、かしこまりました。……しかし、やはりリニューヤ様と同じでお優しい心をお持ちのようだ」

待ってー……ここで俺を引き合いに出されるのは恥ずかしいよー。
てか、一般の日本人なら皆、ああだよー。

新堂君が焦ったように言う。

「いや！ 普通ですよ、俺は！」

俺もだよ。

お、ゲニーも挨拶をするようだ。

…………… ああ、読めるな。先の展開。

「私は偉大なる魔陣師であり、上位の魔術師でもある。ブーゼ・ゲニー様だ！ 気軽にブーゼ様と呼べ」

はいやつぱりー。

大体予想通り…………… っていうか俺のときとほとんど同じだし。

「……………」

ほら見る、新堂君ポカンとしちゃってんじゃん。

そりゃ、リッターさんのキチツとした挨拶見た後だもの、当然の反応だよ。

「ちょっと、あなた！ いくらなんでも失礼すぎるわ！！ 勇者様に対してでもそうだけど、普通の人にもそんな風に言ってるの！？」
あーあ、アンジュさん怒り出した。

てか、多分普通の人にもそういう風に言ってますよ。
俺もそうだったし。

言葉を失う新堂君と怒り狂うアンジュさんに王様がフォローを出した。

「…………… うむ、そやつの言うことはあまり真剣に受け取ることには無い…………… ある程度受け流してくれ」

「は、はあ……………」

「なんなの？ あいつ」

そうか、王様もそうしてるのか。

「コホン！ さあ、気を取り直して話を進めよう！ 勇者殿には今から一ヶ月、この城で訓練を重ねてもらおう！」

「はい！」

「頼もしい限りだ。この城の者は勇者殿の協力は惜しまん！ 存分に強くなるといい」

「はい！」

……そろそろ発言しないとまずいかな？

「王様」

「む？ どうしたリユーヤ殿」

今まで発言する事がなかったせいか、俺が口を開いた瞬間、皆が静まり返った。

は、話しづらくなった……。

ふー……よし、落ち着け。

「王様、俺は勇者が修行している一ヶ月間、少し旅に出たいと思っています」

「ほう……？」

王様は俺に訝しげな目線を送ってきたが、それを無視して話を進める。

旅に出る名目はこの二ヶ月である程度考えてきてる。

「この城で魔術の訓練をして、ある程度の实力は付いたと自負して

おります。ですがそれが実際にどこまで通用するものなのか、自身わかってません」

「ふむ……確かにな………」

「また、この城から出る機会がなかったせいか、常識に関しては知識しか無いです。これでは実際に魔王討伐のたびに出る際、苦勞するでしょう。そしてそれは他の国をめぐる際にも必要になってくること」

「それで、旅に出る、と」

「はい。一ヶ月を目途に帰ってくるつもりです」

俺の言葉に王様が考え込んでいる。

……いけそうか？

「う……む。ゲニー、お前はどっ思っ」

ゲニーに話が振られた。

「ふん……。旅自体には問題は無いだろう。だが、リユーヤは剣術などは一切学んできていない。仮に従者であるカバリオ・セルフを連れて行ったとしても、どちらも近距離戦には向いていないが」

「そう、だな………」

あーまずいな、そこ抜けてた。

くそ、どうして二ヶ月の間にそんな簡単な事が浮かばなかったんだ。

そんな俺の考えを察したのか、隣で黙ってた樹がボソッと「詰め、甘い」と言った。

くそう、そうですよ。昔からすっかり考えこまれててもたまにどっか抜けちまいますよ、俺の考えは。

どうしようか考えていると、意外なところから援護が入った。
「ならば、スクードを護衛につければいいのでは？」

リッターさんだ。

「ほう、リッター。護衛というのは私も考えたが、何故スクードなのだ？」

王様が問いかけた。

それにしても王様、まるでスクードが誰だかわかってるかのよう
に話すな。

……まさか、覚えてるのか？ 騎士全員の顔と名前。

「はっ！ スクードは以前、リユーヤ様に命を救われてから、彼を
守ろうと必死に訓練を重ねております。リユーヤ様とも交流がある
ようなので、適任かと」

「なるほど、リユーヤ殿、それでもいいか？」

「はい、大丈夫です。元より一人で行くのは無理だと思っております
した」

ええ、嘘です。

「そうか。ならばいつ旅立つ」

「はい、準備が出来次第ですので、はっきりとはわかりませんが、
早くて二日後、遅くても五日後には旅立つつもりです」

「そうか、では「王様、少しよろしいですか？」……ふむ、貴殿は

……」

王様が許可をくれる直前、何故か樹が口を挟んだ。

「はい、僕は勇者様を召喚する際、巻き込まれて召喚された、蒼井樹と申します。王様、僕からも折り入ってご相談が……」

「ふむ、イツキ殿、相談とは？」

おいおい、何するつもりなんだ……？

四十三話（後書き）

感想お待ちします。

四十四話 (前書き)

リッターさん視点です。

四十四話

「ふむ、イツキ殿、相談とは？」

国王様が巻き込まれたという少女、アオイ・イツキ様に尋ねた。

彼女は本当に巻き込まれたただけというだけらしく、感じる魔力は限りなく少ない。

今まで訪れた異世界人は皆、魔力が高く高い能力を兼ね備えていたそうなのだが……今のところ愛らしい容姿以外は特に秀でていると思わせるものは感じられなかった。

いや、記録上、女性が召喚されたのは今回が初めてなのだ。

どんな事があっても不思議は無い。

「はい。僕も彼の旅に同行させてもらえないでしょうか」

彼女の言葉に私はもちろん、国王様もシンドー様も、さらにはリユー様まで驚いていた。

サント様は怪訝そうな顔を浮かべ、ブーゼ様は相変わらず表情を変えずに状況をうかがっていた。

そんな我々を気にも留めず、彼女は話を進めていく。

「僕は巻き込まれただけで、魔王討伐に役立てることは特に思いません……。ですが、今まで異世界からやってきた人たちは皆、何らかの力を持っていたのではありませんか？ では、もしかしたら僕にも何かが宿っており、それがまだ何かわかっていないだけか

もしれない……！ 彼と共に旅に出て、共に苦難を乗り越えることで、僕も成長し、お役に立てる事があるかもしれません」

必死な表情で懇願するアオイ様。

そして少しの沈黙の後、彼女は自分が役に立てそうに無いことを悔やむかのように、顔を伏せた。

正直、共に旅に出る理由としては、あまり理に適っているとはいづらい。

だが、どうかこの国の……いや、もしかしたらリユーヤ様の役に立とうと必死なイツキ様の姿に、自分は心を打たれた。

ブーゼ様が何か発言しようとしていたが、自分はその前に口を開いた。

「国王様……！ 彼女の動向も認めてあげてはもらえませんかでしょうか？ 旅に出る理由としては少し弱いと思いますが、確かな意思を感じます。それにリユーヤ様も愛する者と共にいることで、士気が高まるのではありませんか」

「ちよっ……！ ——っ！」

リユーヤ様が何かを言おうとしたが、何故かすぐに口を閉じた。

そして国王様は、チラリとリユーヤ様に目を向け、「ふむ、確かにそれも一理ある。ゲニー、どう思う」

ブーゼ様に話を振られた。

ブーゼ様はなにやら思案顔で考え込み、ゆっくりと口を開いた。

「私は正直、反対だな。リユーヤはここで二ヶ月、一般常識なども習い、魔術も習ってきた。外に出る分には何の問題も無い。だがこの女、イツキ、と言ったな。彼女は召喚されたばかりで何も知らず、今のところ力も無い。それではただの足手まといにしかならないではないか」

「ふむ」

「それに、愛する者で士気が上がるというならば、この城に居てもらい、安全を確立しておくべきではないか？　そうしておけば仮にリユーヤが怖気づいたとしても、逃げることは無い」

「——っ！……！　ブーゼ様……！　それでは人質じゃないですか……！　そんな非道な事は絶対にさせません……！　それにリユーヤ様は怖気づいて逃げるような方ではありません……！　スクードを救うために魔力の放出をする魔族の前に立ちはだかつたぐらいです……！」

なんてことを言う人だ……！　この人は……！

……いや、これがこの人……皆が忌み嫌う最悪の天才……。

国王様は我々の意見を聞き、静かに考え込んだ。

「……………リユーヤ殿はどうしたい。ゲニーの言い方は最悪だが、言ってる事は正しいと私は思う。危険になるかもしれない旅に、足手まといになる人材を連れて行くつもりか？」

その言葉に自分は、リユーヤ様の方を向くと、リユーヤ様は、他人事のような顔をしていた。

「……俺の意思は関係無いんですけどね……。まあ、連れてきますよ。こいつがいると気は楽ですし、どうせ足手まといにはなりませんよ」

どういう事だ……？

ここにいるほぼ全員が、疑問符を浮かべていた。

国王様が代表して尋ねる。

「む？ 意思は関係無い……？ それに足手まといにはならない、だと？ それは何故だ？」

「あー……勘です。それに俺が守りますんで。あ、それと意思が関係無いってのは気にしないで下さい」

しかし返ってきたのは、どうもはつきりしない答え。

………なんだと言うのだ……？

「リユーヤ殿、守るといっても限界があるのでは？ それに勘と言われても納得は出来ないが……」

国王様が苦言を漏らしていると、リユーヤ様はそれを遮るように口を開いた。

「前みたいなきともありましたしね。正直、この城が安全って言う認識は俺には無いですよ」

その言葉に勇者様やサント様は不思議そうな顔をしていたが、国王様と自分は顔を歪めていた。

恐らくリユーヤ様が言っているのは、以前の暗殺未遂の件だろう。確かにあの時は、リユーヤ様が自分で対処しなければいけない事態だった。

解決したと思っていたが、やはりリユーヤ様の中には、猜疑心が生まれてしまっていたのか……。

「とにかく、そういう事なんで、樹を連れてく事に異論はありませんよ」

「……わかった」

ああいう風に言われてしまえば、国王様も納得するしかないようだった。

とは言え、これでアオイ様の希望を叶えることにはなりそうだ。

しかしその間、ブーゼ様は表情を変えずに何かを考え込んでいた。

その様子をチラリと確認したりリユーヤ様は、
「俺たちはもう必要なさそうですよね。いろいろ準備もありますので、お先に失礼しても？」

と国王様に尋ねた。

「……………うむ、構わん」

確かに残っているのは、勇者様に色々学んでもらうための準備だけだった。

一般常識などを教えるのは、サント様が、自分とブーゼ様は勇者様が教えを乞いに来たとき、率先して指導する手筈になっている。

国王様のその言葉に、リユーヤ様とアオイ様は一礼をして、

「では、失礼します」

「失礼します」

二人は王室を後にした。

四十四話 (後書き)

感想いただけたらうれしいです。

四十五話

「……どういっつもりなんだ？」

王室を出て、少し歩いたところで俺は樹に尋ねた。

「何がだい？ 僕にはよくわからないな」

「旅についてくるってどういっつもりかって聞いてんの！」

樹は不思議そうな顔を作って、俺を見つめた。

「惚けたって無駄なのはわかってんだろう。お前の演技ぐらいは見抜けるぞ。へったくそなんだよ、お前」

「ヒドイな……あの騎士っぽい人には通じたんだけど」

そうだ、あの時リッターさんは樹の言葉でやたら感銘を受けていたようだった。

必死そうに見せた顔や辛そうに俯いて見せたことで見事に引っかけってしまったんだろう。

「そりゃ？ 何にも知らないからな。でも一日ぐらい一緒にいれば誰でもわかるぞ」

「そんな事無いと思うけど？ 大体、君は僕の演技が下手だと言うけど、今まで君以外にバレたことはほとんど無いんだよ」

「まあ、それはいいや。それよりも？ 何でついてくるとか言った？」

「なんだ、つれないな。もう少し喜ばたまえ。旅に僕がついてくるんだよ？ それに君も僕がついてくることが異論は無いって言った

だろう？ それと……守ってくれるとも」

「ちゃんと聞いてなかったのか？ 俺の意思は関係無いとも言ったはずだ。どうせ誰がどう足掻いたって、最終的には一緒に旅に出ることは決定してたはずだ」

あの時、王様はゲニーの意見を正しいと判断し、俺に樹の同行を止めさせようと考えてたはず。

でも、こいつがそれを予測して無いはずが無い。

多分、あの後も全員を納得させるような策でも考えてたんだろう。

だから俺は、これ以上話を長引かせるのは無駄だと思い、話を押し進めた。

「まあね。でも、君が適当に機転を利かせてくれたおかげで、話が早く済んでよかったよ」

「……………ほんとにね」

……………それも、樹にはバレてたようだが。

「まあいいや。それより、リッターさんが言ってた、愛する者みんなの戯言、何で否定させてくれなかった」

思い出したので、確認を取る。

あの時、リッターさんが言った言葉をはっきり否定するつもりだったのだが、横で樹にものすごく睨まれた。

要は、そのままにしておけ、と言うことなのだろうか……………。

「ああ、大した理由は無いけど、あんな感じの誤解を作っておくと、今後色々楽になるからね」

「……今後？」

「今はとりあえず忘れていたまえ」

「……………」

なにを考えてるのかまったくわからんな。

つか、なんか顔赤くね？

「それに、あんなのは今にはじまった事ではないよ」

「あん？ どゆことだ？」

「だから、前から僕は、君と恋人同士だと言ってるから」

「はい！？ なんだそりゃ！？」

サラッととんでもない発言をしゃがった。

俺はそんな話はまったく聞いて無いし、見に覚えも無い！

「君とは幼馴染で、大体いつも一緒にいたから、よく「付き合ってるの？」と聞かれる事が多くて。最初はちゃんと親友だと言ってたけど、そしたら告白とかしつこくて、面倒だったんだ。で、途中から、僕は日野龍也と付き合ってる、と噂を流したのさ。そしたら言い寄ってくる人間が激減してね」

「お、お前がそのスペックの割には浮いた話を聞かないと思ってたが……そのせいかな！ ……そういえば、一時期何故か、必要以上に接触してきたような気も……」

「ああ、あれのおかげで周りの人間には、僕と龍也が付き合ってい

ると誤認させる事が出来たよ」

なん、だと……！ あんなのは子供の頃からよくある事だったから、気にしてなかったんだが。

そういえばたまに理由もなくクラスの連中に頭を叩かれる事があった……まさか、そのせいか……！

「つく……！ つまりあれか、お前のせいで俺は彼女が出来なかったのか！」

「いや、それはどうだろう？ 元々君に魅力がなかったからとかかもしれないじゃないか」

「うつ……」

そ、それはひどい……。

俺が心にダメージを負っていると、樹は満面の笑みで言った。

「まあ、考えてもみたまえ。世間から見たら君は、僕みたいなかわいい子と付き合ってる勝ち組だよ？」

……………。

「はっ！ 自分で言うな自分で。確かに容姿がいいのは認めるが、今更お前を女で見るとは難しいだろ。だから例え抱きつかれたとしても意識したりしなかったし。どっかで男同士で肩組むぐらいでしか考えてなかったわ」

大体その自覚はまったくなかったわ……！

「……うんまあ、君は……そうだろうね。でも、だからこそ君は、周りに勘違いされてることに気づかなかったわけだけど。だって変に意識して、抵抗してたらバレてたからね、周りに」

「ううっ！」

なるほど……こいつは俺が変に抵抗したりしないのを見越して、利用してたわけか。

鬼め！

「とにかく、今はこのまま周りを誤解させておきたい。協力したまえ」

……つまりあれか？ こっちの世界でも俺は彼女は出来なくなると。

若干、凹みつつ樹を見ると、真剣な目でこちらを見つめていた。ってことは、本当に必要なことなんだろうか……。

「……………わーっ たよ」

「わかってくれて光栄だよ。とりあえず部屋に戻ったら、この世界について君の知ってること全てを教えてもらおうじゃないか」

「……………面倒くさ」

足取り重く、部屋に戻る。

四十五話（後書き）

感想お待ちします！

四十六話

(前書き)

第三者視点です

四十六話

創一へのあらかたの説明を終え、創一とアンジュは王室を後にする。

「では、失礼します」

「失礼します」

そしてゲニーも王に一度目線を送り、無言で去っていった。

残ったのは国王と護衛であるリッターのみ。

そのリッターも一言挨拶をし、部屋を出ようとしたが、その前に国王に声をかけられた。

「リッター。お前はと思う」

「は、何がでしょうか」

広すぎる範囲の質問にリッターは少し困惑しながら返す。

「色々あるが……今一番尋ねたいのは、旅に出ると言ったリユーヤ殿に、巻き込まれたと言うイツキ殿のことだ」

「……国王様はリユーヤ様が旅に出ることは反対なのですか？」

「正直に言っと、昔カズヤ殿がいなくなったときに言われた事なだけあってな」

「あのヤマノ・カズヤ様ですか。……まさか、国王様はブーゼ様が言ったように、リユーヤ様が逃げる可能性があるとお考えですか？」

リッターがそう言っと、国王は僅かに表情を固くした。

「それは無い、と信じたいが……今日の口ぶりだと、やはり我々の信用は足りて無い様に思う」

「確かにそれはそうですが……それでもリユーヤ様は逃げ出すような方ではないと思います」

「ふむ、まあ、スクードも一緒なのはわかっているからさほど心配はしていないのだが……イツキ殿は」

国王はゲニーが反対していたことを思い出し、少し頭を悩ませる。

そんな国王の考えを察したのか、リッターが尋ねた。

「失礼ながらお尋ねいたします。国王様は何故ブーゼ様のお言葉をそのまま実行されようと？」

尋ねられた国王は驚いた表情を見せた。

「私がゲニーの言葉通りに動いているように見えただか」

「失礼ながら」

リッターの言葉に国王は考え、

「ふむ……お前にならいいだろう。少し奴のことを話そう」と、言った。

「ブーゼ様のこと、ですか？」

「ああ。そもそもリッターよ。いくら私とゲニーが旧知の仲だと言つて、ゲニーが簡単に国のために手を貸すような男に見えるか？」

「……………いえ」

「だろうな。実際今まで幾度か国のために手を貸してくれと頼みに

行った事がある。……だが、今まで一度も了承してくれることはなかったがな」

「ブーゼ様が今までは断っていたのですか？」

「そうだ。そして私は理由もわかっている」

「それは一体……？」

「面白くもなんと無い、予想できることだったからだ」

その言葉にリッターは疑問符を頭に浮かべる。

だが国王はそのまま話を続ける。

「ゲニーは天才だ。そしてその天才は常に新しい知識を欲していた。奴は望むままに知識を溜め込んでいき、とうとう知らぬことがほとんど無くなってしまった」

「……………それは」

「そうだ。一般的にそれは悪いことではない。むしろそれを望む者のほうが多いだろう。だがゲニーは面白くなかった。ありすぎる知識のせいで、どんな出来事でも、次に何が起こるかの予測がついてしまっただ」

リッターは国王の言葉を聞いて、頭の中で纏め、驚愕で目を丸くした。

「…………それはつまり、世の中の何もかもが自分の予想通りになってしまう、と…………」

「何もかも、と言うわけではないが、大体そういうことだ。いくら私が助けを求めても、奴はそれが私だけでも解決できることだとわかっていて、何の面白みも無いことだから、手を貸してはくれな

ったと言つことだな」

そして少しの沈黙があり、

「……では、何故今回ブーゼ様は、勇者召喚に手を貸していただけたのですか……？」

と静かに尋ねた。

「恐らく、魔王の存在は、奴が予想出来なかった事柄なのだろう」

「予想、出来なかった……？」

「ああ、そもそも勇者召喚についてはゲニーから話を持ちかけてきたのだ」

「ブーゼ様が！？」

それはリッターが予想していなかったことだった。

「奴は楽しそうな笑みを浮かべ、その時まだ誰も仕入れていなかった魔王確認の情報を私に伝えてきた。そして魔王を倒すには勇者を呼ぶしかない」と

「それで、ブーゼ様に研究室を与え、勇者召喚の魔陣を創らせたのですか」

「そうだ。……私はゲニーが何を考えているのかまったくわからんが、ゲニーの言うとおりになれば魔王を倒す事が出来ると考えている」

「それで、事あるごとにブーゼ様と相談を……」

国王はその言葉に苦笑いを漏らす。

「やはりそう見えるか。事実そうなのだが、さすがに国王の威厳も

あつたものじゃないな」

「い、いえ！ そんなことは！」

「いいんだ。私がやるべきはこの国を守ること。その為にならゲニ
ーにいい様に使われようとかわまん」

「国王様……」

話が一段落した後、リッターがふと思いついた疑問を口に出した。

「しかし、正直信じがたい話です。ブーゼ様の予想通り進んでいる
と国王様は仰りましたが、自分は幾度かブーゼ様が驚かれる様子を見
ています。それにリユーヤ様が来てからも、未だ何かの研究を続
けているようです。召喚魔陣が完成したのなら、すでに目的は達せ
られたのでは？」

国王はその質問を受けて、頭をかき答えた。

「奴が『天才変人』や『最悪の天才』などと呼ばれているのは知っ
てるな」

「……はっ」

リッターは自分も心の中でそう呼んでいた事もあり、少し後ろめ
たさがあった。

だが国王はそんなリッターを気にもせず話を続ける。

「ゲニーがそう呼ばれている由縁はそこにある。奴は他人の行動を
予想出来たとしても、わざと知らぬ振りで驚き、影では密かにその
行動を潰すために動く。そして最後に相手のしてきたことを全て無

駄にして嘲笑う。だからゲニーの態度だけで物事を判断するのは止めておけ。その今行なってる研究も、どうせ誰かを陥れるためのものだろう」

ただ、リユーヤ殿が来てからのいくつかは、本当にゲニーの予想を覆されたこともあるのだろうか。

と、国王は内心考えていた。

「……………」

聞かされた話にリッターは無言で顔をしかめる。

そんなリッターを見て国王は簡単に纏める。

「簡単に言つとあいつの性格が最悪なだけだな」

四十六話

(後書き)

今回はゲニーという変人の話です。
若干読みづらかったかと思います。

感想頂けたらうれしいです。

四十七話

部屋に着くと、レイさんがそこにいた。
見たところちょうど掃除が終わったところのようだ。

「あ、リユーヤさん。お帰りなさい……え、っと、こちらの方が勇者様、ですか？」

ん……？ あ、そうか、あそこにいたのは必要最小限の騎士と国の重鎮、そして少しの客人だけだったから、メイドさんたちは勇者について何も知らないのか。

「いや、こいつは……」初めまして、蒼井樹と言います。残念ながら僕は勇者じゃないです。たまたま近くにいて巻き込まれた一般人……って所ですね」……だよ」

「そう、なんですか……？ えっと、もしかしてアオイ様はリユーヤさんとお知り合いなんですか？」

「ええ、そうですよ。僕は二ヶ月前から行方不明だった彼を捜している最中に巻き込まれたんです」

樹がそう言うと、レイさんは驚いた顔をしたが、すぐに冷静を保った。

「そうでしたか。では私はこれで失礼いたします。ごゆっくり」
そして変な気を使ったのか、そそくさと部屋を出て行こうとした。

俺は止めようとしたが、その前に樹が言葉を発していた。

「あ、待ってもらっていいですか？」

「はい。いかがなさいましたか？」

レイさんはキッチンと礼儀正しく、出来るメイドの立ち振る舞いをしていた。

俺に対してはフランクだったが気づかなかったが、他の人相手では凄腕のメイドさんなんだな。

「龍也に対して名前で呼んで、僕は苗字のしかも様付けなんて慣れないよ。僕も龍也と同じ様に呼んでくれないか？ 所詮僕は巻き込まれたただだから客人ですらないし」

「いえ！ 巻き込まただけでも、異世界からの来訪者の方。立派なこの国のお客様です。わかりました。ではイツキさん、とお呼びいたします」

「うん、そうしてくれるとうれしい」

「はい。申し遅れました、私はリユーヤさんの専属メイドをさせてもらっています。ヘンティル・レイです。よろしく願いいたします」

「専属……？ ……うん、よろしくレイ」

いきなり呼び捨てかい。

「それじゃあ、龍也。さつきも言ったけど、ここの常識を教えてもらえるかい？」

「んー、いいけど……俺は説明なんかうまく出来ないんだが……あ、レイさんも教えるの手伝ってもらってもいい？」

部屋を出ようとしていたレイさん呼び止める形になってしまったが、正直俺だけじゃうまく教えられる自信は無い。

でも、当のレイさんは戸惑い気味だ。

「えっと、リユーヤさん……私が居てはお邪魔じゃ……？」

ん？ ……お邪魔？

「何が邪魔なのかよくわからないけど……邪魔なわけ無いよ。なあ？」

そう樹に問いかけると、何故か一度睨まれた。
そしてすぐに笑顔になって、

「ええ、もちろん。龍也^{こた}だけじゃ、ちゃんと説明になるか不安なん
で」

とレイさんに頼んでいた。

これで……。

てか、何で俺今睨まれたんだ……？

「……はい、ではご一緒させていただきます」

レイさんには俺が睨まれてるところは見られてなかったのか、笑顔で応じてくれた。

そして、数分後。

「うん、大体わかったよ。ありがとうレイ」

樹はあらかたの説明を黙って聞き、最後にそう言った。

「え……？ よ、よろしいのですか？ 今のだけじゃ……」

レイさんが恐ろしく戸惑っている。

確かにそう言いたい気持ちもわかる。

今のはほんとに大雑把に、そして簡単に説明しただけだ。あれだけなら俺じゃ、まったくわからん。

が、樹がそれでいいと言うならいいんだろう。

とりあえず、レイさんがどうすべきか悩んでるからフォローぐらい入れとかないと。

「レイさん、俺からもありがとう。何かもう大丈夫みたい。まあ、もし何かあったら、俺が随時教えてくから」

「え、ええ？ リューヤさんまで？ あれだけじゃほとんどわからないですよ……」

「大丈夫さ、レイ。僕を信じたまえ」

レイさんの言葉に樹がニツと笑ってそう言った。

いやいや、信じるも何も、会ったばかりで何を言っとるか。

「は、はあ」

レイさんは頭に疑問符を浮かべながらも、一応納得したようだ。

「じゃ、じゃあ、私はこれで……」

「あ、わざわざ残ってもらったのにゴメン。こんな簡単に説明が終わるとは俺も思ってたから」

「龍也。君は僕をもつと称えたまえ。彼女を呼び止めては迷惑だと判断して、たったあれだけで話を理解した僕を」

「ほんと、ありがとうレイさん」

俺は樹を無視してレイさんにお礼を言った。

こいつを調子に乗らせてはいかん。

「ふむ、無視か。覚えていたまえ、龍也。……レイ、時間をとらせてすまなかった。それとありがとう」

「いえ、大丈夫です。……では」

そう言っただけでレイさんは出て行くとする。

さて、この後は……旅に出る準備か……？
まずは……。

「……………レイ、もう少し待ってもらってだいじょうぶか？」
「え？」

どうしようか考えている俺をチラリと確認して、樹はまたもレイさんを呼び止めた。

「龍也は何も考えず王様に旅に出ると言ってしまったようだ。この城を出た後のアドバイスを貰いたい」

無計画がバレた！！

「えー？ た、旅ですか！？ なんて……！？」

あ、そっか、まだ誰にも言っただけだった。

ってじゃあ、あいつらも知らないのか。

「あー、言っでなくてすみません……。色々あるんですけど……と
りあえず同行者になると思う、セルフとスクード呼んでもらってい
いですか？」

あいつらがいないことには話が進まないだろう。

すっかり忘れてたけど。

四十七話（後書き）

皆様にはこの三人の会話はとう見えたでしょう……？

感想お待ちします。

四十八話（前書き）

えー、途中は完全に趣味です。

「訳わからん」とか思った場合は、途中まで読み飛ばしてもらって大丈夫です！

四十八話

勇者召喚から二日。

あの日、俺と樹に、セルフとスクードを交え、旅の準備を着々と整えていき、後はもう出発するだけとなっていた。

ちなみに、この二日間樹は俺の部屋で過ごしていた。
間違いない？ ドキドキハプニング？ ある訳なかるうに。

師匠との修行はいつも通り行なわれた。

気配を消して修行場に向かっていたが、どうしても樹にバレているような気がしてならない。

気配を消す修行は一段と気合を入れて取り組んだから、心配は無いはずなのだが……。

なんか樹に対して劣等感持ち過ぎかも、俺。

そして今、部屋の中で睨みあう二人。
前にいる奴が向かい合う俺に告げる。

「龍也……！ 消すよ……！！ この世から……ッ……！」

怒りを隠さない相手を見て、俺は言う。

「やるのか？ この日野龍也と。……………堕とすぜ、この世から」
俺は指をゴキイと鳴らし、そしてまた睨みあう。

少しの沈黙の後。

「え……っと、二人とも何やってるだ？」

少し前に部屋に入って、黙ってこのやり取りを見ていた、勇者である新堂君が恐る恐る口を開いた。

俺と樹は一旦、睨みあうのを止める。

「ああ、暇だったから、ちょっとしたごっこ遊びを、この世界の二ユアンスを取り入れて」

「ちなみに、僕がヨ○さんと龍也がブレ○クさんだね」

「高校生にもなって二人で何やってるんだい……。しかもやってる内容は結構マニアック……」

「お、何やってるのかはわかるのか。うん、友達になれそうだ」

「そうだね。クラスみんなは誰もピンと来てなかったし」

学校でもたまに、唐突に設定作って、演劇風にごっこ遊びをやったなあ。

クラスの奴らも最初は引いたり、呆れたりしてたけど、慣れてきたら、即興で参加してきたもんだ。

……………てか、あれを見てた上で、俺と樹が付き合ってるって思ったのは、逆にすごいな。

「龍也、続きと行こう」

「お？ おお」

「まだやるんだ……」

新堂君、若干呆れ気味。

「新堂創一か。どいてな。危ねえぜ」

「あ、俺も勝手に参加させられてる」

と新堂君が呟いたが、安心しろ。セリフは無い。

「安心しろ俺は魔術は使わねえ。ってか簡単には使えねえしな」
「……嘗め……てんの……？」

俺は気合を入れるポーズをとり、
「格^{ランク}の違いを見せてやるぜ!!」
と叫んだ。

そして樹は、

「……………マ「あ、そうだった。さっきブーゼさんに日野さんと呼んで来るよう頼まれたんだけど」……………」

おいおい新堂君。いいところで止めるから、樹が不機嫌になっ
てんじゃん。

「って、ゲニーが？……………何の用だろうか……………」
嫌な予感……………するなあ……………。

でも、この場合は行くしか無いだろうな……………。

「にしても、勇者をパシリに使うとは……………そこら辺がゲニーだな」

「あの人、ブーゼ・ゲニーだったけ？ 僕はまだ二、三度しか顔を
合わせてないからどう言う人間か、よくわからないのだけど」
「俺も。なんかすごい偉い人っぽかったけど」

俺はゲニーの説明を求められたので、簡単に言った。

「単純に性格の悪い、変人の天才」

「はい？」

二人が声を揃えながら、首を傾げた。

「あいつは、ほとんどの人に嫌われてるくらいほんとに最悪だからー。でも、実力だけはあつて、王様に頼られてるから、下手なことと言えない。俺の時だって、勇者召喚の練習で、召喚して、しかもそのことに対してまったく悪いことだと思つて無いし」

俺の言葉を聞いた樹が眉をひそめ、言った。

「ちよつと待つて龍也。今なんと言つた？」

「あん？ ああ、言つてなかったか。俺は勇者様、つまりは新堂君を召喚する為の魔陣の、練習台で召喚されたんだ」

二人の目が大きく見開かれた。

少しの沈黙の後、新堂君が恐る恐る尋ねてきた。

「……えつと、それは本当に……？」

「嘘つく必要は無いだろ」

俺の言葉に複雑そうな表情をする新堂君。

もしかしたら、勇者として召喚されたことに、俺が犠牲になったとか勝手に思い込んでるのかもしれないなあ。

人がよさそうだし。

新堂君のフォローのために、俺は言葉を付け加える。

「まあ、絶対いつか一泡吹かせてやるからいいけど」

すると、今まで黙っていた樹が突然笑い出した。

「くつくつく、その思考は龍也らしくないな。珍しい、そんなに怒ったのか」

「だからその笑い方止めろって。……怒ったっていうか、あいつと話してたら俺の気持ちもわかるよ」

「そんなに嫌いなのかー、面白いな。あ、それと、笑い方は君がもつと女の子らしい笑い方がいいと言っなら考えとくよ」

「女の子らしいかどうかは置いてても、その笑い方は何か似合っていないわ。……まあ、呼んでるらしいから、ちと行ってくるわ」

「ああ、行ってきたまえ。僕は少し創一と話してるよ」

「あれ！？ 俺の予定も決定されている！？ ……特にこの後、用があるわけじゃないからいいけど……」

うむ、新堂君よ。樹の相手を頼んだ！

「さて………ゲニーの用事は俺にとって、悪いことが、最悪なことが」

とりあえずは、良いことじゃないと思う。

四十八話（後書き）

すみませんっしたっ!!

一回こういう事やってみただけです。

……てか、内容をこの世界観にあわせて、多少変えただけで、セリフは元ネタとほとんど変わらないですけど、大丈夫なんですかね……？

四十九話

「……ゲニー、来たぞ」

もう二度と来たくはなかった研究室の前でゲニーを呼ぶ。

「ふむ、入れ」

すると、偉そうな返事が返ってきた。

「へいへい」

言われるまま俺が部屋に足を踏み入れると、前に俺が召喚されたときとまったく変わった様子はなかった。

ん、……………。

「早速だが、リユーヤ。貴様、そろそろ行くつもりだろう」

「ああ、今日明日中には出るよ」

隠すことでも無い。

「そうか……………」

そう言ってゲニーは顔を伏せた。

普通なら旅に出る人間を気遣う態度にも見えるだろうが、そんなわけは無い。

「……………」

俺は黙って次の言葉を待つ。

そして、ゲニーは勢いよく顔を上げ、

「ならばリユーヤ。旅に出た後一度、人型魔族と戦って来い」
「はあ!？」

いきなり妙な命令をしてきた。

「と言っても、すぐにソンプルミールに行つてこいと言つわけじゃない。ここより東にある神殿のさらに奥にそびえる高山がある。不確定な情報ではあるが、その中腹に人型が生息していると言つのがあつた。だが、私の調べだとほぼ間違いなくいるだろう。そいつを倒して来い」

「てめえはいきなりなにを言い出す!」

「何度も言わせるな。旅に出るならついでに人型魔族も倒せと言つた」

「何故に!？」

俺の疑問は真顔で返された。

「決まっているだろう。今のところ勇者のパーティに人型との戦闘経験があるものはいない。と言つより、今の時代ほとんど戦つた事があるものはいないだろう。……だからこそ、貴様が戦闘を経験して、勇者の助けになれば、勇者も魔王との戦いが、一層楽になるだろう!」

「つまりお前の考えは、あれか……? 異世界からの来訪者と人型魔族が戦つとどうなるかを、事前に確かめたい、か……?」

「ふむ、その考えにすぐ辿りつくのか。なかなかやるな」

「――ことは、」

「また俺で試すのか？！！！！！！！！」

召喚は予行練習で試され、今度は人型との戦闘を試すだ……！

「断る！！！！」

「何故断る？ リューヤ、貴様私の役に立ちたくは無いか？」

「無いわ！！！！ あるわけあるか！！」

「とにかくそんな面倒なことはしない。俺は俺の目的のために動く」
「……ふん、帰還の方法を探すといったところだろうが、恐らく無駄だ。ヤマノ・カズヤの動向は私でも掴む事が出来なかった」

「……っち！ 予想はしてたけど、やっぱりこいつにはバレてたか」
「だが、掴めて無いからこそ、ヤマノカズヤが自分で元の世界に帰った可能性もある」

「……なるほど、そういう考え方もあるか。だが、そんな不確定な可能性に賭けるより、私が帰還の魔陣式を完成させるのを大人しく待ったらどうだ？ 今回、貴様に人型討伐を命じたのは何も戦闘を経験させるためだけじゃない。人型を倒し、その骨を持って帰って

くれば、帰還魔陣の完成が進むと思ってだな」

ゲニーがまだ何かを言おうとしていたが、俺はそれを遮った。

「とにかく、俺は自分で帰る方法を探す」

「……………そうか。まあ、やってみるといい」

ゲニーはそう言い、楽しそうに笑っていた。

その姿に苛立ちを覚えた俺は少し声を荒げた。

「何で笑って」「ふははは、いや何、貴様ら異世界人は本当に楽しませてくれると思ってな!」……………」

俺は未だ笑い続けるゲニーに背を向け、部屋を出る。

「何なんだ、一体……………」

俺の呟きに答えるもの、いない。

四十九話（後書き）

えー、この話にて、ちょい短いですが、第二章は終わりです！

この後、各メンバーの視点の話の後、第三章の龍也の旅の話に移りたいと思います。

ちなみに、各メンバーとは、樹、セルフ、スクード、師匠、後は話が思いついたら他数名です。（順不同で）

リクエストでもあったら話、考えてみるかもです。

もしかしたら、前のように、話作りに時間がかかるかもしれません！
んが、変わらぬ応援お願いします！！

五十話

(前書き)

樹視点です。

五十話

あの時、創一を見かけたのは偶然だった。
いや、もしかしたら必然だったのかもしれないな。

龍也が消えてから二ヶ月。

一向に所在がつかめず、警察も半ば諦めかけていると言った雰囲気。

それでも僕は探し続けていた。

とりあえず何か情報があるとしたら、彼の家しかない。

龍也が消えた後、僕は一度だけ彼の家に入った。そして、いないと確認した後は、すぐに心当たりをまわるために外へ出て以来、足を踏み入れていない。

その後、警察が調べたかぎりでは、何も見つからなかったらしいが、何か見落としがあるかもしれない。

そう思い、学校を出、足早に龍也宅に向かった。

その時、前で創一とその取り巻きが別れたのが見えた。

新堂創一とは、成績の事もあり、よく顔を合わせるのだが、その度周りの取り巻きが鬱陶しかったのを覚えている。

……そういえば、創一のバイト先は龍也の家の近くだったな。
僕は何かを知っているかもしれないと話しかけようとした。

しかし、その前に異変が起こった。

彼の足元に、突然黒い穴が出来たのだ。
創一は抗う暇なくその穴に落ちていく。

……僕がここから走っても、間に合わない。

そう思った瞬間、その黒い穴から、見知った気配を感じ取った。

！！——つ龍也！！！！

「——つ待ちたまえ！！！！」

その後、僕はなんにも考えずその穴に向かって走った。

そして……。

ふふふふつ、何はともあれ、僕は今ここにいる。龍也の近くに。

それで何も問題は無い。

さて、今さっき、龍也がブーゼ・ゲニーとやらの呼ばれて部屋を出て行った。

なら戦力外扱いで暇な僕は、勇者様の情報でも手に入れておくかな？

そう思っていると、創一のほうから声をかけてきた。

「えっと、蒼井さん？ さっきの口ぶりだと、何か話がありそうだったけど……」

「そうだね、創一。まずは勇者として召喚された感想を僕に教えてくれたまえ？」

「いや、感想って……正直、怖いよ。いきなり勇者に、とか。修行だ、とか」

その感想を僕は意外に思った。

「そうなんだ。その割には二つ返事で、魔王を倒して全ての国を救う、とか言っただけだったかい？」

「それは……やっぱり困ったり苦しんだりしている人を見捨てたり出来ないし……」

聖人君子の模範解答だね。

彼らしいと言えば、らしいが……。

「うーん、まあそれが創一、君のいい所であり、悪いところだね……とは言え、君が決めたことに僕がとやかく言うことは無いよ。それより、勇者様？ 君は一体どんなチート能力を手に入れたんだい？」

「へ？ ち、ちーと？ ……ああ、特には無いと思うんだけど……っていうか他の人を知らないし……」

「少なくとも龍也に関しては、魔力が多いことと多少身体能力が上がっているくらいだつて。あ、身体能力は秘密にしているみたいだから言わないであげてね？ それに比べて創一。君は異世界からの召喚に加え、神の加護と言う付加効果のある術を施されてると聞いた。そのあたり、どうなんだい？」

「どう……と言われても……俺もそれぐらいで……あ、そうだ、一
つ日野さんと違って、近くにいたブーゼさんが少し驚いてたのがあ
る！」

「それは？」

僕の問いに創一はニツコリ笑い、誰もいないほうに手をかざした。
すると、彼の手の平から光の矢が数発飛び出した。

「おお！」

「なんか光属性に限定されるけど、こういう事が出来るんだ。それ
に剣とかに光を纏わせて強化したりも出来るみたい」

「ふむ、龍也から聞いた魔術みたいだね。もっとも魔術は真文とや
らを理解して、その上で呪文を覚える必要があるみたいけど」

「うん、それはブーゼさんから聞いた。でも魔本つてのも借りて読
んでみたけど、真文とやらはまったくわかんない……。カタカナで
書いてあったからわかるかと思ったけど。あ、力力力ナ、だっけ」

確かこの世界では、そう伝わっていると聞いた。

多分、ヤマノカズヤとやらは滑舌がよくなかったんだね。

「龍也は必要な分だけ覚えたらしいよ。魔術」

「ってことは、真文を理解したって事？　すごいな、日野さん」

創一が龍也のことを褒めていた。

でも、魔本に書いてあったのはほんとにただの言葉遊びだよ。
少し柔軟性を持って見ればすぐにわかるだろうに。

まあ、多分龍也は、

「多分たまたま閃いただけだろうけどね」

僕の言葉に創一は驚いたように言った。

「……え、でも日野さんって、頭で考えながら行動するタイプじゃない？　今まで話した事なかったけど、最近の印象では……」

「龍也が？　考えて？　ブツ！　違うよ、彼はそうじゃない。彼は直感型、って言うか行動することで物事が成功するタイプだよ」

「そうなの……？」

「そうなのだよ。最近の龍也は僕に追いつくためーとか言って、色々考えながら行動してるみたいだけど、正直、向いてないんだよ。もちろん元々、割りと頭はいいほうだから、考えて行動とかも出来るけど、慣れてないから、単純な事が抜けたりもする。でも龍也は多分、無意識にやってたり、思ったとおり行動してるほうが、うまくいってるんじゃないかな？」

「そう、なんだ……」

「今回、旅に出るとか言うのも前から考えてたみたいだけど、色々抜けてるみたいだから、僕がフォローしなきゃね」

さて、創一の能力も見る事が出来たし、多分そろそろ龍也も帰ってくるんじゃないかな？

……………それよりも、これ、どう説明しようかな？

そんなことを悩んでいると、創一がおずおずと聞いてきた。

「え……っと、俺も聞きたいんだけど、蒼井さんは何かあるの……？ チートな能力……。だって同じ異世界から来て、しかも俺と同じ魔陣で召喚されてるんだし、蒼井さんにも、神の加護って……」

うーん、創一は頭はいいんだね、やつぱり。

龍也はそんな事思いもしなかっただろうし。

ま、言ってもいいかな？

「能力はほんとにわからないけど、魔力はあるよ？ 多分二人と同じぐらい……。いや、もつとかな？」

「え！？」

「おっと、誰にも言わないでね？ 僕は何もする気は無いから」
「で、でも、ブーゼさんは蒼井さんに魔力はほぼ無いって」

「だって、隠してるもん」

「へ？」

ああ、目がまんまる。

ちよっと面白い。

「召喚されてすぐ気づいたよ。自分の中に今までになかった力があるのを。そのままにしてたら巻き込まれそうだったから、自分で操作して、魔力を押し隠したんだ」

「ま、魔力を押し隠すって、そんなこと出来るの……？」

「いや、なんとなくやってみたら出来たから出来るんじゃない？」

それに多分強い人は魔力を垂れ流しにはしないでしょ、普通」

「ど、どうして、そんな事……」

「決まってるじゃないか………龍也に守ってもらったためだよ」

「へ………？」

「いやいや、創一、さつきから、ほぼ同じリアクションだよ？」

「おっと、どういう意味か教えてほしいそうだから、話してあげよう。聞きたまえ。」

「僕と龍也は結構、巻き込まれ体質でね？ 色んなことを二人で、何とかやり過ごしてきたんだけど、ふと思ったんだ。今まで一緒に頑張ってきたけど、守ってもらったのをしたこと無いって」

「も、もしかして、それで……？」

「そう。今の僕は無力な少女。多分龍也も何だかんだ言って助けてくれるに決まってる！！ 事実なんかある前に守るって王様に宣言もしてたしね…… 本音かどうかは置いといて」

「……うん、創一はポカーンとしてる。」

「無理はないかな？ 僕自身、無茶苦茶なこと言ってるのは自覚してるし。」

「創一、そんな訳で、誰にも言わないでくれたまえ。それと、呆けてる暇は無いよ？」

五十話

（後書き）

いかがでしたでしょうか！？
感想お待ちします！！

五十一話

(前書き)

師匠視点です。

五十一話

ここ最近はリユーの修行のために、この城に隠れて住んでいる。
ここの防護魔陣はバレずに突破するのは面倒だから。

城内の情報を集めていると、耳に入ってくる言葉がある。

勇者召喚。

ん、もうそんな時期か。

ではリユーの修行も仕上げかな。

それにしても勇者、か。

どんな者が現れるか……。

そして、

「それでは、ソーイチ殿……いや、勇者殿。改めてお願い申したい。
魔王を倒し、この国に平和をもたらしてはくれぬか」

この国の王が静かに頼む。

「はい。この国だけでなく、他の国も救って見せます！」
それを召喚された勇者、シンドー・ソーイチは受け入れる。

ふむ、なかなか好青年のよう。

ただ、どうも人が良すぎるところもありそうだが、まあ、私にそれは関係ない。

それにしても、勇者とは別に召喚されたと言つもう一人、少女。

彼女は何者……？

見たところリユーを慕っているようだが……何故か彼女は魔力を隠している。

今のところ誰も気づいていない……？

ふむ、もう少し近くで調べたいが、これ以上近づくと、あの王に私の存在が知られそう。

この国の王といい、武の国の王といい、実力のある王は相変わらず厄介な。

……まあ、今日の修行でリユーにでも聞いてみるか。

そしてその日の夜。

「さて、リユー。すでに勇者は召喚され、君も旅立つ事が決定した。そこで、今日の修行で仕上げとする」

「はい」

「……まあ、そう気構えることは無い。征眼術はそこまで上達しなかったが、気配を消すこと、そして察知することにおいては、文句のつけようが無い。……残ったのは、わかっているな……？」

「……………はい」

リユーの顔が面白いように、絶望に染まった。

まあ、今までの修行のせいなんだけど。

「ふふつ、だからそんなに気構えないでいいって。今日やつてもらうのは簡単。私に一撃を与えること」

「え！？ それって前やりませんでした？」

そう。一ヶ月ぐらい前に実力を試すのにやってみた。

「そのときは攻撃が掠ったのを特別に合格にただけ。今回はしっかり一撃、私に与えてもらう。そしてさらに、前はこの場でだったけど、今回は……この城全てが戦闘範囲だ。私は闇に紛れ、リユーから逃げ、そしてリユーを殺しに行く。リユーはこの城の誰にも見つからないように、私を探し、私の暗殺を逃れ、私に一撃を与える。……いい？」

「そ、そのどこが簡単なんですか……」

そんな泣き言は聞き入れないよ。

「さあ、最終試験だよ？」

うーん、大体一時間ぐらいか。

「合格、としておこうかな？ 暗殺者としては最後に正面突破は駄目だけど、一応ちゃんと私に一撃、与えたし」

それでもまだまだなレベルだけど、外でならそれなりにやれるんじゃないかな？

「……………」

「生きてる？」

「…………… なんとか」

「そう、なら大丈夫」

私は倒れてるリユーの近くに座り、話を始める。

「さて、君はまずどこに行くつもり？」

「え？」

「旅。最初の目的地」

「あーっと、まずは、ドイスバードですね。聞いた話だと情報もそこに集まりやすいみたいなんです」

「そう。でも君の目的は秘密のはずだけど、理由も無しに目的地をそこにして大丈夫？ 旅は確か数人で行く事になったはず」

商の国で何の情報を欲しているのかを知られたらまずいだろう。

「何で知ってるんですか……って、もしかしてあの場にいたんですか……。同行者には他の国のことを知るため、とか言ってるんで大丈夫です。それにドイスバラドの後にトロワナシオンにでも行けば、誤魔化せると思いますし」

「あそこは美の国だから、観光ってこと」

そして、ギルドの総本部もあるし。

もしかしたら、ヤマノ・カズヤの話でも聞けるかもしれないって事か。

なんとなくリユールの考えを察し、話を進める。

「同行者は、この国の騎士、ルグレ・スクード。君の従者扱いの力バリオ・セルフ。そして……君と勇者以外の異世界人、アオイ・イツキ、ね」

「ええ、それだけいけば多分何とかなると思いますけどね」

うーん、リユールの不幸度合いでは、どの国でも色々巻き込まれそうだけどね。

……………それにしても、

「騎士のルグレや、魔陣師のカバリオはわかるけど……アオイ・イツキは……」

「ああ、あれは昔なじみですからわかります。心配はしてません」

ふむ、私の言いたいことは彼女の心配ではないのだが。

「……………随分と信用しているようだが」

もしかして、魔力を隠していることを知っているの？

「んー……師匠なら言っても大丈夫ですね。あいつは元の世界では天才って呼ばれてたぐらいです。こっちではほぼ無力みたいですけど、絶対役立ちますよ」

どうやら、気づいてはいないよう。

まあ、とりあえずはリユウの味方であることに違いは無いから、大丈夫……か。

「リユウが大丈夫というなら、心配はしない。それと、私がリユウの師匠なのはさっきまで。今はもう卒業済み。通り名か……名前で呼んで？」

「え、名前で呼んでいいんですか？」

ああ、確かに言われて見れば確かにまずいな。

「じゃあ、二人のときは名前。それ以外は通り名か、あだ名で」
「はい……カーテルさん」

さて、私の今までの仕事は今日で終わり。
明日からまた前のように働かないと。

「あ、カーテルさん。旅の最中は多分、ギルドで稼ぐことになると思うんですけど、カーテルさんへの報酬は、どうしたら」

ん……ああ、そういう話になってたね、そういえば。

「私も楽しかったし、要らない……と言いたい所だけど、そうだね……報酬は金貨十枚。貯まったらギルドで『個人指定で、ランクFのカミルに依頼したい』ってリユースの名前で依頼すれば、私を呼び出せるから」

「あ、それがカーテルさんへの依頼方法なんですね。わかりました」

……随分とあっさり。

「リユース。君は貨幣の勉強はしてたはずだね。今の報酬随分と吹っつけたはずなんだけど」

「えー？ いや、貨幣価値は知ってても、相場を知らないんで、そんなもんかなって」

「……まあ、そういう事を勉強しに旅に出ると思えばいい。報酬は金貨一枚でいいよ。呼び出し方法はさっきの通り。その内容の依頼を出せば、ギルドも裏の依頼だと判断するから、依頼内容は適当でいい」

「わかりました」

さて、私もそろそろ行くかな。

あ、一つ聞き忘れてた。

「リユース、そういえば複数人と旅に出るなら、自分の実力は出しづらと思うんだけど、それは大丈夫？」

「……………あ」

考えてなかったの……。

「リユースはたまに大事なところが抜けるよね？」

「うつ……はい、重々承知してます。とりあえず、一応は隠しながらやってみます」

「わかった。……もし、何かあったなら、私に依頼を出しなさい。特別価格で受けてあげる」

「はい、ありがとうございます！」

そして私はリ्यूの前から姿と気配を消す。

それにしても……初めて出来た弟子だからかな？
優しく接しすぎた……。

五十一話

(後書き)

話に出てきた、ギルドのランク等は、三章に入ってから詳しくやります。

それと、10/7から若干、設定と内容が変更されてる場所があります。

とはいえ、本編にあまり関係のある伏線でもないので、お暇でしたらご覧ください。

感想お待ちしてます!!

五十二話

(前書き)

セルフ視点です。

五十二話

オレは覚えたての呪文を勢いよく口にする。

「ト ガ タ ホ ビ テ マ ノ タ ヨ ヨ オ テ リ ワ
ノ……！」

「……………シーン」

しかし、本来この呪文で発動するはずの火の魔術は、出てくれなかった。

「だああ……！ 何でも起こらない！？」

「最初に言つたる。魔術は読むだけでは発動しない。必要なのはイメージ。文の意味を理解した上でそのイメージを持って読まなければ、魔術は発動しないんだ」

「聞いたよ！ その文の意味を理解できないから困ってんじゃん！」

魔本とそれに書かれてる魔文字こと、カカカナについてと、その中の真文については最初に説明されたけど、りゅーやんはこの世界に来て、その日で出来たって言つたから簡単かと思つたわい！

オレの文句を聞いたりゅーやんは、ため息を吐きつつ言う。

「大体ゲニーの話だと呪文に隠された真文は、それぞれの呪文を何度も読みこなすことで、自然にたどり着くもので、魔術を一から学ぶ場合、かなりの時間を要するらしいんだ。簡単に出来るわけ無いだろ」

「りゅーやんは一日で……！」

「この文字は元々、俺のいた世界の文字だからすぐ読めただけ。……」

…大体、魔術が普及しないのは、この魔文字とやらを教えられる人が少なかったからだけじゃん。真文については……なんとなく思っていた」

「なんとなくって！ 何か簡単に真文理解する方法あんのか！」「あるよ、教えないけど。いいから文句言わずにゲニーの言うとおりに、何度も読み続けてるよ。そうすれば自然と頭に浮かぶらしいから」

「あるの！？ え！？ 教えてくれないの！？」「うん」

ひどい……。

く……仕方ない、地道にやるかあ！

「トガタホビ」てかさ「うえい！？ なんだい、いきなり！」

「何でそんなゆっくり読んでんの？」

「……………りゅーやんみたいに、早口では言えんよ」

「それほど早口で言ったおぼえも無いけど」

ふん、今に見てる！ りゅーやんの知らないうちに上達して驚かせてやる！

結局、今日まで一回も魔術は発動しなかったあ。

さて、今日は勇者様召喚日。

この国の運命が変わる大事な日さ！

そんな日にオレは……。

「あれ！？ セルフさん！？ ヒノ様と一緒に謁見の間にいると思
ってました！」

「はっはっは！ やあ、ネンちゃん！！ 今オレがここにいる理由
かい？ 寝坊したさっ！！」

ダッシュで謁見の間にたどり着く。

恐る恐るドアを開くと、

「君も魔王討伐を手伝ってくれと聞いた！ 一緒に頑張ろう！！」

と、誰かがりゅーやんに話しかけていた。

うお！ 誰だあのかっこいい奴……って、話の流れ的に勇者様に
決まってるか。

大体話も終わったみたいなので、こっそりりゅーやんのそばに行
くと、ずれた事考えてるっぽかったから、つい突っ込んでしまった。

その後気づいたんだけど………りゅーやんの隣にいるその
かわいい子、誰？

後から来たから、どういふ状況つかめず、さらになんとか誰かに尋ねづらい感じ。

そしてオレの疑問は解決することなく、謁見の間に集まった人たちは、各自の持ち場に帰っていった。

とりあえず自分の部屋にもどって、うっかり寝坊してしまった自分を罵っていると、

コンコン

と、ノックが聞こえた。

「はいはい？」

「セルフさん。リユーヤさんがお呼びです」

「りゅうやんが？　なんだろ……」

はっ！！　まさかあのかわいい子を紹介してくれるじゃ！？

「今から行くわー！」

待っていてください！　今、逢いに行きますー！！

「ってことで、ここ数日のうちで旅に出ることになったからー」

…………… ええ？ えっと、何がどうなってそうなった？

えっと確か、りゅーやんの部屋に入ると、案の定、その女の子もいて、紹介か！ …… って思ってたなら、オレの後にすぐ、スクードの旦那がレイちゃんに連れられて入ってきた。

そしたら、座らされて、さっきまでの国王様との話し合いの内容を聞かされて……今のセリフ。

おけー、状況は整理できた。

「って事は、そのりゅーやんの旅にオレとスクードの旦那も同行することになったと？」

「うん、それとこいつもだけど。何か、前衛いないと駄目って言われたからスクードが抜擢。つか、セルフ。お前は立場上は俺の従者なんだからお前がついてくるのは当たり前だろ」

あ、そっか。

「どうして俺なんだ？」

とここで、旦那が質問。

「リッターさんの推薦。まあどっちにしても一緒に旅するならスクードしかないだろ」

りゅーやんが何気なくそういうと、旦那はうれしそうに口元を歪ませた。

「わかった。俺は全力でお前を守ろう」

うん、旦那の決意はいいんだけど、それより気になるのが。

「んで、りゅーやん。その旅に同行するって言う、かわいい子は誰さね？」

オレがずっと聞きたかったことを口にする、

「誰って……お前もしかして召喚の場にいなかったのか？」

「うっ！！」

痛いところを突かれた。

「じ、実は寝坊で……」

「はあ……こいつは「龍也、自己紹介なら自分ですよ」……おお」

「僕は蒼井樹。今回の勇者召喚で巻き込まれた一般人。さっき言った通り、旅に同行させてもらうよ。今のところ特に秀でた力は無いから足を引っ張るかもしれないけど、頑張る。よろしくね」

アオイ・イツキと名乗ったこの子は、ニコツと笑いながらよろしくと言った。

そっか、イツキちゃんかあ……あれ、どっかで聞いた気も。まあいいや。

「おう！ よつろしくー！！」

オレは元気よく返すが、隣では旦那が驚いていた。

「リ्यूーヤ！ 旅に同行とは、本当か？ 大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。まあ、不安ならスクードも守るのを手伝ってくれや」
りゅーやんは妙に自身ありげに答えた。

よくわからんけど、俺が守ってあげれば好感度アップだな。

が、ここでオレが予想だになかった事が起きる。

「うむ……りゅーや、その、召喚の際見てたから大体わかるが、一応確認させてもらいたい。彼女との関係は……？」

え？ 召喚の際？ 何？ 関係？

「あー……？ えーつと……？」

りゅーやんが言いよどむ。

そんなりゅーやんにイツキちゃん
が近寄って、

きゅっ！

と、腕に抱きつきうう言い放った。

「それは想像に任せるよ」

え え え え え え え え え え え え ! ! ! ! ! ! ?

五十二話

(後書き)

感想お待ちしております。

五十三話

(前書き)

スクード視点です。

でも、最後は別人物の視点にかわります。

五十三話

リユーヤから旅の話を聞いた次の日。

——また随分と間の悪い場面に遭遇したな……。

「団長！ お話があります！」

「ん？ ああ、アイデアか、なんだ？」

それは俺の先輩に当たり、女性ながら騎士として成功し、今や副団長の座についているアイデアさんが、団長に話しかけているときだった。

「勇者様に団長が付き、修行を見るのはわかります。ですが、もう一人の異世界人である、ヒノ・リユーヤ様の旅立ちに同行するのがルグレ・スクードなのですか！？」

「……俺があいつを適任だと押した。スクードは騎士の中では一番リユーヤ様に打ち解けている」

「それは出会いが早いかな遅いかです！ ルグレは確かに着々と実力をつけているとは思いますが、まだまだ未熟です。奴よりも私のほうが……！」

「……言いたい事はわかった。だが、わかっているだろう？ マ・ハト・アイデア。お前ではリユーヤ様の信用に値しない」

「……っ！！ それなら、奴も同じです！！ 奴は兄に……いえ、ガイラにそそのかされ、ヒノ様を襲った者たちの仲間ではありませんか！！」

「それは、リユーヤ様本人が許されたことだ」

「ならば何故私は駄目なのです！！ 私は何もしていない！！ ガイラと言う男がした事に私は関係ない！！！」

「わかつている。リユーヤ様に言えば恐らく特に反発はしないだろう。だが、リユーヤ様がマハトと言う名にいい印象を持ってないのも確かだ」

「それを私に、ヒノ様の持つ当家の悪い印象を払拭させてください！！」

話は俺ではなく、自分をリユーヤの旅の同行者にしてくれと言うもの。

……姿は見えないが、声から察するに、彼女は必死に頼み込んでいる。

自らの家のため、そして自分のプライドのために。

事実、彼女のほうが俺より実力があるのは確かだ。

イデアさんの剣の腕は、騎士の中でもトップクラスとされている。俺も何度も指導を受けてきた。

そして聞く限り、イデアさんが俺を反対する理由は、もっともだ。確かに俺は、許されたとは言え、彼に刃を向いた。

それは紛れも無い事実だ。

だが、団長はそんなアイデアさんの必死の願いを打ち払った。

「駄目だ。これはもう決定した事。変える事は無い」

「——っ！……！！ 失礼しますっ！……！！」

彼女はそこから離れていった。

幸い、こちらに歩いてくる事はなかったので、ホッと一息ついていると、

「……スクード、盗み聞くなら気配はもう少し消せ」

ビクッ……！！

団長に声をかけられた。

静かに団長の前に歩く。

「……気づいておられたんですか」

「当たり前だ。それで？ 何故そんな顔をしている」

「……いえ、アイデアさんの言われた事は、的を射ている事でしたので」

「だからなんだ、自分でなくあいつを押せとも言つつもりか？」

「……それは……」

言いよどむ俺を見て、団長は一つため息を付いた。

「お前があの時ガイラと共にリユーヤ様を襲撃したのは、それが正しいと思つての事だったんだろう？ リユーヤ様はそれがわかつてるから、お前たちを許したはずだ。ガイラはやりすぎなんだ」

「……いえ、あの時の俺はただ、流れる噂を、そしてガイラさんの言葉を信じて行動しただけでした。信頼していたガイラさんの言うことだから正しい、と。そこに俺の正義はありませんでした」

「それでも今は違う。そうだろ？」

「はい……ですが、それとアイデアさんが外されるのは関係ないと俺も思つてます！」

俺の言葉に団長は、頭を一掻きし、再度ため息をついて話し出した。

「……実はアイデアを外し、お前を押した理由はまだある」

「……え、それは……？」

「リユーヤ様は旅に出た後、ギルドで稼ぎながら生活していくつもりだと言った。ならば必要になるのは、ギルドを知る人間だ。……それは、貴族や名家の教育で騎士入りした者ではなく、俺やお前のような下町の……それこそ冒険者上がりだ。今、この城にいる冒険者上がりの騎士で実力があるのは、俺を除けば、お前以外いないと考へてる。……身分など差を明確にしたくなかったから、言つつもりはなかったのだが」

「団長……」

俺は団長にここまで実力を買ってもらえているとは思ってなかった。

リユーヤが来るまでは、ガイラさんにただ付き従っていただけで、大して功績を残した事もなかったからだ。

そんな俺を……。

なら俺がその期待に応える方法は、

「団長……！　ありがとうございます！　俺は精一杯やらせていただきます……！」

「ああ、リユーヤ様に迷惑をかけない程度に頑張れ」
「はっ……！」

団長と別れ、自室に戻る。

「旅の支度をせねばな」

——一方、マハト・イデアは——

「……どうしてわかってもらえないのか……っ!!」

私は団長に対する苛立ちを隠せず、早足で自分の部屋に向かう。

——あの事は、ガイラが勝手にした事で、私は……マハト家は関係ないというのに……！

苛立ちで冷静な判断ができたなかった私が、何も考えず歩いてい
ると、

ドンッ!!

「うわっ!!」「きゃっ!!」

曲がり角から人が飛び出してくるのに気づかず、激突してしまっ
た。

——騎士としていつも周りに気を配っていたと思っていたのに、
恥ずかしい……

「あ、す、すみません……」

自分の不甲斐なさを恥じていると、ぶつかった相手に謝られてし
まった。

「いえ、こちらの不注意です。申し訳な……え……?」

謝罪しようとその相手を見ると……、

「？ 大丈夫ですか……？」

「ゆ、勇者様……」

昨日召喚されたばかりの勇者様だった。

五十三話

（後書き）

うん、フラグも立て終わりました。

えー、とりあえず、ここまでで二章は終わりの予定です。

「視点、こいつもやってくれ！」など、何もなければ、次からは三章、旅の話になって行く予定です。

感想お待ちしてます！

五十四話（前書き）

三章スタートです……が、携帯で章分けが出来ない……（
、
）
・
ω
・

五十四話

ゲニーの話が聞かされ、イライラ状態のまま部屋に入る。

すると、ニヤニヤ顔の樹と、オロオロしている新堂君が。

「何してんだ？」

「お帰り、龍也」

「ひひひひひひひひひひ野さん!？」

新堂君、
どもりすぎ。

新堂君の様子を不思議に思いながらも、ふと別の場所に目を向ける。

すると、壁には大量の穴ぼこが。

.....

俺が壁を凝視してるのに気づいた二人が勢いよく話しかけてきた。

「ひ、日野さん、ごごめん、えっと、蒼井さんに僕の実力を見せるために……」

「勘違いされそうな事を言わないでくれたまえ、創一。僕はそんな事は一言も言っていない」

「んな！！　い、いったよ！　僕が能力が何かって聞いたじゃ「そう、僕は君の能力を聞いただけ、誰も実演してくれとは言っていないよ。言葉で説明すればいいだけじゃないか？　その後の剣に纏わす

とか言うのは口で説明できてたし」……そ、それは……」

……俺がボーっと壁を見てるうちに新堂君が追い詰められてる。
元々この部屋は俺の部屋じゃないし、誰かに怒られる事を懸念して
るなら、この城に人だと思っただが。

あー……でも、これをレイさんが見たら、悲しまれるかも。

あの人、掃除が一番気合入れてたし。

でも、何か気になる単語も聞こえた気もするが……？

「あのさ」

「はははははい！！！！ 何でしょうか！？ 日野さん！！！」

新堂君、どもりすぎ。

後ろで樹がめっちゃ笑ってるぞ。

「壁の件は後で話すとして、能力って……？」

その後、新堂君の能力説明を聞き、納得した俺は、明日旅立つ事
を関係者に伝えに行く事にした。

ん？ 壁の件？ それはまあ……ね？

ちょうど話が終わったすぐ後、掃除のために入ってきたレイさん
に全部お任せしました。

いやー……俺の部屋の惨状を見たレイさんは、笑顔だったね。

それもすつごく冷たい。

とりあえずレイさんと新堂君を部屋に残して、樹と二人で出たよね。

そして新堂君にも黙禱を捧げたよね。

さて、まず知らせるべきは同行者か。

まずはセルフの部屋に入る。

「セルフいるか？」

「んあ？ りゅーやか。どうしたい。旅に日時決まった？」

「ああ、明日午前中に出る」

そう言うセルフは少し驚いた顔をして、

「おお……急……でもないのか」

「ああ、少し遅いくらいじゃね？」

「龍也がもたもたしてるからね」

「うるせい」

「君は僕がいなくて何も出来ないよ。だからずっと一緒にいてあげよう」

「何も出来なく無いわ！ 程々にやってけるわ！」

「ぶくくくつ、自己判断と言うのは甘くつけてしまうものだね。まあ心配しなくても、僕が大事にしてあげるよ」

「妙な含み笑いやめれ！　つか、何も出来ない子供みたいな言い方すな！」

と、樹にからかわれてると、

バシッ！！

セルフに頭叩かれた。

「何すんだよ！　てかお前従者だろが」

意味もわからん暴力に文句を言うが、セルフは俺をジト目で睨みつけ、

「あーあ！　オレはめちやくちや仲いいメイドさんたちに、別れを惜しまれてくるわあ！　りゅーやんと違ってオレはいろんな女の子に人気だしなあ！」

いきなり自慢話をしながら、去っていった。

何なんだ、一体……。

大体俺だって、レイさんの話だとメイドさんたちにも意外と人気があるらしいんだぞ！

すると、

バシッ！！！！

今度は樹に頭叩かれた。
セルフより強く。

「いてえ！！ 何なんだお前も！」

「……………いや、不快な思考を感じ取ったんだ。気にしないでくれたまえ」

「なんだそりゃ！ 気にするわ！！」

叩かれた頭をさすりながら、スクードの元に向かう。

「いよいよか！！ リューヤよ。俺はやるぞ、必ずお前の役に立つてみせる！！」

「お、おお……………」

……………何かスクードはすごいやる気だ。

何かあったのか？

俺が不思議に思っていると、樹が尋ねていた。

「どうしたんだい？ スクード。すごいやる気だね」

すると、スクードは顔を輝かせて、答えた。

「ああ！ 俺は団長の期待を背負っている。絶対にお前らを守ってみせるさ」

「うん、頼りにしているよ」

樹が笑顔で言う。

まあ、やる気があるにこしたこと無いし、しっかりスクードを頼っていいこうか。

次は………… 王様、かな。

「そうか、明日、旅立つか」

「はい、明日からおよそ一ヶ月。この城外の事を色々知ってきます。勇者様の旅立ち前には戻る予定です」

嘘です。

すぐに元の世界に戻るなら戻ります。

あ、その場合新堂君どうしよう……やっぱり、連れてったほうがよさげ、だよね？

「元の世界に戻る方法がわかったら、創一を連れに戻ってくればいいじゃないか。それから帰る。渋るようなら気絶でもさせればいいと思うよ？」

俺が悩んでいると、ボソッと、樹が小さな声で言った。

……あなたは何ですか？ 心が読めるんですか？

「さてね」

………さいですか。

王様は、俺たちの様子に気づいてないようで、少し考え込んだ後、口を開いた。

「……旅に出る前に、もう一度聞きたい。本当に行くつもりか？」

「ええ、何時までも城に引きこもっているだけじゃ何も知ることは出来ませんから」

「……………そうか」

何やら王様にも思ふところはあるようだが、この王様も基本はゲ二側の人間だ。

それは、魔族騒ぎの時に理解してる。

俺が王様の次の言葉を待っていると、隣の樹が口を開いた。

「とりあえず、僕たちは勇者ではないですから、盛大に見送り、とかはいらないですよ？ 人知れずこっそり行くつもりですから、あまり他人には言わないでほしいです。ね？ 龍也？」

「あ、ああ」

そう言い、樹は目で肯定しろと言ってたっぽいので、そうしたが……………なんだ？

そして、その言葉に、王様は眉間に皺をよせている。

……………なんなんだ？

「えっと、とにかく明日朝出ますので、失礼します」「失礼します」

そそくさと、王室を出た俺たち。

気になるのでさっきの会話の意味を聞いてみる。

「樹、さっきのさ」ああ、なんか君がああ王様の事を警戒してるっ

ぽかったから「……どういうことだ？」

……俺が何を聞きたいのかを察してたのか、かぶせて答えてきた。

まあいい、それよりも意味が、ちとわからん

「うん、説明するから聞きたまえ。君が思ってるとおり、多分あの王様は、龍也のことを出来る限り利用したいと思ってるはず。だから本当は君を旅になんて出さず、手元に置いておきたいのさ。でもそれが出来そうにないから、君の旅立ちを大々的に、それこそ各国に知らしめるように送り出したがった。……君がどこかに逃げてもすぐに見つかるようにね」

なるほどねー、あの会話にそんな意味が込められてるとはな。

しかし、こいつは化け物か。

王様に会ったのは数えるぐらいしかないはずなのに、もう王様の行動を読み始めてる。

ほんと、味方でよかった気がする……。

五十四話（後書き）

えー、以前に活動報告で書いたとおり、二章のオマケみたいな話でした。

今後の更新も遅くなるかもしれませんが、見捨てないようお願いします！

五十五話（前書き）

……やつと城外へ。

五十五話

次の日の早朝、それも夜が明けて間もない頃に、セルフとスクードをこっそり起こし、すぐに城を出発した。

セルフは「早すぎるだろい」とか文句を言われたが、文句なら樹に言え。

原因は樹がそう言ったからだ。

理由に関しては、何やら思わせぶりな言葉で誤魔化されたが、とりあえず、今までの経験上、言うことを聞いておいた方がいいんだろう。

そのまま二人を連れ、すぐに城を出ようとしたら、門の前にレイさんと、何故かゲニーが待っていた。

ゲニーには時間までは話してないはずだが。

レイさんは、驚くことに、俺たちがいつ城を出るかわからなかったから、夜が明けてからずっと見送りの為に待ってたらしい。

そ、そこまでしていただかなくても……。

レイさんにはお見送りの言葉と御守りだという水晶を貰った。

めちやくちゃ嬉しい……！

最初はあるなに怖がられてたのに……。

感動に浸っていると、セルフに舌打ちされ、樹に後ろからつねられた。

ひ、ひでえ……。

ゲニーは、俺たちの行動など簡単に読めると高笑いした後、なにやら怪しげな袋を押しつけてきた。

何でも、ゲニーが作った魔陣式がいくつか入ってるらしい。

いらなから途中で捨てようと思ったが、それはそれで、周りの人に危害が及びそうなので、セルフに渡しておく。

そして今、俺は城下町にいる。

「へえ、こんなんなのか、町つてのは」

うーん、昔テレビで見た外国の市場みたいな感じだな。

俺が初めて見た、城以外の風景を観察していると、スクードが口を開いた。

「とりあえず……まずはギルドか」

おお、ファンタジーの定番、ギルド。

どんなところなんだろうか。

「その前に腹減ったぜい……飯にしよう」

む、セルフ。お前俺をじらすつもりか。

まあ、実際俺も腹減ってるし、いいか。

「つて、金は？」

「ああ、団長から多少預かってきている。とはいえ、何もしなければ一週間ももたんだろ？」

まあ、ギルドで稼ぐ予定だって言ってるからそんなもんか。

「そつか。んじゃセルフの希望通り飯にしよう。どっかおすめはあんのか？」

「それならオレが安くてうまい店知ってるぞ！」

「満腹だわー！」

セルフは店を出てすぐ叫んだ。

恥ずかしいからやめなさい。

しかし、こういうのはよくあることなのか、周りの人らはスルーだった。

セルフの紹介の店は、確かに安く、味も満足できるものだった。ただ明らかな野郎向けの店で、ボリュームがハンパなかった。いや、この量と味で四人前、銅貨十枚って爆安なんだけどさ。

……向こうの値段だと四人前で千円……。

大丈夫なのか？ この店。

……まあ、いいか。

「さて、腹ごしらえも済んだし、冒険者ギルドとやらに行くか」

「ああ、さつさとギルドカードを作ってしまったおう」

「ん、ギルドカード？」

「ギルドカードとは、依頼を受諾するのに必要な身分証だ。ギルドに行けば作成できる」

あー、何かレイさんがそんなこと行ってたような気も。

「身分証ってことは、全員分必要か？ てか、作るのに金いる？」

「とりあえず戦闘出来る人間は作ったほうがいいだろう。俺は以前使っていたものがある。だから……リユーヤとカバリオのものを作ればいい。金は作成時には必要ない」

樹の名前を入れなかったところに、なんとなく樹をどう扱うか戸惑ってる感が現れてる。

樹もそれに気づいたのか、苦笑いだ。

「セルフはギルドカード持っていないのか？」

「んあ？ オレは引きこもって魔陣の勉強ばかりしてたからな。城にくるまでほとんど外に出てない」

「……どやって生活してたんだよ」

「いやーたまに外出ては女の子に声かけて、世話してもらった！」

「シネ」

まったく、何故こんなの世話焼く女の子がいるんだ……。羨ましい。

「セルフはバカっぽいけど、基本的にスペックは高いからね。見た目とか。……それより龍也、ちょっと叩くからこっちに来たまえ」

何故!?

現在進行形で俺の頭をペシペシ叩く樹は置いて、話を元に戻そう。

「んじゃ、さつさとギルドに登録しに行くか」

俺がそう言つと、スクードは不思議そうな顔で、

「リユーヤ、登録するのか？」

と、尋ねてきた。

「え、しないの？」

「俺としては、カードを作るだけの予定だったんだが」

「へ？ それは登録しないとできないんじゃないのか？」

「何を言つて……ああ、すまん。リユーヤが異世界から来たことを忘れてた」

「？ どういう事だ？ 俺今なんか常識知らずなこと言つたのか？」

「まあ……ギルドに着いたら話す。それが一番わかりやすいしな」

……よくわからんが、まあ、ギルドに行けばわかるなら行くさ。

元々そのつもりだったし。

俺の知ってるファンタジー小説だと、ギルドの受付はかわいい女の子か、豪快なおっさんなんだよな。
ちと楽しみだ。

出来ればかわいい女の子が……………。

……………。

「樹、痛い。さっきから叩く威力上がってる」

「知っているよ。ワザとやっているんだから」

……………何故……………。

五十五話（後書き）

あ、いえ樹の能力は読心系ではありません。

こと龍也に関しては、元の世界からこんな感じです。

感想お待ちしております！

五十六話（前書き）

とりあえずギルドです。

説明多し、です。

多分ギルドにいる間はほぼ説明ターンかと。

五十六話

え……ええー……。

「ギルドカード作成なら、その紙に必要事項書いてこっちに渡して。その後、魔力を注いで終わり」

現在、冒険者ギルドの受付にいるんだけど……。

「書いたならこの玉に魔力注いで。これでそのギルドカードが自分のものだという証明になるから」

受付はかわいい女の子なんだけど、めちゃくちゃ無愛想だ……。何か、来てる人間に全く興味が無いような感じがした。

俺たちはいったん受付から離れ、スクードに声をかけた。

「すごいな、接客をする気が見られないぞ……」
「そうだな。そもそも冒険者ギルドと言うのは、ただの冒険者に対しては、ひたすら事務的に、必要な事だけを淡々と手短に終わらせるのだ」

含みのある言い方に、俺が質問した。

「ただの？ ってどう言うこと？ 普通の冒険者じゃないのがいるというか？」

「……口で説明するより、見せた方が早いな」

そう言つと、スクードは受付に近づいていく。

「……………用件を」

「ああ、俺はギルドランクDのルグレ・スクードだが、ギルド登録についてなんだが」

スクードが『登録』の一言を出した瞬間、無表情無愛想だった受付の女の子が、一瞬にして輝くような笑顔になった。

「はい！ ギルド登録ですね？ 確認のためカードをお預かりいたします！ ……はい！ 確認が取れました。Dランク、ルグレ・スクード様！ 早速登録でよろしいですか？」

「いや、登録の条件などを詳しく知りたかったんだが」

「はい！ Dランク以上の方は登録の資格を得まして、それから実力試験に合格されましたら、晴れてギルド所属の冒険者でございます！ その他にも、各ギルドのギルド長お一人の推薦状をお持ちでしたら、すぐにでもギルド所属にできますが、お持ちじゃありませんか？」

「ああ、持っていない。……………そうか、実力試験か。今は装備が心許ないな。また機会を改めても？」

「はい！ もちろんです！ では、またのご利用お待ちしております！」

……………え、あれ誰？ さっきの受付の人？
態度が明らかに違うんだけど。

そうこうしてる間に、スクードが戻ってきた。

「見ての通り、ギルドとしては、ギルド所属になっている冒険者を優遇するんだ」

俺とセルフがまだポカンとしてると、軽く考え事をしていた樹が口を開いていた。

「今の話だとギルドは実力のある冒険者を引き入れてるようだけど、接客態度以外にもかわらず優遇されることがあるんじゃないのかい？」

「……そうだ。他にも、討伐依頼で手に入った戦利品などの買取、ギルドランクも所属後のほうが上がりやすいらしい。後は……そう、依頼の優先権はギルド所属にあることだ」

すげーな、ギルド所属。

「って、普通の冒険者って戦利品は自分で売りさばかなきゃいけないのか！」

全部ギルドで買い取ってくれるんじゃないのか。

「ああ、普通の冒険者ならな。まあ、新人は大体足元を見られるが、ベテランになれば、自らの信頼がおける商人と独自の交渉をすれば、ギルドで売るよりいい値で売れることもあるんだ」

「へー、でもギルドなら価格は一定で買ってくれるんだよね？　ならギルドに所属できるならした方がいいんじゃないのか？」

だが俺の言葉はすぐに樹が否定した。

「甘いと思うよ、龍也。世の中メリットだけのものなんてない」

スクードもそれに補足するように言う。

「その通りだ。ギルドの所属冒険者はその優遇点の代償として、基本的にギルドの言いなりだ。ギルドに何か不利益なことがあれば、所属の冒険者に始末をさせ、いいように使われる。そして、さつきも言ったが、依頼の優先権は所属冒険者にある。だから先に普通の冒険者がその依頼を受けていても、後からギルド所属がその依頼を受ければ、依頼はギルド所属の冒険者のものになる。故にギルド所属の冒険者は『ギルドの狗』と呼ばれ、他の冒険者から疎まれる」

「……………なるほどね」

「それに所属となれば、大抵は一定のギルドに駐在する事になる。その駐在する国もギルドが決めてしまうから、自分の好きな時に動くことができないんだ。俺たちの旅にはそれはまずいだろう。……それと、事実かどうかはわからんが、黒い噂も流れているしな」

「黒い噂？」

「……………それはここで話せることではないだろう。また後でだ。とにかく、ギルドの所属はやめておいたほうがいい」

「わかった……………でも、他の冒険者はどうなんだ？ やっぱギルドの言いなりは嫌でギルド所属にはならないのか？」

「……………そうだな。やはり冒険者と言うのは基本自由を好むからな。あまりギルド所属にはなりたがらない。ただ、ギルド所属に一人、

名のある冒険者がいて、そいつに憧れてギルド所属になる者も意外
といるんだ」

「……へえ……」

やべ、今の何か地雷くさいな。

いずれその冒険者に巻き込まれそうだな……悪い風に。

とりあえず今は忘れておこ。

五十六話（後書き）

矛盾点、ご指摘などありましたら、お願いいたします。

感想もお待ちしてます！

五十七話 (前書き)

話は少し戻りまして、レイさん視点です。

五十七話

勇者様が召還されたその日、リユーヤさんはお一人の女性と部屋に戻られました。

その女性はとても可愛らしい方で、私は彼女が勇者様で、リユーヤさんの恋人なのだと思います。

ですが話を聞くと、彼女——イツキさんは勇者様とは別のようでした。

ただお二人から感じる独特の雰囲気、私はすぐに部屋を出ようとしたんですが……どうやらイツキさんにここの常識を教えるのを私に手伝ってほしいとのこと……。

……それはかまわないんですが、この感じだと絶対お邪魔だと思っ
うんです。

イツキさんも笑顔は笑顔でしたけど、リユーヤさんに何やらプレッシャーを与えてますし、リユーヤさんはそのプレッシャーに全く気づいていないのですか……？

うう……なんか居づらいです。

で、でもわざわざリユーヤさんが私を頼ってくれたんです！
頑張らないといけません！

……あう、私が頑張らなくてもイツキさんは物覚えがよく、少し聞いただけで、すぐにほとんどを理解してしまいました。

すごいです……けど、私が居づらい思いをしてまで残った意味は……。

とにかく一段落致したので、部屋を出ようとした私ですが、またイツキさんに呼び止められました。

そしてこの時、

「龍也は何も考えずに王様に旅に出ると言ってしまったようだ。この城を出た後のアドバイスを貰いたい」

リユーヤさんがとうとうこの城を出ることを教えられたのです。

「はうー……リユーヤさんが旅に出るなんて……仕方ないことはわかってるけど、急すぎます……」

……ううん、違いますね。急なんかじゃないはずですよ。

多分リユーヤさんは前々から考えてたんでしょう。

勇者様が召喚されたら旅に出ると。

「だったら私は笑顔でお見送りしなきゃいけません！　そして無事に帰ってくるのを祈らなきゃ！　……って私、リユーヤさんが明日のいつ出るのか知らないです！？　それになんか御守りも渡した方がいいですよね！？　でも私何も持ってないです！」

「おい」

「は、はいい！」

テンパっているときにいきなり声をかけられて、すくくびっくりしました……。

誰かと思い、恐る恐る振り返ると、

「貴様に少し話がある」

ブ、ブブブブ、ブーゼ様だ……！
ど、どうして私に……は、話？

「は、はい！ い、かなさいましたか！？」

「リユーヤの旅についてだ」

「リュ、リユーヤさんの？」

「ああ、貴様はあいつがいつ旅立つか知りたいのだろう？」

「ええ！？ どうして……」

「つてさつき私、自分で言っていました……」。

「リユーヤの……いや、あの娘のことだ。どうせ王に盛大な旅立ちなどさせないだろう。だから奴らは早朝、それも夜が明けてすぐぐらいにでるだろう。……待つならその時間に正門で待て」

あ、あの娘……？

イツキさんの事でしょうか……？

あ、それよりも、

「は、い。……あの、どうして私に？」

ブーゼ様は顔を背け、眉間にしわを寄せながら話しました。

「ふん、知つての通り、意味なくリユーヤを召喚したのは私だ。故に私はリユーヤに疎まれている。……だが私も責任を感じないわけじゃない。奴らは誰にもいつ出るかわずに旅立つつもりのようなんだが……せつかくの旅立ちだ。少しくらい見送りがいてもいいだろう」

「ブーゼ様……」

「……妙な眼差しを送るな。それと、ついでだ。先ほど守り具も探していただろう。……これは私が作った特注だ。貴様の手から渡しておけ」

「わあ……！」

渡されたのは綺麗な水晶の御守りでした。

「でも、ご自分で渡されなくてよろしいんですか？」

「先ほども言っただろう。私を疎まれているリユーヤが素直に受け取るわけがない。何も言わずに貴様が渡しておけ。私はそつだな……」

…適当に見繕った魔陣の束でも渡しておこう」

「ふふ、わかりました」

「……何がおかしい。もういい、さっさといけ」
「はい！」

最悪の天才と呼ばれていても、本当はどこか良い心を持っているのかもしれない……。

そんな事を思いながら、私は自分の部屋に戻りました。

後ろで、その最悪の天才が口元を歪めているのに気づかずに。

そして次の朝、言われたとおりに夜が明けてすぐに正門出待っていると、数刻もしないうちに、リユーヤさんたちが現れました。さすがブーゼ様ですね。

私の中に、もうブーゼ様への恐怖心はありません。皆様と同じように接していきます。

そしてリユーヤさんに別れの挨拶と御守りを渡すときがきました。

相変わらずイツキさんはリユーヤさんにプレッシャーを与えて、
今度は若干、私にもきましたか……負けません。

この御守りには私だけじゃなく、ブーゼ様の気持ちも入ってるわけですから！

「リユーヤさん……必ず、無事に戻ってきてください……。私、リユーヤさんの無事を毎日祈りますから！……それと、これ……御守りです。大事にして、絶対に手放さないでくださいね？」

五十七話 （後書き）

龍也の喜びも、ゲニーの手のひらの上……。

しかしレイさん、最初に龍也と会ったときといい、人の言葉をを簡単に信用しすぎです。

……誰か近くにいてあげないと間違いなく詐欺にあうわね、この子……。

感想もらえるとうれしいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6366u/>

そうきたか.....異世界よ.....

2011年11月25日21時07分発行